貝塚市埋蔵文化財調査報告 第48集

脇浜川端遺跡発掘調査概要

1999. 3. 31

貝塚市教育委員会

脇浜川端遺跡発掘調査概要

1999. 3. 31

貝塚市教育委員会

はじめに

わが貝塚市は、北に波静かな大阪湾、南に緑豊かな和泉山脈に接し、恵まれた自然環境を有する地域であります。市内各所には様々な遺跡が存在します。

特に沢、浦田、脇浜地域は遺跡の集中地帯をなし、古くから人々の活発な活動の様子が窺えます。今回これらに加え、「脇浜川端遺跡」という新しい遺跡を発見、調査できたことは非常に貴重なことと考えます。

本書刊行にあたりまして、皆様の文化財に対するご理解を深めて頂くとともに、文化財の保護、保存、研究の一助となれば幸いに存じます。

なお、調査並びに本書作成にあたり、関係各位には多大なご理解、ご協力を頂き、ここに深く感謝申し上げますとともに、今後とも本市文化財保護行政に対する一層のご理解とご支援をお願いする次第であります。

平成11年3月31日

貝塚市教育委員会

教育長　福　井　昱　彦

例　　言

1．本書は、大阪府貝塚市脇浜４丁目 722地内において実施した、農業基盤整備事業に伴う事前発掘調査の概要報告である。

2．確認調査は平成９年３月19日から３月28日、発掘調査は平成９年９月10日から10月20日（第１期）、平成10年７月21日から９月17日（第２期）にかけて実施した。内業整理については、平成10年９月31日に終了した。

3．調査にあたっては、貝塚市役所建設部農林課、土地所有者、地元関係者各位より多大な理解と協力を得た。記して感謝の意を表す。

4．発掘調査は貝塚市教育委員会教育部社会教育課文化財係、学芸員三浦　基（第１期）、前川浩一（第２期）が担当した。

現地・内業調査及び本書作成にかかる諸作業については下記の諸氏の参加を得て実施した。

稲田宏美　川畑乃文　藪　智子　米子千智　宮宇地静佳　南　明美
田所由佳　大石温子　瀬川唯親　河瀬麿宏　西出安芸子

5．本書の執筆、編集は前川が行った。

6．出土遺物、調査記録は貝塚市教育委員会にて保管している。

目　　次

はじめに

例　　言

目　　次（本文目次、図版目次、挿図目次）

Ⅰ　調査に至る経過 …… 1

Ⅱ　位置と環境 …… 3

Ⅲ　調 査 結 果 …… 5

1．調査の概要 …… 5

2．基 本 層 序 …… 6

3．検 出 遺 構 …… 7

第１－１区第２面 …… 7

第１－２区第２面 …… 8

第２－２区東半第２面 …… 8

第２－２区西半第２面 …… 12

第２－１区東半第２面 …… 12

第２－１区西半第２面 …… 13

第２－２区東半第１面 …… 14

第２－２区西半第１面 …… 14

第２－１区東半第１面 …… 14

第２－１区西半第１面 …… 17

4．出 土 遺 物 …… 17

Ⅳ　ま　と　め …… 23

図版目次

図版１　検出遺構
　航空写真第１－１、２区
図版２　検出遺構
　航空写真ＳＤ－２２４０、ＳＸ－２２０４、２２０２、２２４１
図版３　検出遺構
　航空写真ＳＸ－２２０３
図版４　検出遺構
　航空写真ＳＸ－１２０４～１２０６
図版５　検出遺構
　１．ＳＸ－２０１検出状況
　２．ＳＸ－２０１完掘状況
図版６　検出遺構
　１．ＳＸ－２０５検出状況
　２．ＳＸ－２０５完掘状況
図版７　検出遺構
　１．ＳＤ－２０１
　２．ＳＸ－２０５
図版８　検出遺構
　１．ＳＸ－２０３検出状況
　２．ＳＸ－２０３完掘状況
図版９　検出遺構
　１．ＳＸ－２０４
　２．第１－２区鋤溝群
図版10　検出遺構
　１．ＳＤ－２２４０、ＳＸ－２２０４、２２０２、ＳＤ－２２３９検出状況
　２．ＳＤ－２２４０、ＳＸ－２２０４、２２０２完掘状況
図版11　検出遺構
　１．ＳＸ－２２０４
　２．ＳＸ－２２０２
図版12　検出遺構
　１．ＳＸ－２２０４上面
　２．ＳＸ－２２０１検出状況

図版13　検出遺構

1．ＳＸ－２２０１

2．同　　上

図版14　検出遺構

1．ＳＸ－１２０１

2．ＳＸ－１２０２

図版15　検出遺構

1．Ｐｉｔ－１２０８、１２０９

2．ＳＸ－１２０４

図版16　検出遺構

1．ＳＸ－１２０６

2．ＳＸ－１２０５

図版17　検出遺構

1．ＳＤ－２１０２～２１０７

2．同　　上

図版18　検出遺構

1．ＳＤ－１１０３～１１１９

2．同　　上

図版19　出土遺物

SX-2204(１、25～29)、SD-2239(3)、SX-2241(４、5)、SX-1201(８、30)、SX-1102(31)出土遺物

図版20　出土遺物

SX-2202(2)、SX-2203(６、7)出土陶器

図版21　出土遺物

SX-1204出土土器

図版22　出土遺物

SX-1204出土土器

図版23　出土遺物

SX-1204出土土器

図版24　出土遺物

SX-1204(写真上)、SX-1206(16、43)出土土器

図版25　出土遺物

SX-2204出土磁器

図版26　出土遺物

SX-2204(47)、SX-1204(48)、第２区第２層(49、50)、第２区第５層(51、52)出土磁器

図版27　出土遺物
SX-2204(53)、第2区第4層(54)、SX-1109(55)、SX-1204(56)、
第2区第3層(57、58)出土石材
図版28　出土遺物
SX-2203(59、63、64)、SX-1201(60)、SD-1210(61)、側溝(62)出土瓦
図版29　出土遺物
第2区第2層(65～69)、第2区第3層(70～72)出土土器
図版30　出土遺物
SX-201(17、73、74)、SX-202(19)、SX-204(75)、SD-201(18、76、77)出土遺物
図版31　出土遺物
第1区第2層出土遺物
図版32　出土遺物
第1区第2層(21～23、84～89、91)、側溝(92)、精査(90)出土遺物

挿図目次

図1　貝塚市遺跡分布図（部分）
図2　調査地位置図
図3　調査区地区割図
図4　調査区土層模式図
図5　第2面遺構配置図
図6　第1面遺構配置図
図7　SX-2204(1)、SX-2202(2)、SD-2239(3)、SX-2241(4、5)、SX-2203(6、7)、SX-1201(8)、SX-1204(9～15)出土遺物
図8　SX-201(17)、SD-201(18)、SX-202(19)、第2層(20～25)出土遺物

表目次

表1　堆積層、遺構面対照表
表2　出土遺物対照表

Ⅰ　調査に至る経過

貝塚市では、大阪府貝塚市脇浜地内にて平成８、９年度事業として農地基盤整備を計画した。貝塚市建設部農林課より埋蔵文化財の取扱いについて協議の申し入れがあった。

工事予定地は近木川右岸に位置し、周知の遺跡範囲内には含まれなかった。しかし、周辺は本市において遺跡密度の高い地域であり、本予定地においても何らかの遺跡が存在することを想定できた。また、３haもの広大な土地に、縦横に農道、水路の建設を行うというものであり、不時発見による工事への影響は大きいと予想された。

そこで協議を重ねた結果、事前に埋蔵文化財の有無確認のための調査実施について合意をみた。しかし、協議中に事業延期（平成９、10年度事業に変更）となり、計画確定後に確認調査を実施することとなった。

平成８年11月７日付にて農林課より本事業に関する「蔵文化財確認調査の依頼書」が提出され、本格的な協議を開始した。調査については、現状が農地であり、農閑期にしか着手できない、予算等の条件から、平成８年度末実施となった。

確認調査は平成９年３月19日から３月28日にかけて実施した。対象地道路予定地内に、1.5 ×10mの調査区を10ケ所設定した。10ケ所の内、近木川に近い部分、対象地西側に設定した７ケ所の調査区では遺構等は存在せず、東側に設定した３ケ所より、中世～近世と見られる溝跡、遺物包含層を確認した。この結果から、道路、水路部分等遺跡を破壊する部分については、発掘調査が必要との判断となった。

この判断をもとに、事業担当課に埋蔵文化財発見通知書の提出を求め、協議を重ねた結果、遺構等を発見した部分内、道路、水路予定地において発掘調査を実施することの合意をみた。

平成９年４月28日付にて埋蔵文化財発見通知書が提出され、大字「脇浜」小字「川端」をとって、脇浜川端遺跡と命名し、遺跡の新規登録をおこなった。

本体事業が２年度に跨がるため、発掘調査についても２年度に分割し、平成９年度に西側部分（第１期）、平成10年度に東側部分（第２期）を実施することになった。前者は平成９年９月10日から同年10月20日にかけて、調査必要なしと判断した予定地西半の本体工事と並行して実施した。調査面積約315㎡である。後者は平成10年７月21日から同年９月17日にかけて実施し、調査面積約790㎡である。調査面積合計約1,105㎡、調査期間合計約3.5ケ月である。

5 長楽寺跡　7 地蔵堂丸山古墳　8 地蔵堂廃寺　9 下新出遺跡　10 秦廃寺　15 麻生中新池遺跡　16 河池遺跡
19 泉州麻生塩壷出土地　20 堀遺跡　21 橋本遺跡　22 貝塚寺内町遺跡　23 加治・神前・畠中遺跡　28 沢城跡
29 新井・鳥羽遺跡　30 新井ノ池遺跡　31 半田遺跡　32 麻生中遺跡　34 澱池遺跡　35 積善寺城跡
36 清児遺跡　38 高井天神廃寺・高井城跡　43 二ツ池遺跡　51 窪田遺跡・窪田廃寺　55 槍ケ谷城跡
56 半田遺跡(清児地区)　57 堤遺跡　58 小瀬五所山遺跡　59 石才遺跡　60 王子遺跡　61 土生遺跡
64 海岸寺山遺跡　66 脇浜遺跡　67 今池遺跡　70 石才南遺跡　71 名越遺跡　72 地蔵堂遺跡　73 名越西遺跡
75 新井・鳥羽北遺跡　79 王子西遺跡　80 津田遺跡　82 福田遺跡　86 麻生中出口遺跡　87 小瀬遺跡
88 堤三宅遺跡　89 沢新開遺跡　91 堀新遺跡　93 麻生中下代遺跡　94 堀秋毛遺跡　95 半田北遺跡
97 東遺跡　102 津田北遺跡　103 久保遺跡　110 海塚遺跡　111 脇浜川端遺跡

図１　貝塚市遺跡分布図（部分）　Ｓ＝1/25000

Ⅱ　位置と環境

脇浜川端遺跡は今回の農地基盤整備事業に伴う確認調査によって発見した遺跡である。

本遺跡は本市西部、大字「脇浜」に位置し、本市中央部をほぼ縦断して流れる近木川右岸の氾濫原上、河口部から内陸に約800m遡る地点に立地する。標高は3.8～５mを測る。遺跡は氾濫原東端に位置し、近木川からは東に約100m離れる。（図２）

東には都市計画道路堺・阪南線、南海本線が通り、また、紀州街道が南北に通っている。北側、東側は住宅地、工場地となっているものの、西側は近木川に沿って農地が広がっている。

周辺の遺跡としては、近木川右岸、北には、都市計画道路貝塚中央線敷設に伴う発掘調査（昭和60年～平成２年、第１次～第４次）により、縄文時代晩期から近世にかけての遺構・遺物が発見された脇浜遺跡、平安時代末期の寺院跡とされる長楽寺跡、東には本市最大の遺跡範囲を有し、古墳時代から近世にかけての遺構等が検出された加治・神前・畠中遺跡が存在する。左岸は本市における遺跡集中地帯の一つである。平成６～８年、市営住宅建設工事に先立つ発掘調査等において、近世初頭以降の農地開発が明らかとなった沢新開遺跡、中世以来、沢地域の惣墓であった沢共同墓地遺跡、中世集落跡・中世末期の城跡である沢城跡、弥生時代・奈良時代・中世の遺構を検出した沢遺跡、中世後半の集落跡を検出した澱池遺跡、平安時代末期の寺院跡・中世集落が想定される窪田遺跡・窪田廃寺跡が存在する。

周辺は地理的に、中位段丘、完新世砂堆、氾濫原、開析谷、河口部デルタ等複雑な地形を有す

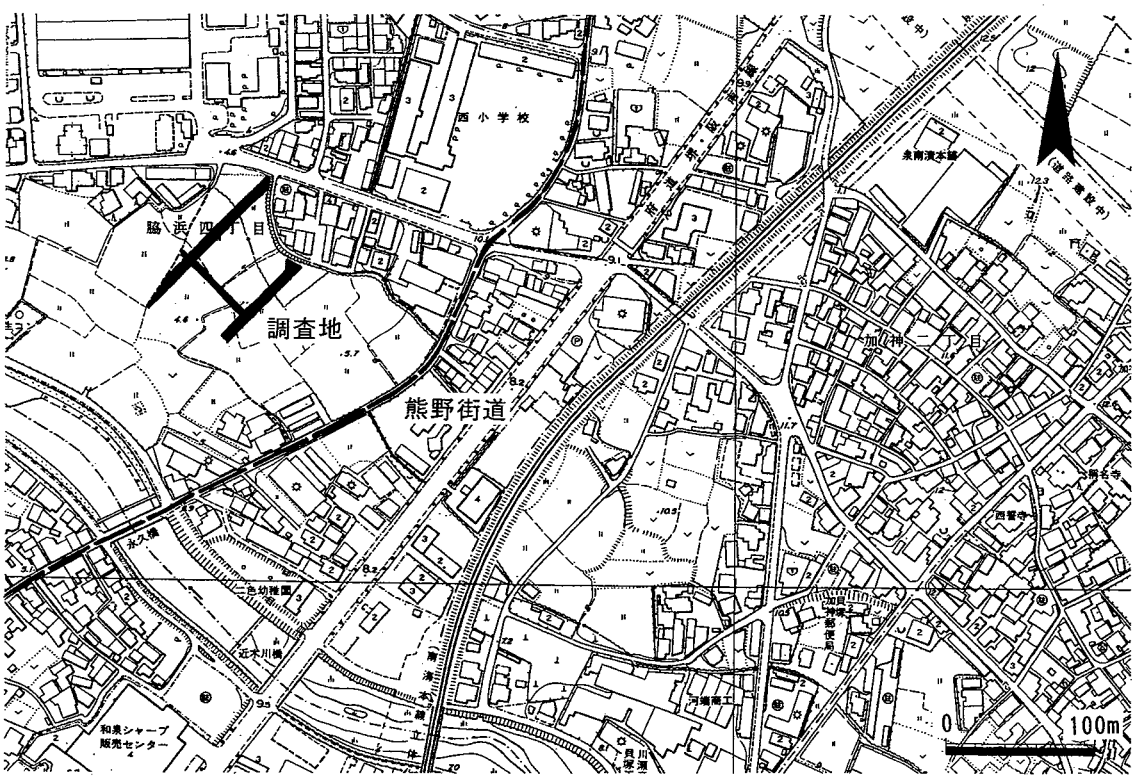


図２　調査地位置図

る地形である。先述した遺跡では、脇浜遺跡、長楽寺跡、加治・神前・畠中遺跡（近木川右岸）、沢城跡、沢遺跡、澱池遺跡、窪田遺跡・窪田廃寺跡（左岸）が段丘上に、その他は砂堆、氾濫原に位置し、安定した段丘上以外、遺跡の状態は良好でないという状況が読み取れる。段丘上では弥生時代以降、集落、農地が造成される。砂堆部等では、中世後半に主に農地として、開発が始まるものの、活発な利用は近世になるという状況である。

しかし、河川が護岸によって安定するのは現代に入ってからであり、氾濫原等、後の地形変化が激しい地域は、現状の遺跡が総てであるとは言えないであろう。

脇浜遺跡では、段丘下の砂積部において、旧石器時代〜縄文時代等古い時代の遺物が多数出土し、古墳時代から近世にかけての遺構が検出されている。縄文土器等古い時代のものは段丘上からの流れ込みである。時代は下るものの、遺構では古墳時代から人々の活動があったことを示している。近木川左岸では砂堆部には沢海岸遺跡等、多数の遺跡が存在する。現状ではこれらの遺跡に対する本格的な調査は実施できておらず、遺構等は明確ではないが、古墳時代以降の遺物が多数採取されている。流れ込みと考えられる摩滅した遺物も多いが、ほとんど摩滅がなく、周辺に遺構の存在が考えられる遺物も多い。

遺跡として確定するのは、近世以降であるが、中世を含め、それ以前についても、人々の活動は見え隠れしており、今後の調査に期待がかかる。

Ⅲ　調　査　結　果

1．調査の概要

発掘調査は工事計画にもとづき、道路、水路設置予定地に総延長 240m、幅は道路部６ｍ、水路部 1.5m、面積 1,105㎡の調査区を設定して実施した。

調査区において、国家座標Ｘ＝－173230、Ｙ＝－59770を起点として、５×５ｍの区画を設け、東西に24区（西からＡ～Ｘ）、南北に24区（北から１～24）とした。（図３）

調査は平成９年度を第１期（第１区）、平成10年度を第２期（第２区）とした。調査区は第１期道路部分（第１－１区）、水路部分（第１－２区）、第２期北側道路部分（第２－１区）、南側道路部分（第２－２区）の４分割とし、さらに、第２期分については、南北に通る水路により分断されるため、それぞれ東半、西半とした。以下、この区分けにて説明する。

調査ではほぼ全面において、中世から近世の溝、流路、農地を検出した。大部分は近世のものであるが、調査区の東端では中世の溝、流路を検出した。

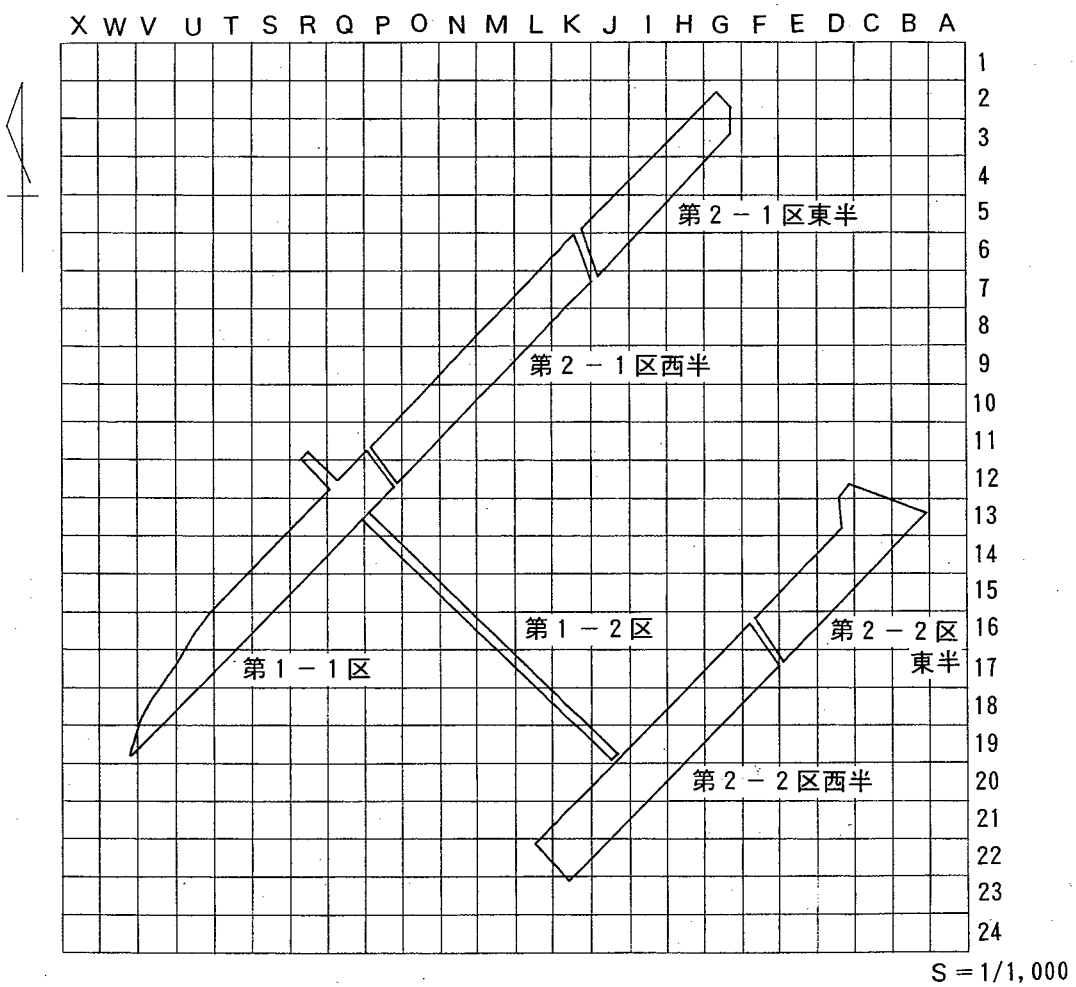


図３　調査区地区割図

2．基本層序（図４、表１）

調査区は６筆の農地に跨がり、東から西にかけて段を持有し下がっていく。段は大きく４つあり、現状標高は、東端5.1m、中央南4.9m、中央北4.5m、西端4.3mを測る。東西間の比高0.8mを測る。

土層の堆積はそれぞれの段によって異なるが、基本層序は大きく６層に分別できる。耕作土の下に、ほぼ全面に広がる褐色土（第２層）、第２－１、２区に広がる黄褐色土（第３層）、第２－２区に広がるにぶい黄橙色シルト（第４層）、第２－２区東端に存在する褐灰色土（第５層）、その下に、地山となる灰褐色砂礫となる。

先の段に応じて、これら土層の組み合わせが異なる。第１－１、２区、第２－１区西半は第２層、第２－１区東半は第２、３層、第１－２区一部、第２－２区西半は第２、４層、第２－２区東半西側は第２、４層、東側は２～５層の堆積となる。なお、各層間で部分的にしか堆積しないもの、厚みの薄いものについては、整地層としてＳＸ番号を付して掘削した。

遺構は各層上面にて精査したが、こちらも土層に応じて異なる。第１－１、２区では第２層の上面、下面（地山面）、第２－１区では第２層の下面（第３層上面）、第３層下面（地山面）、第２－２区東半西側では第２層下面（第４層上面）、第４層下面（地山面）、東側では第２層下

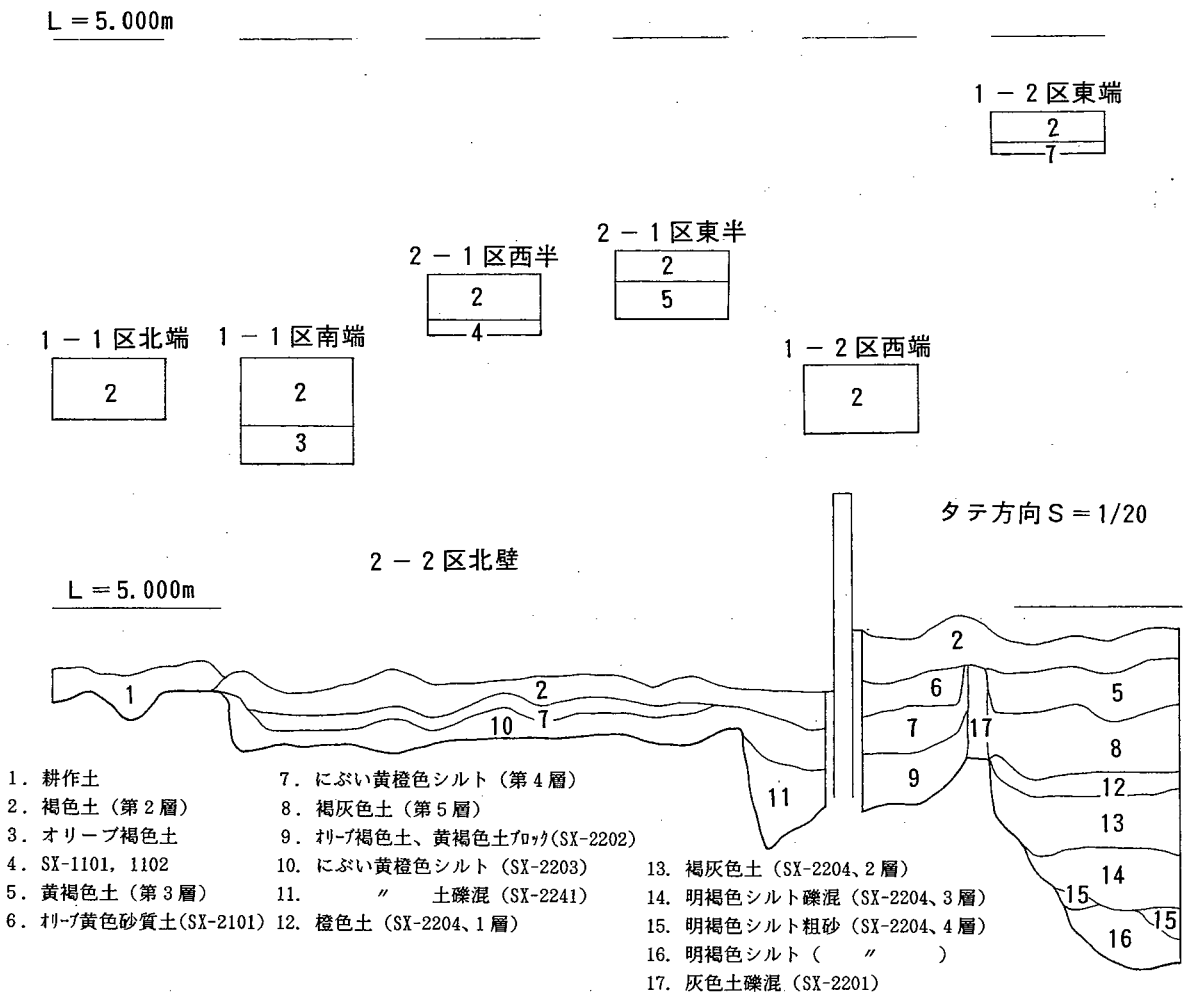


図４　調査区土層模式図

<table>
<tr><td>地区
1-1</td><td>1-2</td><td>1-2 南端</td><td>2-1 西半</td><td>2-1 東半</td><td>2-2 西半</td><td>2-2 東半西</td><td>2-2 東半東</td></tr>
<tr><td></td><td></td><td>耕作土</td><td></td><td></td><td>耕作土</td><td>第２層
黄褐色土</td><td>第２層
黄褐色土</td></tr>
<tr><td></td><td></td><td>第１面</td><td></td><td></td><td></td><td>第１面</td><td>第１面</td></tr>
<tr><td></td><td></td><td>第２層
黄褐色土</td><td>耕作土</td><td>耕作土</td><td>第２層
黄褐色土</td><td>第４層
にぶい黄橙色
シルト</td><td>第５層
褐灰色土</td></tr>
<tr><td></td><td></td><td>第２面</td><td></td><td></td><td>第１面</td><td>第２面</td><td>第２面</td></tr>
<tr><td>耕作土</td><td>耕作土</td><td>第４層
にぶい黄橙色
シルト</td><td>第２層
黄褐色土</td><td>第２層
黄褐色土</td><td>第４層
にぶい黄橙色
シルト</td><td></td><td></td></tr>
<tr><td>第１面</td><td>第１面</td><td></td><td>第１面</td><td>第１面</td><td>第２面</td><td></td><td></td></tr>
<tr><td>第２層
黄褐色土</td><td>第２層
黄褐色土</td><td></td><td>1101、1102</td><td>第３層
黄褐色土</td><td></td><td></td><td></td></tr>
<tr><td>第２面</td><td>第２面</td><td></td><td>第２面</td><td>第２面</td><td></td><td></td><td></td></tr>
</table>

表１　堆積層、遺構面対照表

面（第３層上面）、第５層下面（地山面）、第２－２区西半では第２層下面（第４層上面）、第４層下面（地山面）にて遺構を検出し、それぞれ前者を第１面、後者を第２面とした。なお、第２－２区東半東側第５層上面には遺構が存在しない。また、第１－１、２区の第１面については、遺物等の検討から現代のものであると判明したため、今回の報告では割愛する。

３．検出遺構

調査では、近世の流路を中心に多くの遺構を検出した。細長い調査区に対して直行する形で多くの遺構を検出したため、全体規模の判明するものは少ない。第１期（第１区）より説明するが、上下に切合関係をもつものが多く、成立順に下層遺構より説明する。

第１－１区第２面（図５）

ＳＸ－２０１（図版１、５）

本遺構はＰ、Ｑ－12、13区にて検出した畑地である。調査区外に広がるため全体の規模は不明だが、検出幅1.6m、深さ0.1mを測る。小畦に区切られた８区画を検出した。畦埋土はオリーブ褐色土、区画埋土はオリーブ褐色砂礫である。方向は座標北に対して東に48°振る北東、南西である。遺物は陶磁器が出土した。

ＳＤ－２０１（図版１、７）

本遺構はＱ～Ｓ－13～15区にて検出した畑地である。調査区外に広がるため全体の規模は不明

だが、検出幅1.6m、深さ0.1mを測る。畦に区切られた３区画を検出した。畦埋土はオリーブ褐色土、区画はオリーブ褐色砂礫である。方向は座標北に対して東に33°振る北東、南西である。遺物は陶磁器が出土した。

ＳＸ－２０５（図版１、６、７）

本遺構はＳ、Ｔ－14～16区にて検出した畑地である。調査区外に広がるため全体の規模は不明だが、検出幅1.7m、深さ0.05m、長さが判明するものでは4.9mを測る。畦埋土はオリーブ褐色土、区画はオリーブ褐色砂礫である。方向は座標北に対して西に37°振る南東、北西である。遺物は陶磁器が出土した。

ＳＸ－２０３（図版１、８）

本遺構はＴ、Ｕ－16、17区にて検出した畑地である。調査区外に広がるため全体の規模は不明だが、検出幅5.2m、検出長４ｍ、深さ0.2mを測る。大区画１つのみである。畦埋土はオリーブ褐色土、区画内はオリーブ褐色砂礫である。方向は座標北に対して西に37°振る南東、北西である。遺物は陶磁器が出土した。

ＳＸ－２０２（図版１）

本遺構はＵ－17区にて検出した畑地である。調査区外に広がり、攪乱等に切られるため、全体の規模は不明だが、検出長2.7m、深さ0.1mを測る。畦埋土はオリーブ褐色土、区画はオリーブ褐色砂礫である。方向は確定できないが、検出部分では203と同じである。遺物は陶磁器が出土した。

ＳＸ－２０４（図版１、９）

本遺構はＵ～Ｗ－16～18区にて検出した段である。検出長18.5m、比高0.35mを測る。にぶい黄褐色粗砂礫によって嵩上げされている。東から西に下がる。近世段階に嵩上げされたものと見られる。遺物は磁器、瓦片が出土した。

第１－２区第２面（図５）

鋤溝群（図版１、９）

これらはＪ、Ｋ－18、19区にて検出した鋤溝群である。検出長１～1.5m、幅0.1～0.2m、深さ0.05mを測る。方向は座標北に対して南北である。埋土は褐色土である。遺物は陶磁器が出土した。

第２－２区東半第２面（図５、６）

ＳＤ－２２４０（図版２、10）

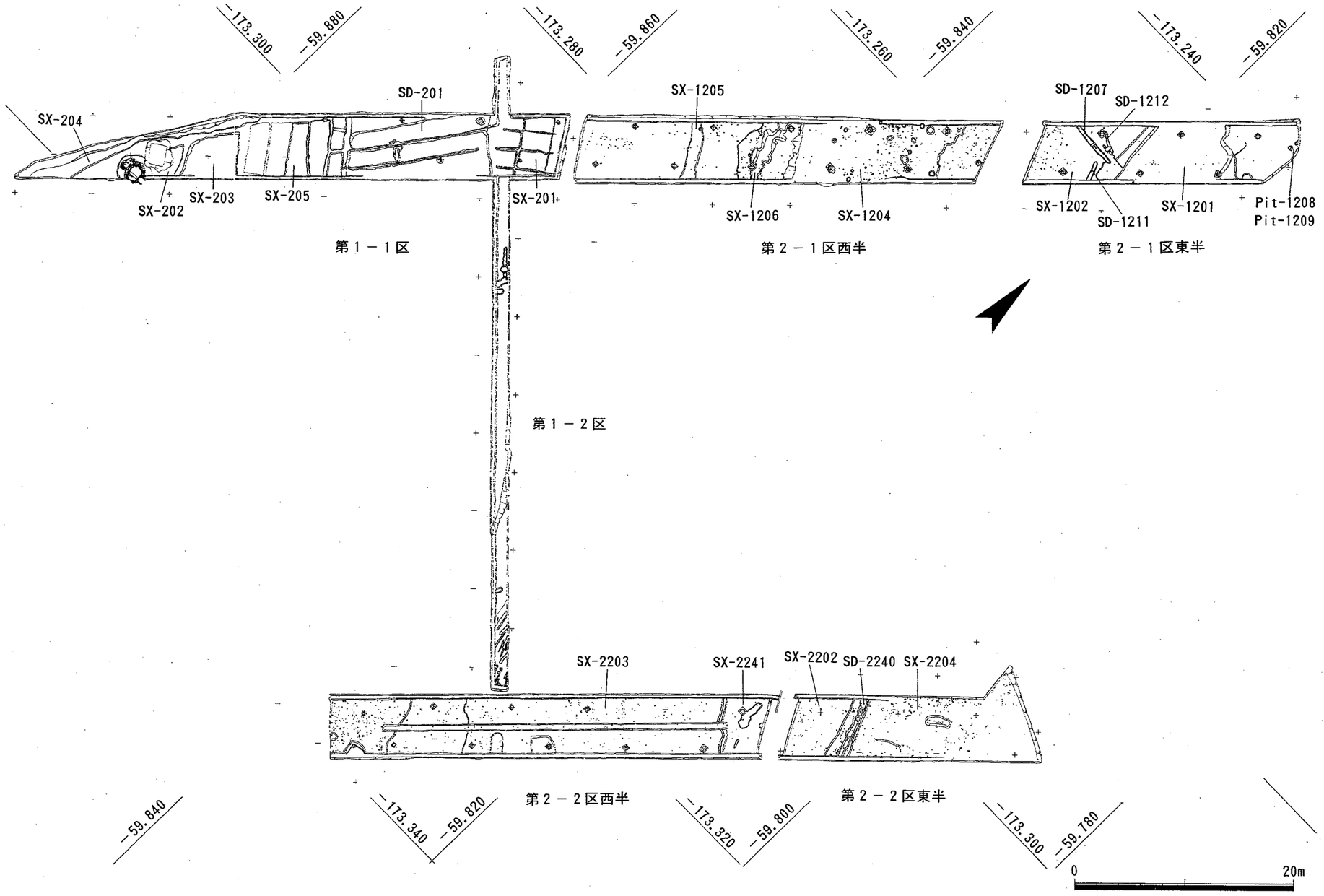

−173.300
−59.880
−173.280
−59.860
−173.260
−59.840
−173.240
−59.820
SX-204
SD-201
SX-202
SX-203
SX-205
SX-201
SX-1205
SX-1206
SX-1204
SD-1207
SD-1212
SX-1202
SD-1211
SX-1201
Pit-1208
Pit-1209
第１－１区
第２－１区西半
第２－１区東半
第１－２区
SX-2203
SX-2241
SX-2202
SD-2240
SX-2204
第２－２区西半
第２－２区東半
−59.840
−173.340
−59.820
−173.320
−59.800
−173.300
−59.780
0
20m

図５　第２面遺構配置図

本遺構はＥ－15、16区にて検出した溝である。調査区外に広がるが検出長5.6m、幅0.7m、深さ0.15mを測る。埋土は褐灰色土である。底辺は凹凸があり比高は明確ではないが、南東から北西に流れたと見られる。座標北に対して西へ22°振る方向である。遺物は瓦器椀片、土師器片、瓦片が出土したが、図示できるものはない。性格としては農業水路と見られる。中世後半に埋没。

ＳＸ－２２０４（図版２、10、11、12）

本遺構はＣ～Ｅ－13～16区にて検出した自然河道である。東端部の検出であり調査区外に広がるため全体の規模は不明だが、検出長８ｍ、検出幅17m、深さ0.8mを測る。埋土は６層に分別でき、上層から橙色土（第１層）、褐灰色土（第２層）、褐色シルト礫混（第３層）、褐色シルト（第４層）、明褐色シルト（第５層）、褐灰色細砂（第６層）である。南東から北西に流れ、比高0.1mを測る。2240を切っており、2240埋没後の流れと見られる。全体の幅としては調査区東側に接する段丘端部までと推定できる。遺物は瓦器片、土師器片、磁器、鉄製品が出土した。17世紀初頭までに徐々に埋没。

ＳＸ－２２０１（図版12、13）

本遺構はＥ－15、16区にて検出した畦である。調査区外に広がるため全体規模は不明だが、検出長5.6m、上端幅0.3m、下端幅0.7m、高さ0.2mを測る。埋土は灰色土礫混である。2240西肩の上面に築かれている。方向は南東～北西であり、座標北に対して西へ22°振る。遺物は瓦器、土師器片が出土したが、少量であり遺構自体は近世のものである。

ＳＤ－２２０５～２２３８（図版12）

本遺構はＢ～Ｅ－13～16区、2204上面にて検出した鋤溝群である。検出長0.6～７ｍ、検出幅0.2～0.3m、深さ0.05mを測る。埋土は黄褐色砂質土である。座標北に対して西に75°振るもの２条、東に17°振るもの１条、西に23°振るもの３条、その他は東に47°振る。遺物は瓦器、土師器片の他に陶磁器が出土したが、図示できるものはない。

2201、2205～2238は層位、方向性からみて、同時期のものとできる。畦とその東側に広がる耕作跡と言えよう。時期的には近世末頃とできる。

ＳＸ－２２０２（図版10、11）

本遺構はＥ、Ｆ－15、16区にて検出した整地層である。調査区外に広がるため全体の規模は不明だが、検出長5.6m、検出幅５ｍ、深さ0.1mを測る。埋土はオリーブ褐色土に黄褐色土ブロックを含む。本遺構は2201西法面に被っており、2201と関係を有している。遺物は瓦器片、土師器片、染付片が出土した。

ＳＤ－２２３９（図版10）

本遺構はＥ－15、16区にて検出した溝である。2202上面にあり、2201は本遺構の東肩部直上に存在する。調査区外に広がるため全体の規模は不明だが、検出長5.2m、検出幅0.3m、深さ0.05mを測る。埋土は灰色土礫混である。底辺はほぼフラット。遺物は陶器片が出土した。

ここまでの遺構は座標北に対して西に22°程度振る、若しくはそれに直行する方向性を踏襲しており、整然と並んでいる。この原因について現状資料からは断定できないが、何らかの意識が働いていることが想定できる。

第２－２区西半第２面（図５）

ＳＸ－２２４１（図版２）

本遺構はＦ、Ｇ－16、17にて検出した自然流路である。調査区外に広がるため全体の規模は不明だが、検出長5.2m、検出幅4.5m、深さ0.1mを測る。埋土はにぶい黄褐色土礫混である。底部はフラットである。遺物は土師質土器片、唐津焼片等が出土した。

ＳＸ－２２０３（図版３）

本遺構はＦ～Ｉ－17～20区にて検出した自然流路である。調査区外に広がるため全体の規模は不明だが検出長5.2m、検出幅23.3m、深さ0.03～0.05mを測る。埋土はにぶい黄橙色シルトである。比高は無いが南東から北西に流れる。2241を削りとる様に流れたと考えられる。遺物は陶磁器、瓦片が出土した。

第２－１区東半第２面（図５）

ＳＤ－１２０７、１２１１、１２１２

本遺構はＩ、Ｊ－４、５区、後述1202下面にて検出した鋤溝である。検出長２～4.6m、幅0.2～0.45m、深さ0.03～0.05mを測る。埋土は褐色土である。本来は周辺に群として存在していたと考えられる。遺物はない。

ＳＸ－１２０１（図版14）

本遺構はＧ、Ｉ－３、５区にて検出した整地層である。調査区外に広がるため全体の規模は不明だが、検出長６m、検出幅5.8～11m、深さ0.2mを測る。幅は南東から北西にかけて狭くなる。埋土は上層はにぶい黄褐色土、下層はにぶい黄褐色土礫混である。下層上面にて、鋤耕による変色を一部確認したが、鋤溝を検出するには至らなかった。方向的には座標北に対する南北である。遺物は瓦器、土師器片の他に近世の陶磁器が出土したが、図示できるものはない。

ＳＸ－１２０２（図版14）

本遺構はＩ～Ｊ－４～６区にて検出した整地層である。調査区外に広がるため全体の規模は不明だが、検出長9.5m、検出幅6.5m、深さ0.2mを測る。埋土はにぶい黄褐色土である。遺物は瓦器、土師器片の他に近世の陶磁器、鉄製品が出土した。

上記の1200番代遺構群は、耕作土と鋤耕作跡という関係が認定できる。

Ｐｉｔ－１２０８、１２０９（図版15）

本遺構はＧ－２区にて検出した柱穴である。1208は直径0.4m以上、深さ0.15m、柱当直径0.3m、1209は直径0.4m、深さ0.2m、柱当直径0.25mを測る。埋土は暗オリーブ褐色粘土であり、柱当は粘土に明褐色土混である。遺物は1208より瓦片が出土したのみである。

今回の調査では、柱穴と見られるものはこれら２ヶ所のみであり、検出状況等からすると、柱穴と認定するには問題をもつと思われる。

第２－１区西半第２面（図５）

ＳＸ－１２０４（図版４、15）

本遺構はＫ、Ｎ－６～10区にて検出した自然流路である。調査区外に広がるため全体の規模は不明だが、検出長5.2m、検出幅18.5m、深さ0.5mを測る。埋土は６層に分別でき、１層褐色シルト礫混、２層褐色シルト、３層褐色粗砂、４層褐色シルト、５層褐色細砂、６層褐色シルト石混である。砂、シルトの互層になり、河川の増水に伴う流れ、埋没と考えられる。検出した地点での方向は座標北に対して西に32°振る。南東から北西に流れ、比高 0.1mを測る。底辺では黒色粘土を埋土とする Pit 遺構を検出したが、埋土一部と見られる。遺物は２～６層にかけて瓦器椀細片が多量に出土し、その他土師器皿片、須恵器片、陶磁器片が出土した。出土の主体は瓦器であるが、陶磁器からすると18世紀前半代の埋没である。遺物の出土は１層は殆ど無いものの、２層から６層まで平均して出土している。上流のそれほど離れない中世遺跡が河川によって破壊された結果と言えよう。検出状況から第２－２区2203に繋がる可能性が高い。

ＳＸ－１２０６（図版４、16）

本遺構はＭ、Ｎ－９、10区にて検出した自然流路である。層位から1204埋没後に流れたと見られる。調査区外に広がるため全体の規模は不明だが、検出長5.2m、幅1.9m、深さ0.3mを測る。埋土は黒色土である。蛇行が大きく、底辺は凹凸が激しく、比高は計測できないが、1204と同じく南東から北西に流れる。遺物は瓦器椀片、土師器片、須恵器片が出土した。本遺構についても、1204同様の性格が考えられるが、1204埋没後ほぼ安定している平坦地を弱く流れた言える。

ＳＸ－１２０５（図版４、16）

本遺構はＮ、Ｏ－10区にて検出した自然流路である。調査区外に広がるため全体の規模は不明だが、検出長5.2m、幅0.8～1.5m、深さ0.05mを測る。埋土は黒色土礫混である。座標北に対し西に40°振る南東から北東に流れていたようである。比高はない。遺物は瓦器、土師器片が出土した。本遺構についても、1206と同様の性格と言えるが、同時性は不明である。

第２－２区東半第１面（図６）

ＳＸ－２１０１

本遺構はＥ、Ｆ－15、16区、第４層上面にて検出した整地層である。調査区外に広がるため全体の規模は不明だが、検出長5.5m、検出幅4.4m、深さ0.1mを測る。埋土はオリーブ黄色砂質土である。遺物は瓦器、土師器片が出土した。

本遺構下面、即ち第４層上面にて座標北に対して西に22°振る鋤耕による変色を確認したが、鋤溝の検出には至らなかった。

ＳＤ－２１０２～２１０７（図版17）

これらはＢ～Ｄ－13、14区にて検出した鋤溝である。長1.1～6.2m、幅0.25～0.4m、深さ0.04～0.1mを測る。埋土は褐色土である。ほぼ1.5m間隔で並行に並び、畑地と見られる。方向は北東～南西であり、座標北に対して東に50°振る。遺物は陶磁器が出土した。

第２－２区西半第１面（図６）

鋤溝群

本遺構は第４層上面にて検出したものである。長0.7～3.7m、幅0.15m、深さ0.01～0.03mを測る。埋土は褐色土である。座標北に対して西に29°振るもの31条、西に119°振るもの３条である。遺物はない。

ＳＸ－２１０８

本遺構はＦ、Ｇ－16区にて検出した土坑である。調査区外に広がるため全体の規模は不明だが、検出長2.9m、検出幅0.6m、深さ0.05mを測る。埋土は褐色土である。遺物は瓦質土器が出土した。

第２－１区東半第１面（図６）

ＳＤ－１１１８、１１１９（図版18）

本遺構はＨ、Ｉ－３、４区にて検出した畦の痕跡である。検出段階では上面が削平されていたため、下部の痕跡を溝として掘削してしまった。南半は後述の溝群に破壊されており、痕跡も存在しない。検出長２～３ｍ、検出幅0.45～0.8m、深さ0.07～0.1mを測る。構成土は褐色土礫混

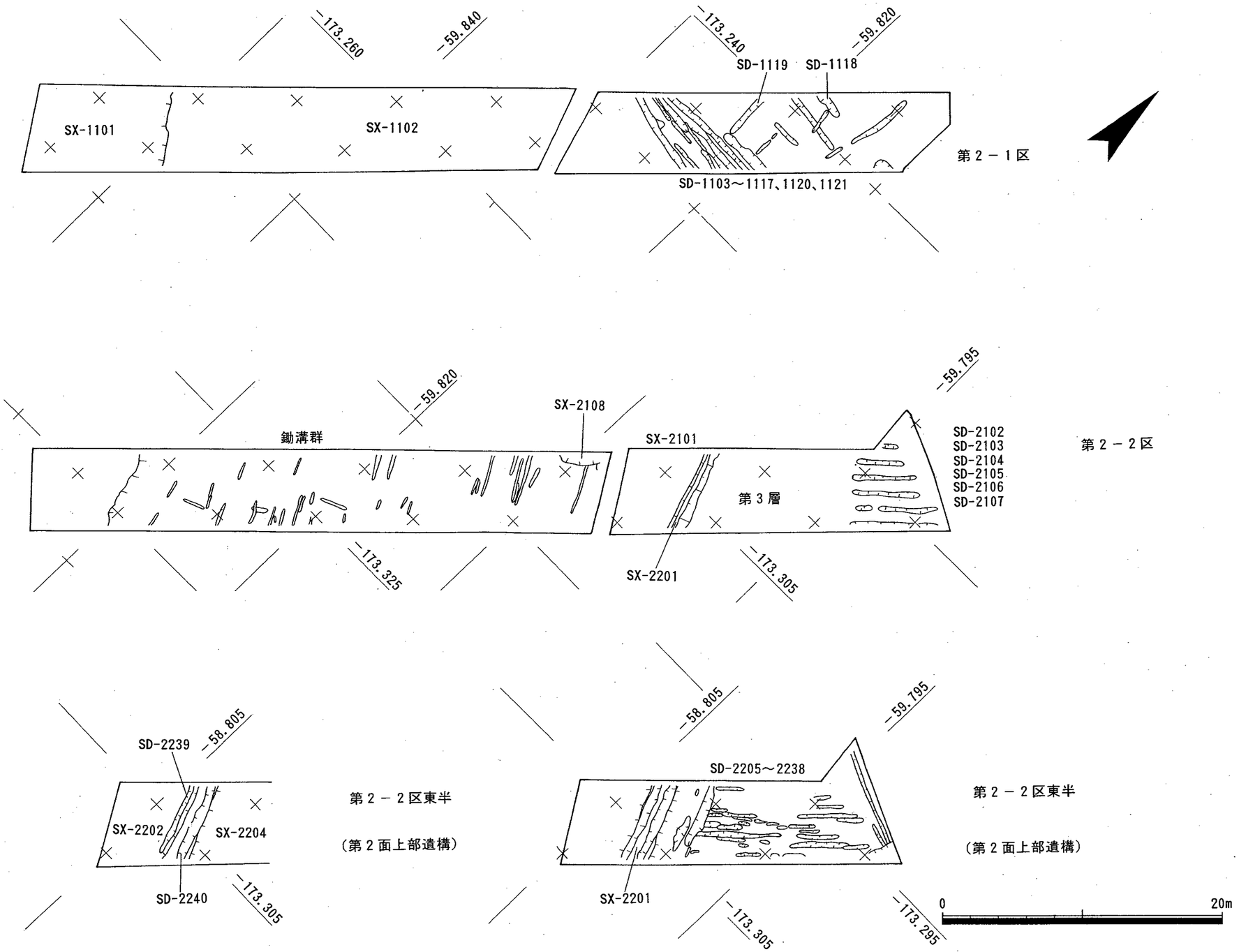

-173.260
-59.840
SX-1101
SX-1102
-173.240
-59.820
SD-1119
SD-1118
第２－１区
SD-1103～1117、1120、1121
-59.820
SX-2108
鋤溝群
-59.795
SX-2101
SD-2102
SD-2103
SD-2104
SD-2105
SD-2106
SD-2107
第２－２区
第３層
-173.325
SX-2201
-173.305
-58.805
SD-2239
SX-2202
SX-2204
SD-2240
-173.305
第２－２区東半
（第２面上部遺構）
-58.805
-59.795
SD-2205～2238
SX-2201
-173.305
-173.295
第２－２区東半
（第２面上部遺構）
0
20m

図６　第１面遺構配置図

である。遺物は無く、時期不明。方向は1119が座標南北、1118が東西である。第２－２区2201と同様のものであるが、同時性は不明。

1118の直下は1201、1202の間に当たり、1201、1202を意識して1118が構築されている。畦と農地との関係を有していた可能性が高いが、堆積状況からは断定できない。

ＳＤ－１１０３～１１１７、１１２０、１１２１（図版18）

本遺構はＧ～Ｊ－２～５区にて検出した溝である。検出長2.3～７ｍ、検出幅0.25～１ｍ、深さ0.05～0.2ｍを測る。埋土は褐色土である。座標南北方向のもの４条、座標北に対して東に88°振るもの12条である。西側の密集する一群は農地区画の畦、その他のものは鋤溝の残存と見られる。遺物は土師質土器、陶磁器が出土した。

本地区は東西、南北を基本として、２度以上の農地改変が実施されている。

第２－１区西半第１面（図６）

ＳＸ－１１０２

本遺構はＮ～Ｏ－６～10区にて検出した整地層である。調査区外に広がるため全体の規模は不明だが、検出長5.2ｍ、検出幅28ｍ、深さ0.1ｍを測る。埋土は暗褐色砂質土礫混である。遺物は瓦器、土師器片、陶磁器が出土した。

ＳＸ－１１０１

本遺構はＮ～Ｐ－10～12区にて検出した整地層である。調査区外に広がるため全体の規模は不明だが、検出長ｍ5.2、検出幅10ｍ、深さ0.1ｍを測る。埋土はオリーブ褐色砂質土に黄褐色土ブロックを含む。1101は1102に接する部分で上に重なり、切り合いとは言えない。両遺構は状況から、1204～1206埋没後、凹凸のある地面を整地したものと見られる。遺物は瓦器、土師器片、陶磁器が出土した。

４．出土遺物

調査では幅広い時代の遺物が出土した。遺構的には近世を主体とするにもかかわらず、量的には中世が最も多い。特に14世紀代のものが多い。

以下、その主なものについて記す。なお、小破片のため写真図版を中心に示す。

ＳＸ－２２０４（図７、図版19、25、26、27）

１は瓦器小皿である。復元口径9.4㎝、高さ2.2㎝を測る。保存状態不良のため調整は明確でないが、外面口縁部ヨコナデ、底部ナデ、内面はナデ後ミガキを施す。25、28は瓦器椀底部片である。弱い貼り付け高台を持つ。26は瓦器椀口縁部片である。27は瓦器片口片である。

29は須恵器壷頸部である。

44～47は青磁碗片である。44、46は体部、45、47は底部片である。龍泉窯系のものとみられるが、45は褐色系の釉がかかるので同安窯系の可能性があるが、焼成不良と言うだけかもしれない。53は白磁小杯である。外面は面取りされており、内面口縁部は釉を剝ぐ。

ＳＸ－２２０２（図７、図版20）

２は漳州窯系青花皿である。復元口径13.5㎝を測る。見込みに花文を施す。

ＳＤ－２２３９（図７、図版19）

３は瀬戸天目椀である。復元口径11.3㎝を測る。淡褐色の釉がかかるが焼成は不良。

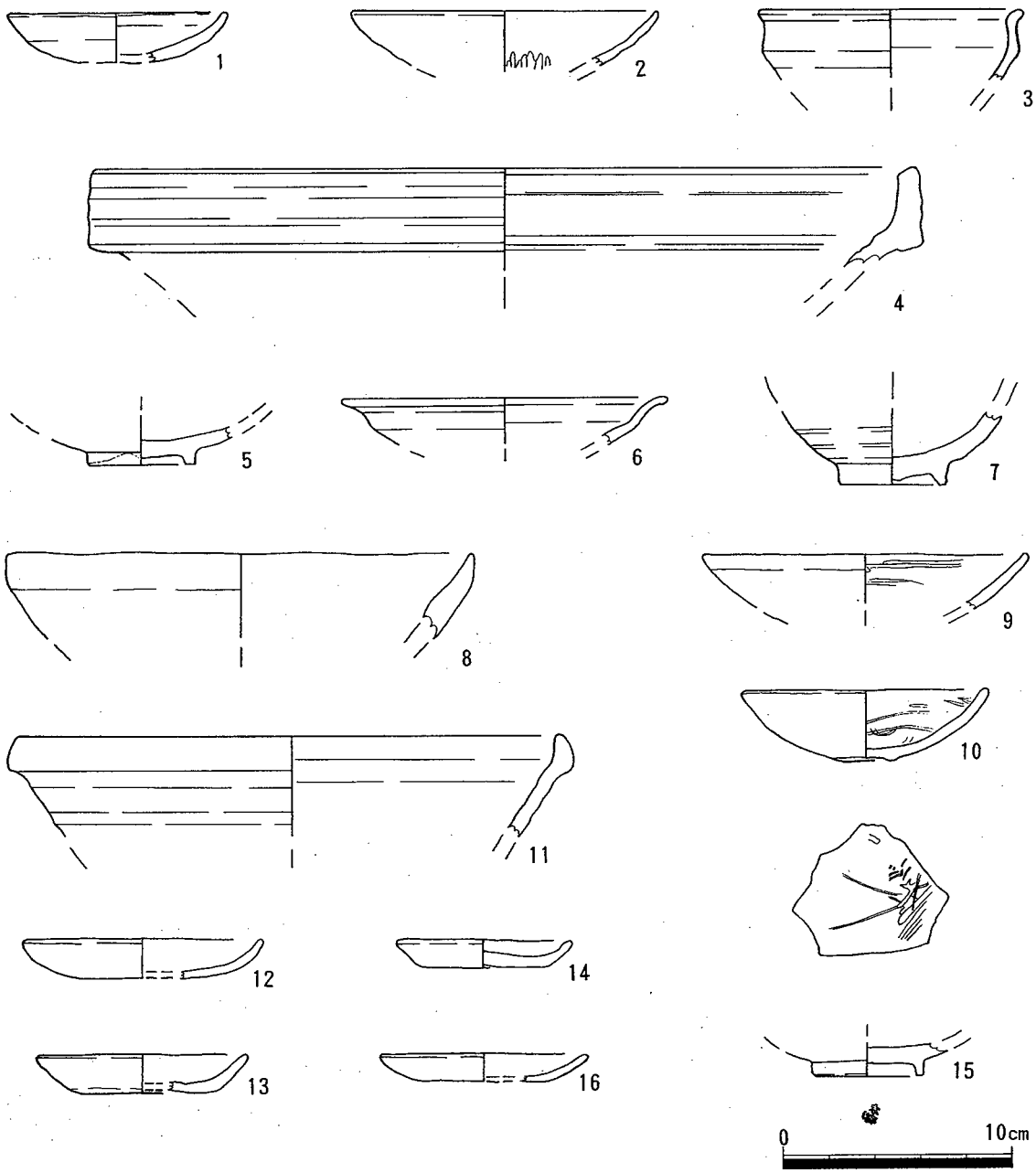


図７　SX-2204(1)、SX-2202(2)、SD-2239(3)、SX-2241(4,5)、SX-2203(6,7)
SX-1201(8)、SX-1204(９～15) 出土遺物

ＳＸ－２２４１（図７、図版19）

４は備前摺鉢である。復元口径36cmを測る。凸の下に重焼の痕跡。

５は肥前系陶器向付底部片である。復元高台径 4.7cmを測る。見込み、高台には３ケ所づつ胎土目跡が残る。灰白色の釉がかかる。

ＳＸ－２２０３（図７、図版20）

６は肥前系陶器向付口縁部片である。復元口径13.8cmを測る。灰白色の釉がかかる。７は肥前系陶器碗底部片である。復元高台径 4.6cmを測る。削出し高台であり、高台から体部にかけて、段を有する程の削り跡が残る。灰白色の釉がかかる。

ＳＸ－１２０１（図７、図版19）

８は土師質摺鉢である。復元口径20cmを測る。保存不良につき調整不明。30は土師質甕体部片である。

ＳＸ－１２０４（図７、図版21～24、26）

９は瓦器碗口縁片である。復元口径14cmを測り、皿の形態を持つものである。外面口縁部はヨコナデ、体部はナデ、内面は丁寧なナデ後横位ミガキを施す。10は瓦器碗である。復元口径10.5cm、高さ 3.1cmを測る。底部には弱い貼り付け高台が付く。外面口縁部はヨコナデ、体部はナデ、内面は丁寧なナデ後横位ミガキを施す。

11は東播系須恵器こね鉢である。復元口径23.7cmを測る。焼成は良好。

12、13は白色系土師器小皿である。復元口径は前者10.3cm、後者９cm、高さ1.7cm、1.7cmを測る。保存不良のため調整不明。12は砂を含まない精良な胎土であるが、13は１mm程度の砂が小量混じる。14は土師器小皿である。復元口径7.5cm、高さ1.2cmを測る。

15は肥前系陶器京焼写碗である。高台径4.7cmを測る。見込みには山水文を施し、高台内には「木下弥」の刻印を押す。

32は土師器甕口縁部片である。保存不良のため調整不明。古墳時代のものか。

33、34は瓦器椀片である。33には弱い貼り付け高台が付く。35は白色系土師器小皿である。36は土師質羽釜片である。37～40は瓦器椀片である。40には弱い貼り付け高台が付く。41は土師器小皿である。

42は瀬戸陶器である。粗い胎土に黄白色の釉がかかる。香炉か。

48は龍泉窯系青磁碗である。外面には蓮弁文を施す。

ＳＸ－１２０６（図７、図版24）

16は白色系土師器小皿である。復元口径９cm、高さ1.2 cmを測る。保存不良のため調整不明。砂を含まない精良な胎土である。

43は瓦器椀片である。高台部が欠落しているが、小皿ではないと思われる。

ＳＸ－１１０２（図版19）

31は土師質土錘である。

第２区第５層（図版26）

51、52は龍泉窯系青磁碗片である。51は無文で口縁が外反するもの、52は外面に退化した蓮華文を施すものである。15世紀のもの。

第２区第４層（図版27）

54は漳州窯系白磁底部片である。陶質の胎土に分厚く白色釉がかかる。染付はないものの、厚みから青花盤の可能性が高い。

第２区第３層（図版29）

70、72は土師質土錘である

71は須恵器飯タコ壷である。焼成不良につき土師質である。

第２区第２層（図版26、29）

49、50は青磁である。49は折口皿、50は外反口縁の碗である。龍泉窯系のものか。年代的には15世紀と見られる。

65は瓦質の香炉底部片である。脚が１ヶ所残る。江戸時代のもの。

66～69は土師質土錘である。

石材（図版27）

55は1109出土の結晶片岩、57～58はサヌカイト片である。摩滅が進み、流れこみと見られる。56は1204、57、58は第３層出土である。サヌカイトは何れも摩滅が激しく受けており、河川による流れ込みである。

瓦（図版28）

59～62は平瓦、63、64は丸瓦である。59～63は布目跡等を有し、中世のものと見られ、64は近世である。59、63、64は2203、60は1201、61は1210、62は側溝出土である。

ＳＸ－２０１（図８、図版30）

17は土師器甕口縁部片である。復元口径18.9cmを測る。摩滅のため調整不明。流れこみと思われる。古墳時代のもの。

73は陶器皿である。にぶい黄橙色の釉がかかる。瀬戸・美濃系か。74は磁器碗部片と思われる。細く弱い高台がつき、胎土は量産産地のものではなく、近郊産地のものと思われる。

ＳＤ－２０１（図８、図版30）

18は須恵器鉢口縁部片である。復元口径24.2cmを測る。焼成がやや悪く土師質であるが、摩滅がなく、流れこみではなく整地土等に混入し搬入されたものか。

76はホウラク片である。穿孔１孔を有する把手がある。77は丹波摺鉢である。

ＳＸ－２０２（図８、図版30）

19は須恵質こね鉢底部片である。詳細は不明。

ＳＸ－２０４（図版30）

75は染付磁器皿である。見込みに文様を施すが、小破片のため内容は不明。瀬戸・美濃系のものと考えられる。

第１区第２層（図８、図版31、32）

20～22、80は肥前系磁器である。20は染付皿である。復元口径13.2cm、高さ4.5cmを測る。21は染付碗である。復元口径10.3cm、高さ5.3cmを測る。外面には２重網目文を施すが発色は薄い。22は磁器皿である。復元口径9.6cm、高さ2.5cmを測る。見込みは蛇目釉剥ぎ、高台も

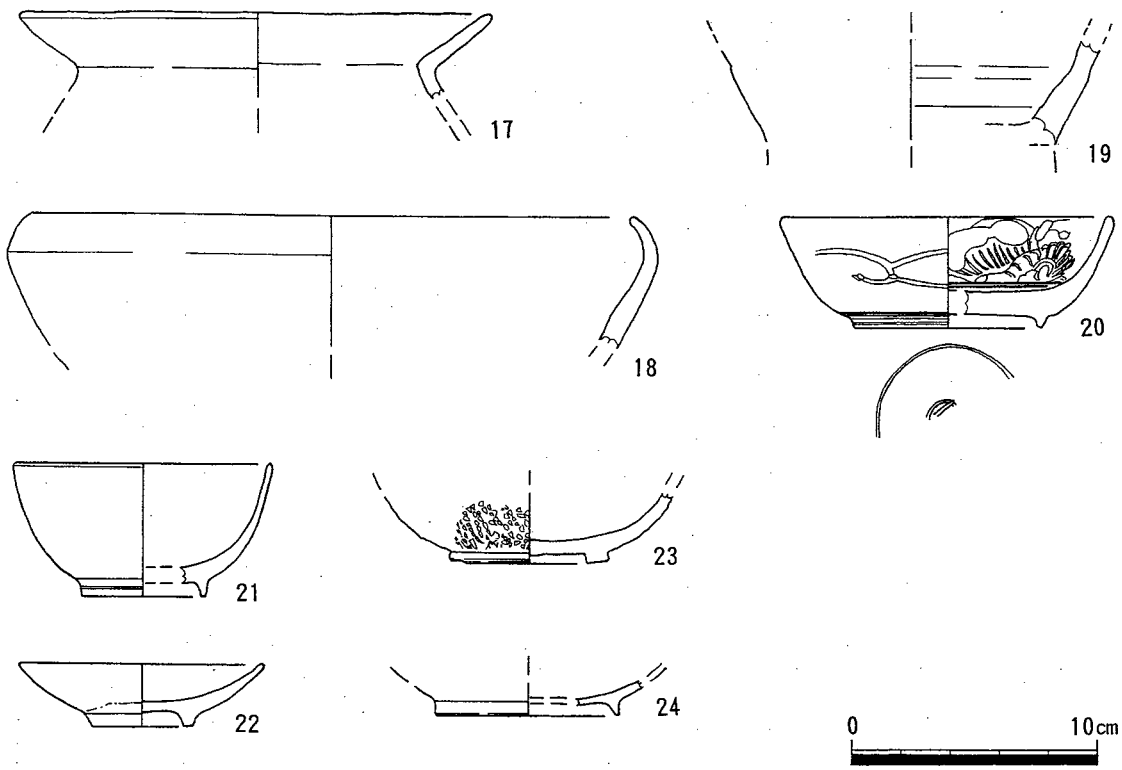


図８　SX-201(17)、SD-201(18)、SX-202(19)、第１区第２層（20～24）出土遺物

無釉である。80は染付碗である。見込みは蛇目釉剥ぎ、外面には草文を施す。

23は和泉音羽焼向付底部片でる。高台径 6.8cmを測り、削り出し高台、外面には飛ガンナを施す。写真図版は接合しない口縁部片である。82は和泉音羽焼片口である。

24は黒色土器A類椀である。復元高台径7.2 cmを測る。摩滅のため調整不明。

78、79、81、85、86は土師質土錘である83は萩焼ピラガケ杯である。

84は弥生土器飯蛸壷片である。コップ型のものと思われるので弥生土器とする。

87は瓦質甕口縁部片である。頚部から外反する。瓦質であるが須恵器のように良く焼成されている。近世のものか。88は堺系摺鉢である。

瓦（図版32）

89、90は軒丸瓦、91、92は丸瓦である。小破片であるため詳細は不明であるが、中世末から近世のものである。89、91は第2層、90は精査中、92は側溝出土である。

第2区

図版遺物番号	登録遺物番号	種　別	遺　構
1	12	瓦器皿	2204
2	1	青花皿	2202
3	15	瀬戸天目	2239
4	16	すり鉢	2241
5	17	唐津向付	2241
6	3	唐津向付	2203
7	2	唐津碗	2203
8	19	土師質すり鉢	1201
9	39	瓦器椀	1204
10	35	瓦器椀	1204
11	29	須恵器こね鉢	1204
12	26	土師器小皿	1204
13	25	土師器小皿	1204
14	37	土師器小皿	1204
15	24	肥前系陶器碗	1204
16	42	土師器小皿	1206
25	5	瓦器碗	2204
26	6	瓦器碗	2204
27	10	瓦器片口	2204
28	11	瓦器碗	2204
29	9	須恵器壺	2204
30	20	土師質甕	1201
31	18	土師質土錘	1102
32	33	土師質甕	1204
33	34	瓦器椀	1204
34	38	瓦器椀	1204
35	36	土師器小皿	1204
36	40	瓦器椀	1204
37	23	瓦器椀	1204
38	31	瓦器椀	1204
39	28	瓦器椀	1204
40	30	瓦器椀	1204
41	32	土師器小皿	1204
42	27	瀬戸陶器香炉	1204
43	41	瓦器椀	1206
44	4	青磁碗	2204
45	7	青磁碗	2204
46	13	青磁碗	2204
47	14	青磁碗	2204
48	22	青磁碗	1204
49	48	青磁皿	第2層
50	49	青磁碗	第2層
51	51	青磁碗	第5層
52	53	青磁碗	第5層
53	8	白磁小杯	2204
54	51	白磁盤	第4層
55	s1	結晶片岩	1109
56	s2	サヌカイト	1204

第1区

図版遺物番号	登録遺物番号	種　別	遺　構
17	1	土師質甕	SX-201
18	8	須恵器鉢	SD-201
19	4	須恵器こね鉢	SX-202
20	26	肥前系染付皿	第2層
21	13	肥前系染付碗	第2層
22	17	肥前系磁器皿	第2層
23	19	和泉音羽焼鉢	第2層
24	45	黒色土器A椀	第2層
73	2	陶器皿	SX-201
74	3	磁器碗	SX-201
75	5	瀬戸・美濃染付皿	SX-204
76	6	ホウラク	SD-201
77	7	すり鉢	SD-201
78	20	土師質土錘	第2層
79	21	土師質土錘	第2層
80	22	肥前系染付碗	第2層
81	23	土師質土錘	第2層
82	24	和泉音羽焼鉢	第2層
83	25	萩焼杯	第2層
84	12	弥生土器飯蛸壺	第2層
85	14	土師質土錘	第2層
86	15	土師質土錘	第2層
87	16	瓦質甕	第2層
88	18	堺すり鉢	第2層
89	k1	軒丸瓦	第2層
90	k4	軒丸瓦	精　査
91	k2	丸瓦	第2層
92	k3	丸瓦	側　溝

第2区

図版遺物番号	登録遺物番号	種　別	遺　構
57	s3	サヌカイト	第3層
58	s4	サヌカイト	第3層
59	k3	平瓦	2203
60	k14	平瓦	1201
61	k24	平瓦	1119
62	k25	平瓦	側　溝
63	k4	丸瓦	2203
64	k6	丸瓦	2203
65	46	瓦質香炉	第2層
66	43	土師質土錘	第2層
67	44	土師質土錘	第2層
68	45	土師質土錘	第2層
69	47	土師質土錘	第2層
70	50	土師質土錘	第3層
71	54	須恵質飯蛸壺	第3層
72	55	土師質土錘	第3層

表2　出土遺物対照表

Ⅳ まとめ

今回の調査は道路、水路敷設場所が調査対象であったため、短い幅に対して延長が長い調査区となった。その調査区に対してほぼ直行する形で大型の流路等を検出し、遺構単独での性格等について、判断が困難であった。しかし、上記のように、直接構造的に連続する状況ではないものの、先行する遺構方向等を踏襲し、影響を受けていると考えられ遺構を多数検出し、遺構総体で検討すると氾濫原における開発状況の一端が見えてくる。

以下、調査地の歴史的な流れをまとめる。

本調査において最古の遺構は、調査地東側に位置する溝（2240）である。出土遺物から14世紀代に埋没したことは分かるが、掘削時期については不明である。しかし、幅 0.7mという規模からするとそれ程の年月の遡りは想定できず、14世紀代と推定される。数年単位の可能性が高い。遺物の出土量からは集落に関わる排水溝等は想定できず、農業用水路の可能性が高い。この時期の耕作跡は後の流路によって破壊されたと見られ、本遺構以外には発見できない。そのため、土地利用状況は判明しないが、粗い石を含む地山の状況から本溝より西側には農地の想定はできず、東側を利用していたとできる。調査区東端は段丘端部に接しており、東側と言っても極限られた場所での土地利用である。これ以前の遺構は確認できず、段丘端部に最も近い部分での利用であるので、氾濫原の荒れ地に最初の農地開発が実施された証拠とする事ができるのではないか。

中世遺構は先のとおり本溝のみであり、同時期の遺物包含層も存在しない。したがって、中世の状況はこれ以上述べることができない。

本調査地において、遺構が明確になるのは近世初頭から前半にかけてである。第２－１、２区において、多数の流路跡（2204、2203、2241、1204、1205、1206）を確認した。これらは、氾濫時の近木川小支流と判断でき、当該時期までは頻繁な流路変化があったと見られる。

最大規模を持つ第２－２区流路（2204）は近世初頭埋没であり、その意味では中世末頃の流れともできるが、流路であるため成立時期は明らかにできない。遺物についても、何れかの層位や地区に集中することなく出土しており、中世に遡らない可能性は高い。本流路は検出地点では段丘端部に沿っており、近世初頭段階では中世の開発地も再度荒れ地となったようである。本流路から西側についてはその他の流路が存在し、ほぼ近世を通じて荒れ地を呈していたと考えられる。

今回最も多量に遺物が出土した第２－１区流路（1204）は、一見すると中世流路の様に14世紀代の瓦器椀片等が多量出土した。その他、須恵器等の遺物も含み、調査途中では中世のものとの理解であった。しかし、２～５層において、極小量ではあるが18世紀代までの染付片、陶器片が出土し、近世前半に埋没した事が判明した。近木川が氾濫、増水した折りに、調査地より上流の中世遺跡を破壊し、流れ着いたものと考えられる。

これら遺物の出所であるが、摩滅を受けているものの、器種、調整が不明になるものではなく、

本地点よりそれほど遠くない地点に存在した遺跡と言える。現状最も有力な候補は、本調査地南東約400m離れた地点に位置する沢城跡がある。旧集落下層には、14世紀代の集落が存在しており可能性は高い。だが、近木川を挟み本遺跡の対岸にあるという点が弱い。更に上流では、加治・神前・畠中遺跡がある。遺跡の南西地域には中世集落が想定されており、第2の候補と成り得る。遺物、地形からは判断は困難であり、未発見の遺跡の可能性も含め、今後検討したい。なお、これ以外の中世以前の遺物は摩滅が進むものが多く、地山に由来するものと考えられる。

調査地西側では氾濫原を呈している江戸前半期であるが、東側では農地としての利用が確立している。まず、第2－2区東半では、流路（2204）埋没後、溝（2240）上面に畦（2201）が構築され、それに伴う鋤溝群（2205～2238）、耕作土に相当する第5層が存在する。また、畦の西側整地土（2202）についても一連の耕作土と考えられる。畦の西側と東側との同時性は、遺物量が少ないため断言できないが、明らかに畦を意識、若しくは、利用している。第2－1区東半では、整地土（1201、1202）が存在し、それらに伴う鋤溝群がある。また、その上層には畦（1118、1119）が存在している。なお、当地区では、常に南北、東西を基本として耕作を行っている。

ここで問題となるのは、中世溝（2204）と近世畦（2201）の方向が一致することである。単純にみれば、溝は中世のものではなく、近世段階、畦が構築される直前までの近世水路であり、利用形態が変更になったため、溝を埋め新たに畦を構築したとできる。しかし、堆積状況では明らかに、溝（2204）→流路（2240）→畦（2201）となり、溝から畦への直接の繋がりは見いだせない。この土地自体に規制されたのか（近木川水位・水量、標高等）、土地利用農民に何らかの中世以来の拘束があったのか等の原因が推定できるが、現状では断定できない。ただ、氾濫原では最高位の標高を測る地点であり、中世以後、近木川の開谷作用によって傾斜地になった形跡は無く、人為的なものである可能性は高い。

幕末前後では更に利用が拡大し、調査地全域において耕作跡が発見できる。それまでは荒れ地であった西側にも畑地がつくられ（201、SX-201、203、204、205）、第2－1、2区西半ではSX-1101、1102や第4層によって整地し農地に変えている。前者の畑地は西に下る緩やかな傾斜地に立地し、利用が一定しないが、後者では一部変化はあるものの、大部分の鋤溝が一定方向に掘られている（第1面鋤溝群）。第2－1区東半では、第3層によって嵩上げした後、ほぼ東西、南北と踏襲し、耕作を続ける。第2－2区東半分は、この段階ではそれまでの方向を捨て、東に50°振った方向にて畑地としている（2102～2107）。この段階にて、ほぼ現在の利用状況が確定したと言える。

以上、今回の調査では、近木川右岸氾濫原における農地開発の一端を明らかにできたと考える。因みに、この結果に関連して、興味深い点を一つ指摘しておく。

先述のとおり、調査地東側の利用は早く、西側は遅いとした。この結果は調査前の農地利用と非常にリンクしている。東側は調査地を横切る水路より引水し、主に水田として利用され、西側は野井戸の水によって畑地として利用されているのである。利用の古い地点ほど農地としての高

位利用となっていた。

利用の状況の違いは、東側が標高が高く、西側へ近木川に近づく程低くなっているという地形的な制約が主原因である。しかし、生産性対コストや水利権問題があるとは言え、近代以降の技術をもってすれば、畑地に水路を引き水田化することは不可能ではないと考える。幕末以降、地理的な要因だけで、同じ利用形態にとどまったとは言えないのではないか。連綿と農地を守る努力をした結果が水田として今にあると考えたい。東側は氾濫原の中では好条件を備えているが、氾濫原内であることに変わりなく、一度増水すれば総て流される条件は同じである。

矮小な土地や、谷地形等、地理的に悪条件に置かれた地点での開発は、地理的な制約を受けたと単純に理解されがちである。しかし、利用の変化を細かく追うと、そこには人々の努力が観察でき、連綿と受け継がれていることが見える。農地を作り守った人々の意識が感じられる。単純に地理的要因として判断するのではなく、意識の部分を大切にする必要がある。

感想めいたことを述べたが、地域を広げ、河川付近の開発について述べ、最後とする。

氾濫原等農地に適さない地形における開発は、近世に入ってからとの理解が一般的である。

本遺跡では中世段階で開発が開始されている事を確認した。但し、それ以後の利用は低調であり、農地として利用が確定するのは幕末である。

同種の地形における本市の調査例は、沢新開遺跡、津田北遺跡がある。前者は本遺跡西側、近木川左岸のほぼ対岸氾濫原に位置する。市営住宅改築工事に伴う平成6年から8年にかけての発掘調査によって、近世初頭以降の農地開発を明らかにした。中世段階では荒れ地であり、近世初頭以降、溜め井を掘削し、主に畑地として利用していたことが判明している。後者は本市北部、岸和田市との境界近くを流れる津田川右岸デルタに位置し、工場跡地の宅地造成に伴う平成9年から11年にかけての発掘調査によって15世紀前半以降の農地開発状況が明らかとなった。

これら3ケ所の発掘調査にて判断すると、河川右岸の開発が早いとの理解が可能である。比較検討の資料は十分でないものの、本市に存在する2級河川3ヶ所（泉佐野市との境界となる見出川を含め）の内2ヶ所の調査において、一般的な理解とは異なり、中世にこの様な地域での開発が始まっていると言う事実を重視したい。

残存よりも流出する方が多い氾濫原での発掘調査であり、この様な悪条件下での中世から近世にかけてを対象とした発掘調査を殆ど聞かないので、結論を急がず、今後の検討課題としたい。

報　告　書　抄　録

ふりがな	わきはまかわばたいせき　はっくつちょうさがいよう
書名	脇浜川端遺跡発掘調査概要
副書名	
巻次	
シリーズ名	貝塚市埋蔵文化財調査報告
シリーズ番号	第 48 集
編著者名	前川　浩一
編集機関	貝塚市教育委員会
所在地	〒597-8585　大阪府貝塚市畠中１丁目17番１号
発行年月日	西暦1999年３月31日

所収遺跡名（ふりがな）	所在地（ふりがな）	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
脇浜川端遺跡（わきはまかわばたいせき）	大阪府貝塚市脇浜（おおさかふかいづかしわきはま）	27208	111	34度26分	135度22分	1997. 9.10 1997.10.20 1998.07.21 1998.09.17	1,105	農業基盤整備事業

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
脇浜川端遺跡		近世	溝・流路	瓦・陶磁器	

図　　版

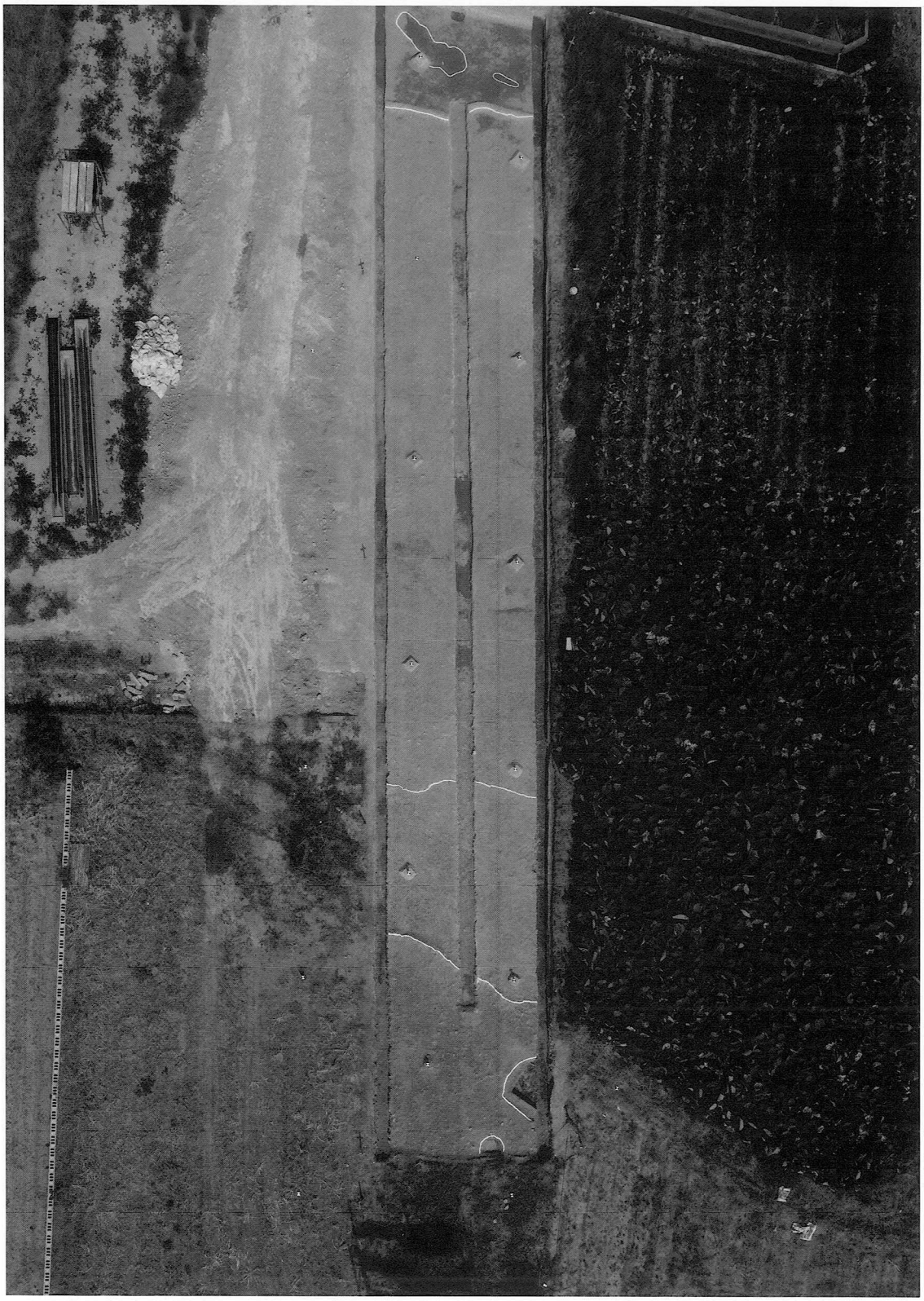
図版1　検出遺構

航空写真　第１－１、２区

図版2　検出遺構

航空写真　SD-2240、SX-2204、2202、2241

図版3　検出遺構



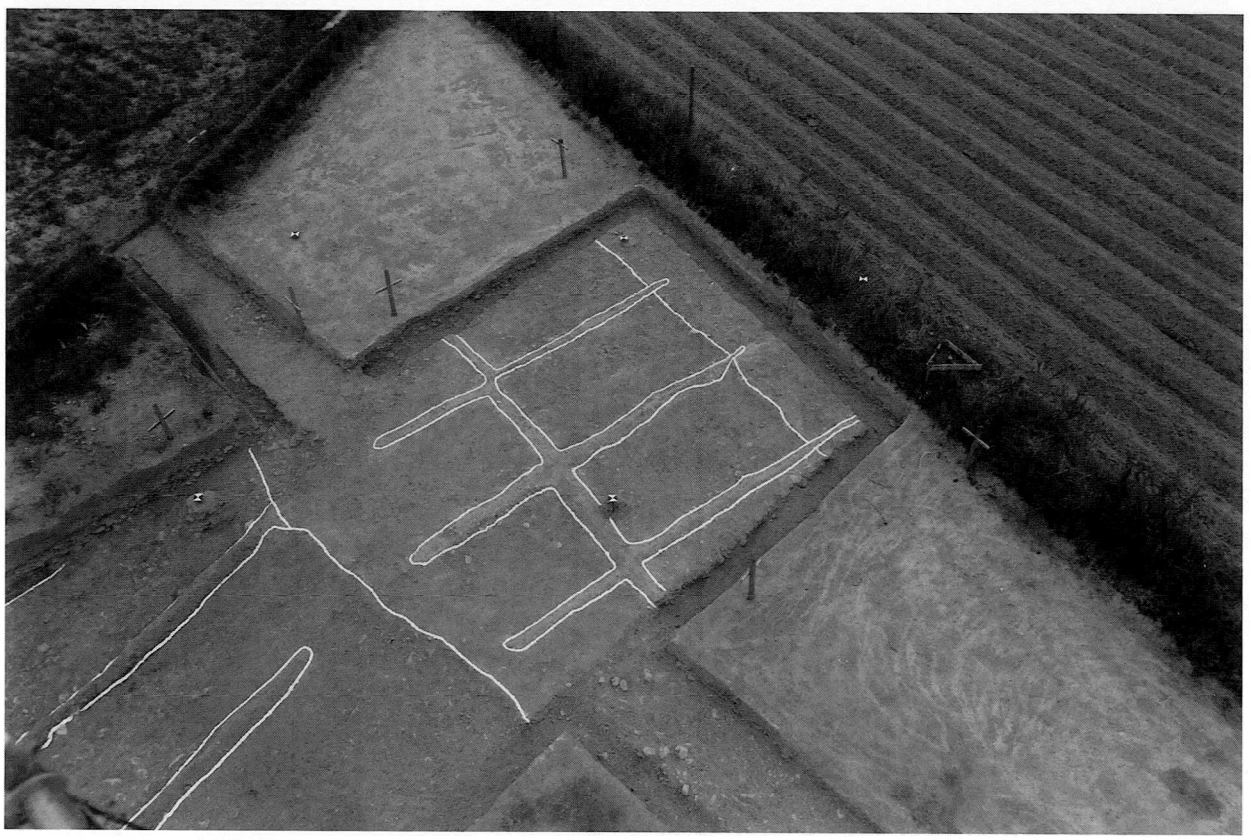
航空写真　SX-2203

図版4　検出遺構

航空写真　SX-1204～1206

図版5　検出遺構

1．SX-201　検出状況　　南東より



2．SX-201　完掘状況　　南より

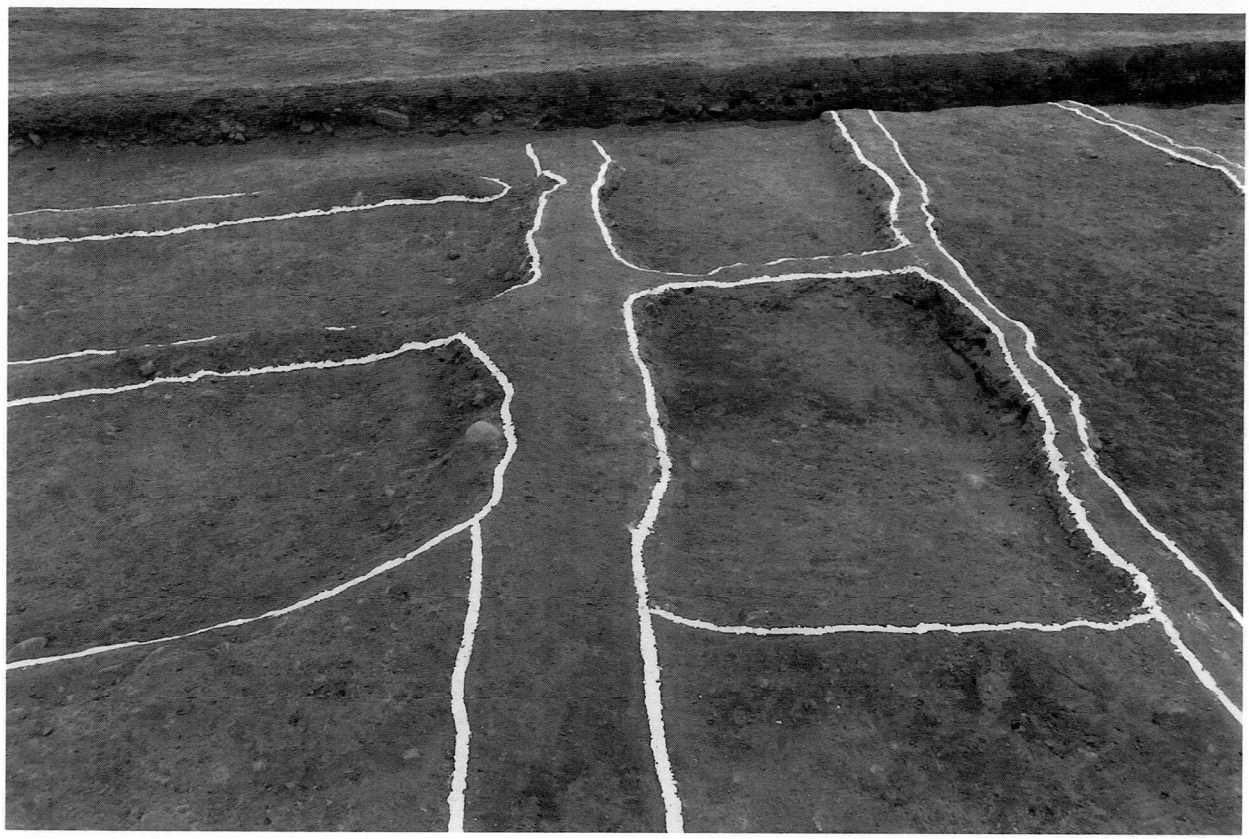
図版6　検出遺構

1．SX-205　検出状況　　南東より

2．SX-205　完掘状況　　南東より

図版7　検出遺構

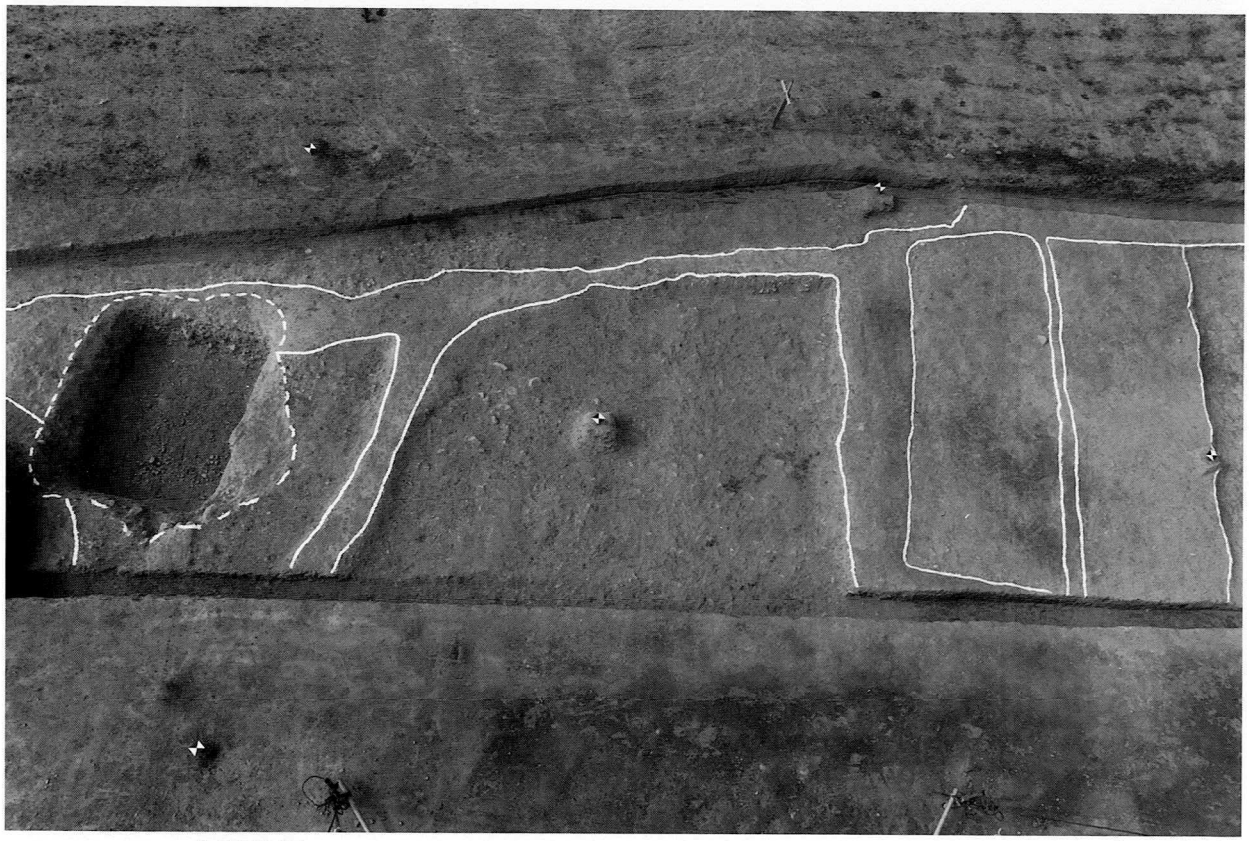
1．SD-201　　南より



2．SX-205　　南東より

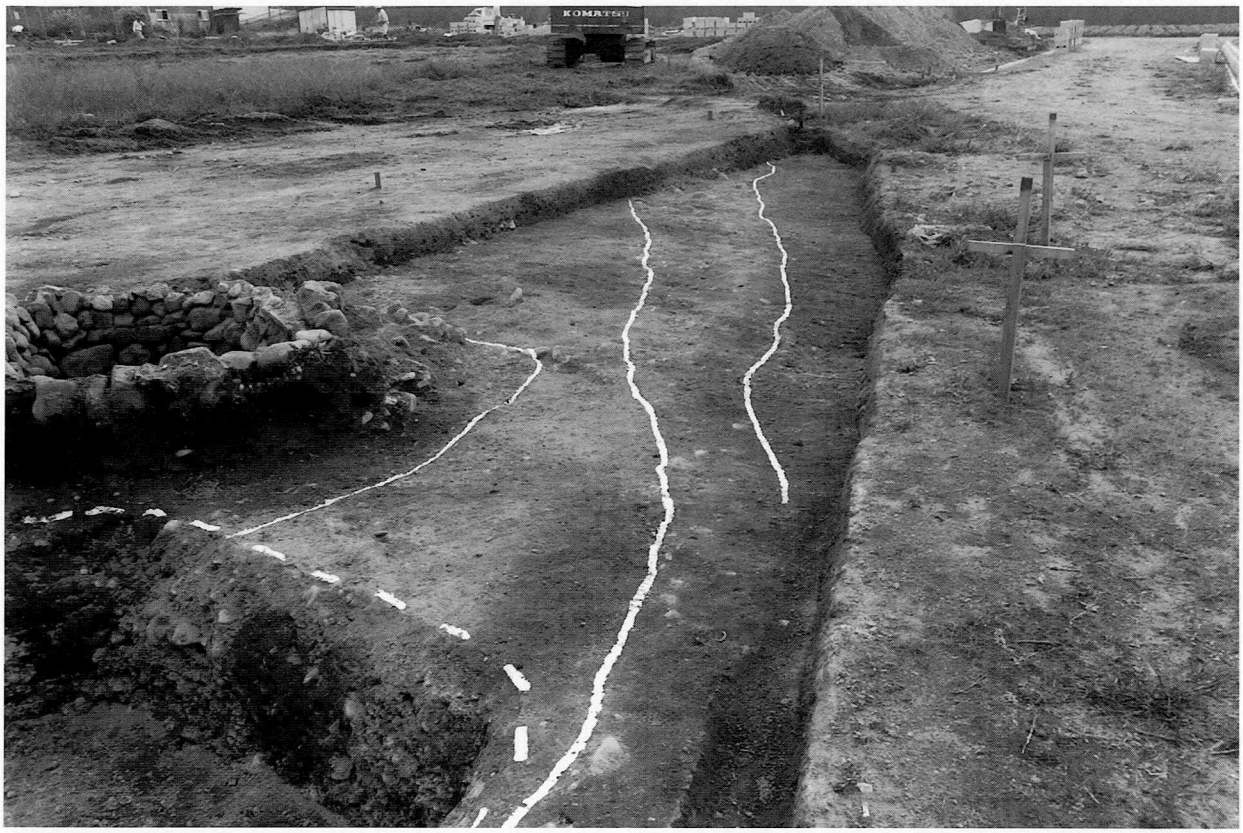
図版8　検出遺構

1．SX-203　検出状況　　南東より



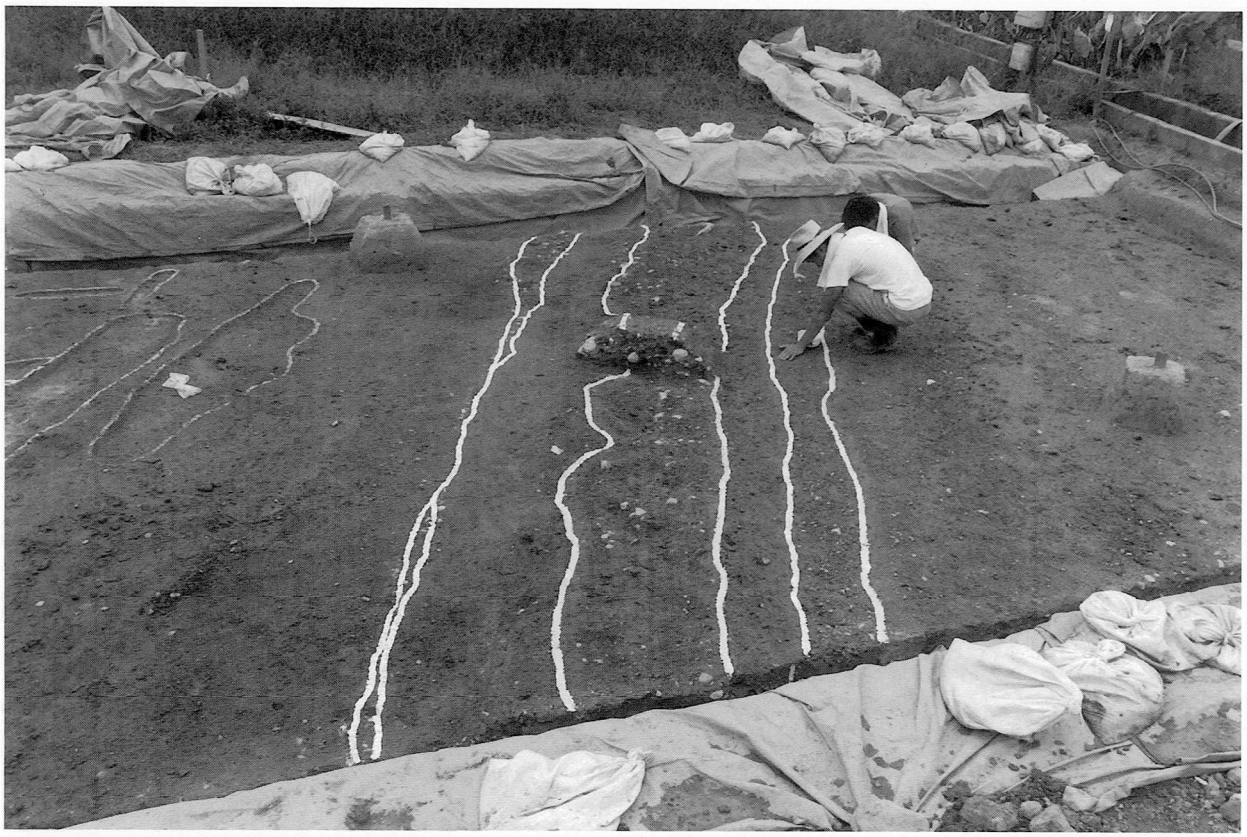
2．SX-203　完掘状況　　南東より

図版9　検出遺構

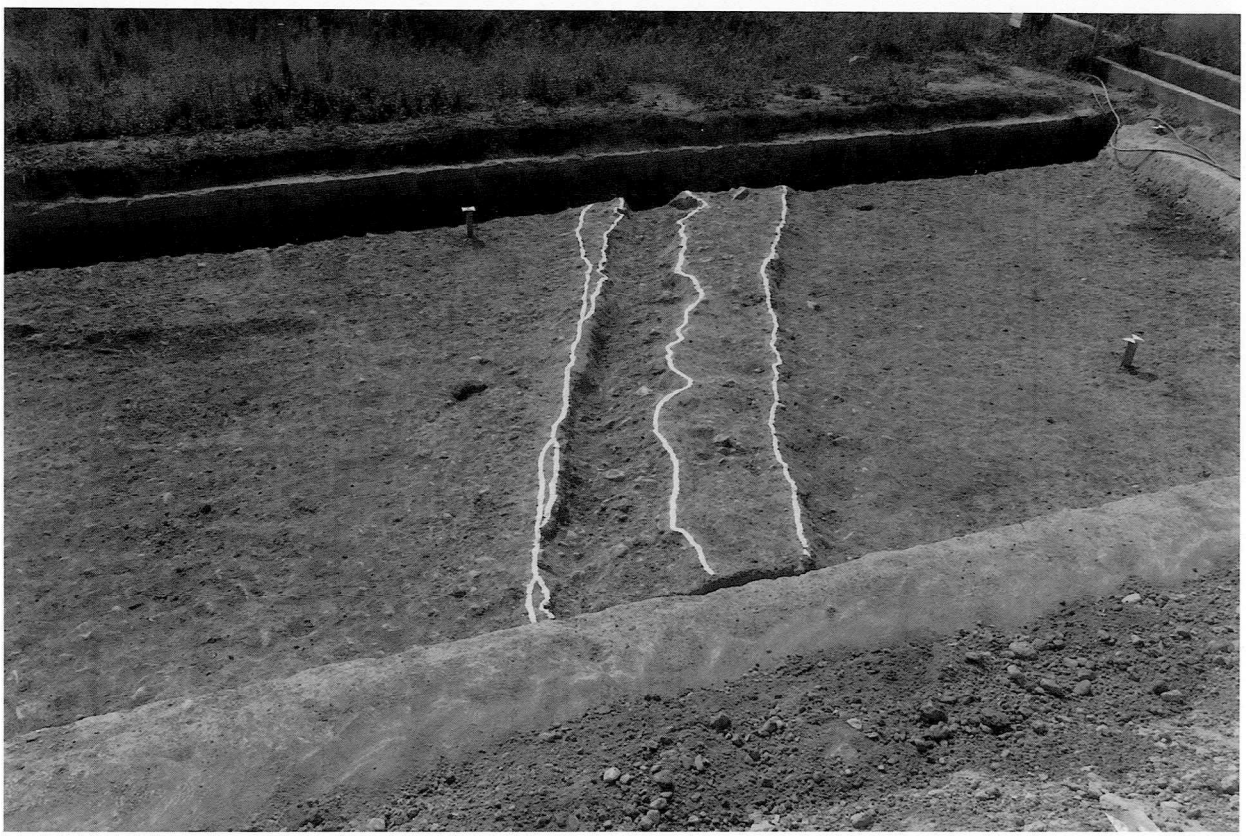


1．SX-204　　北より

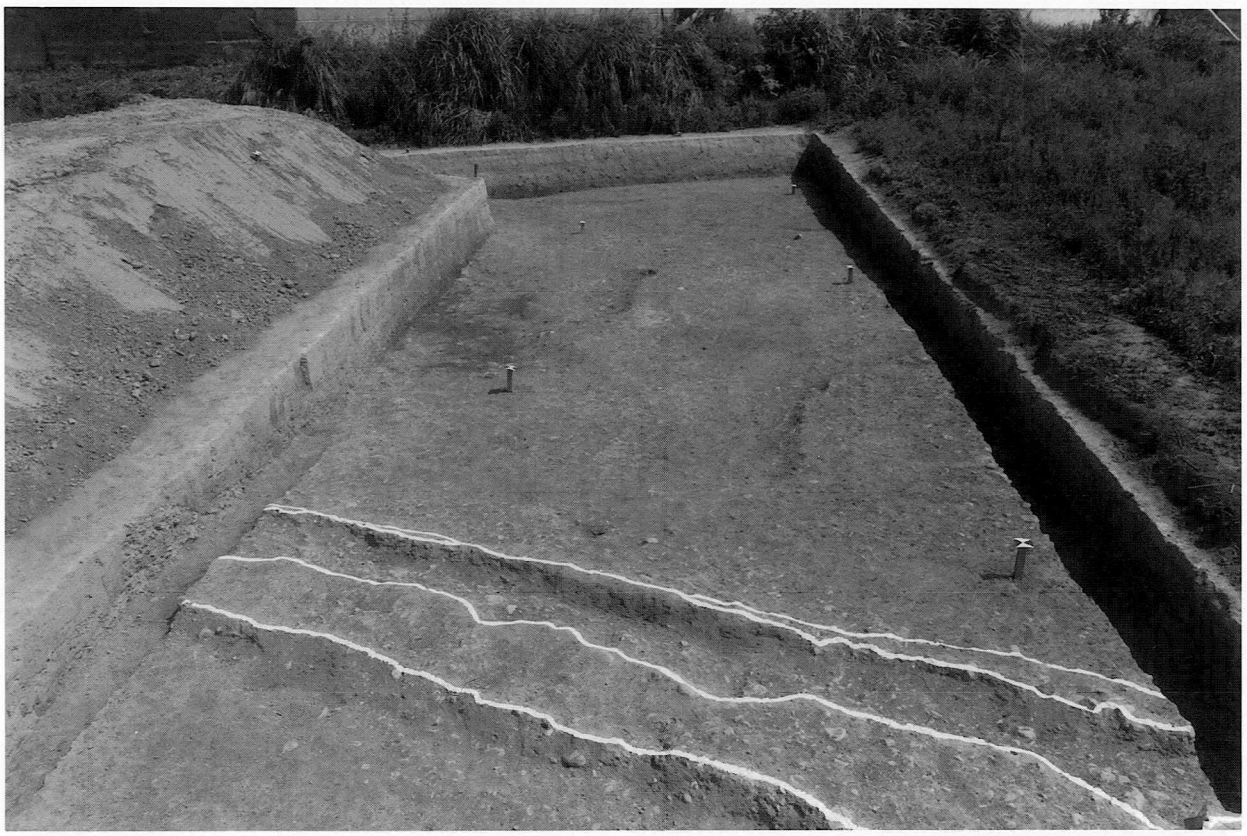
2．第１－２区　鋤溝群　　南東より



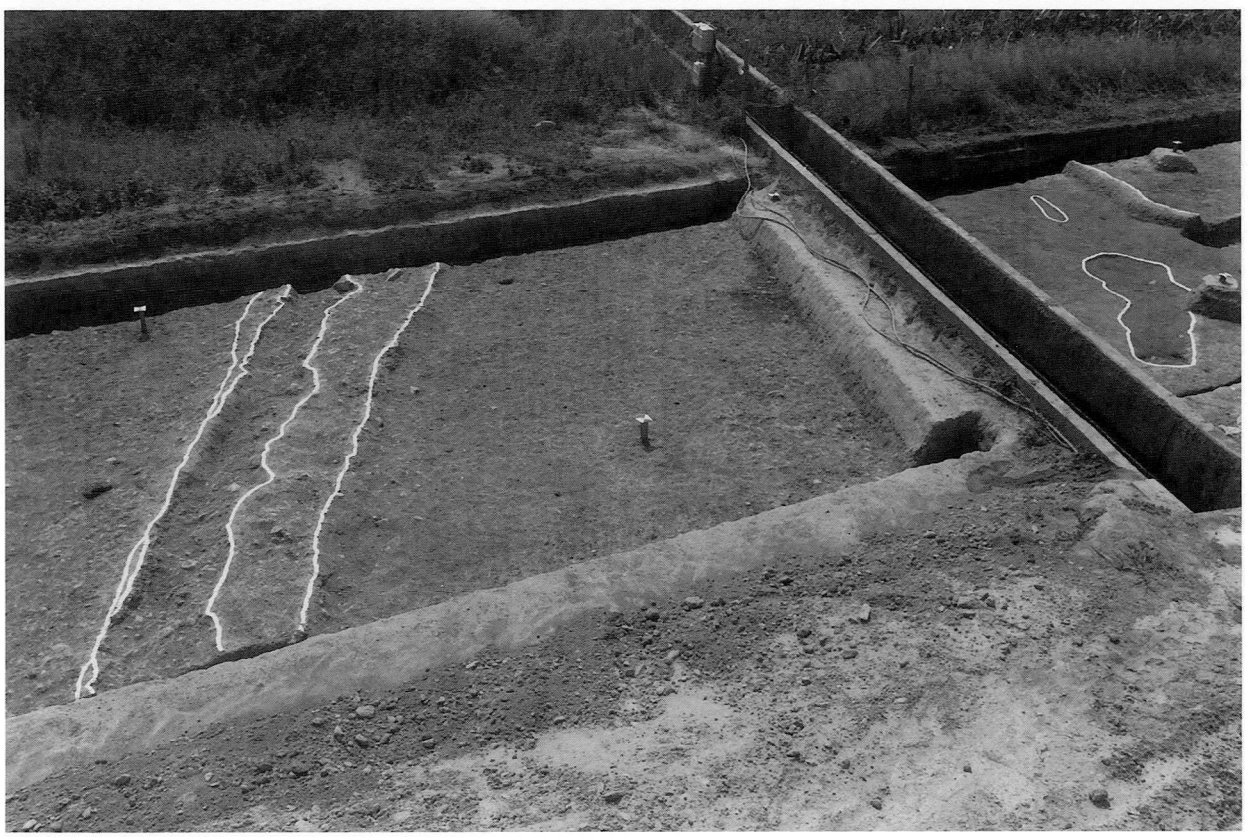
1．SD-2240、SX-2204、2202、SD-2239　検出状況　　北より



2．SD-2240、SX-2204、2202　完掘状況　　北より

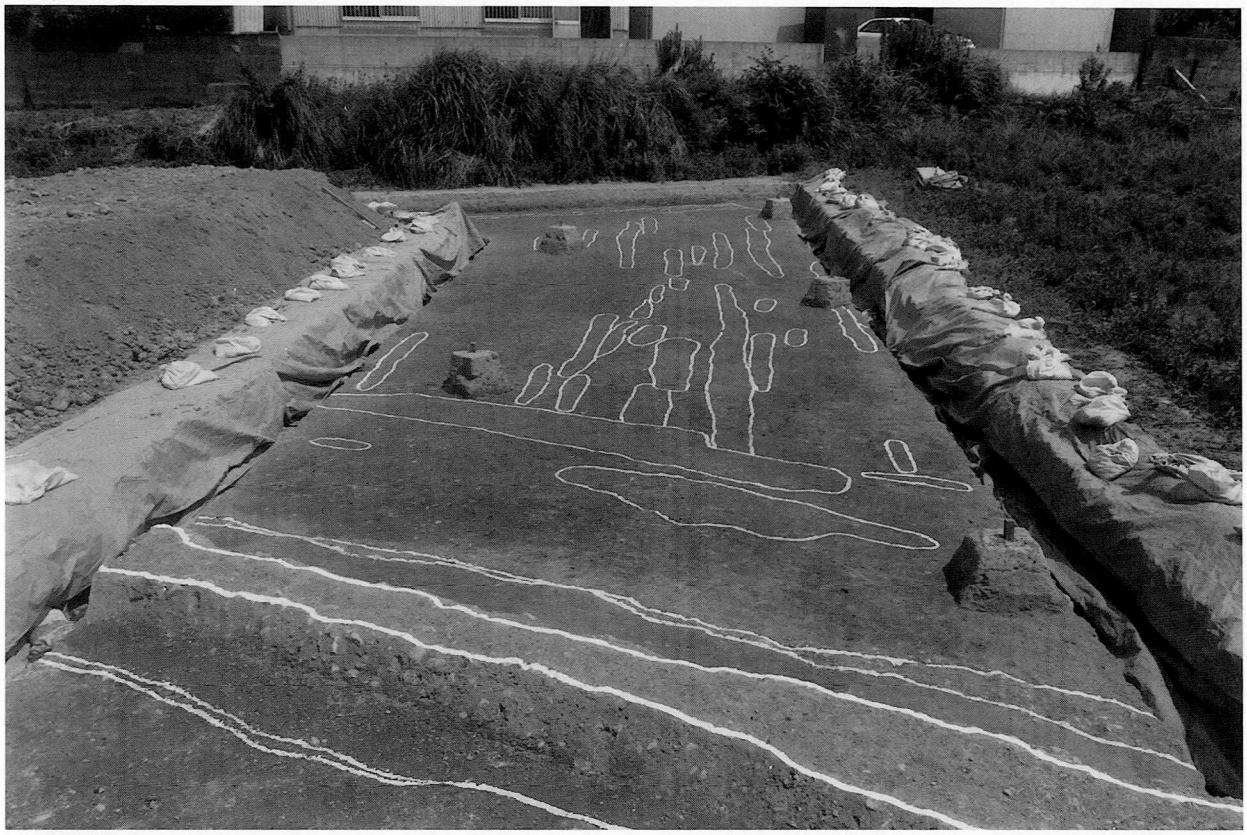


1．SX-2204　　南西より

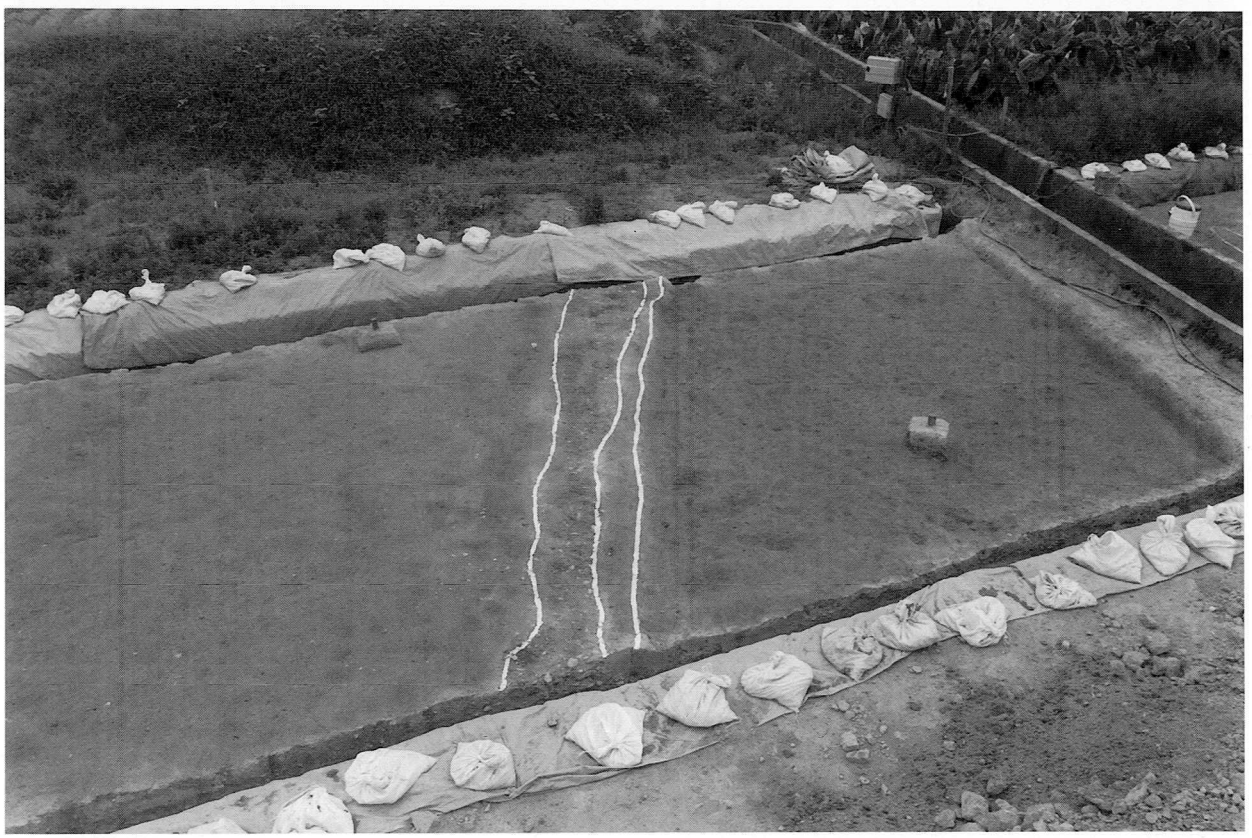


2．SX-2202　　北より

図版12　検出遺構

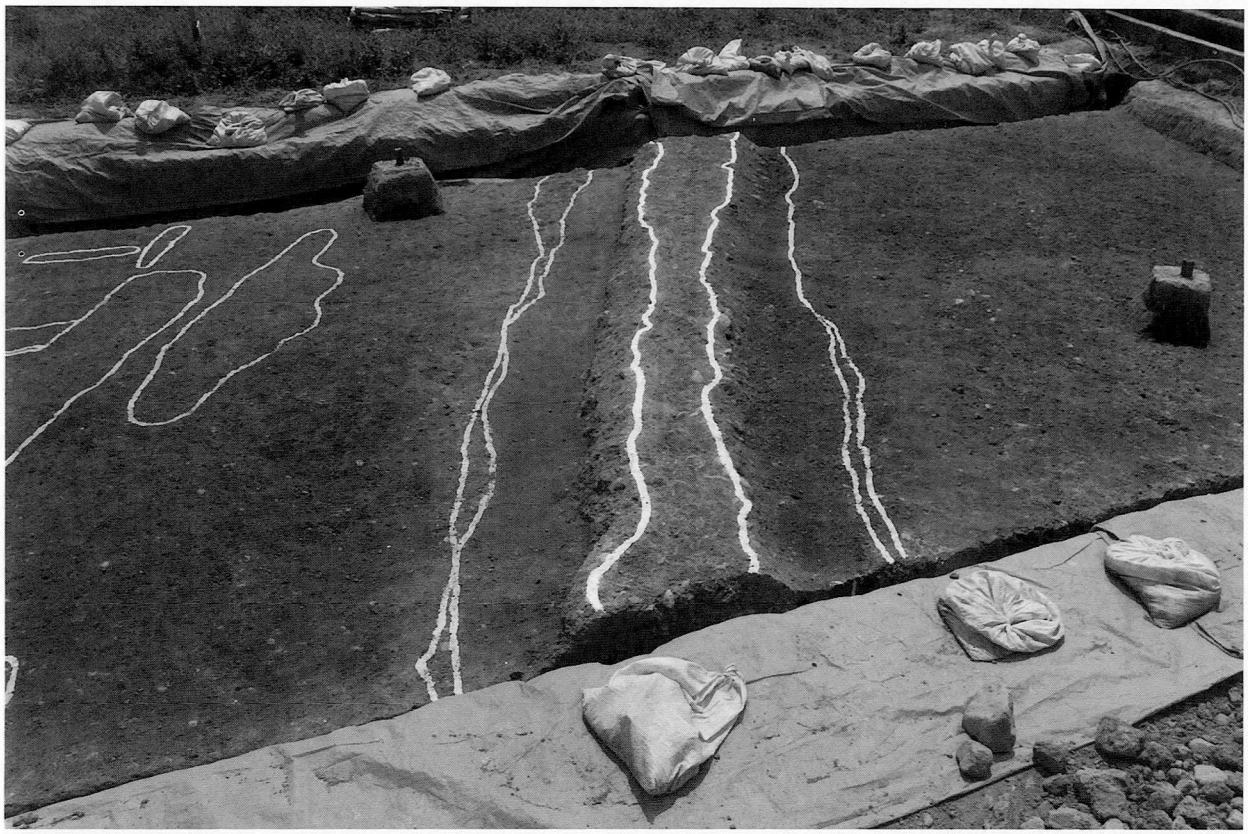


1．SX-2204　上面　　南西より



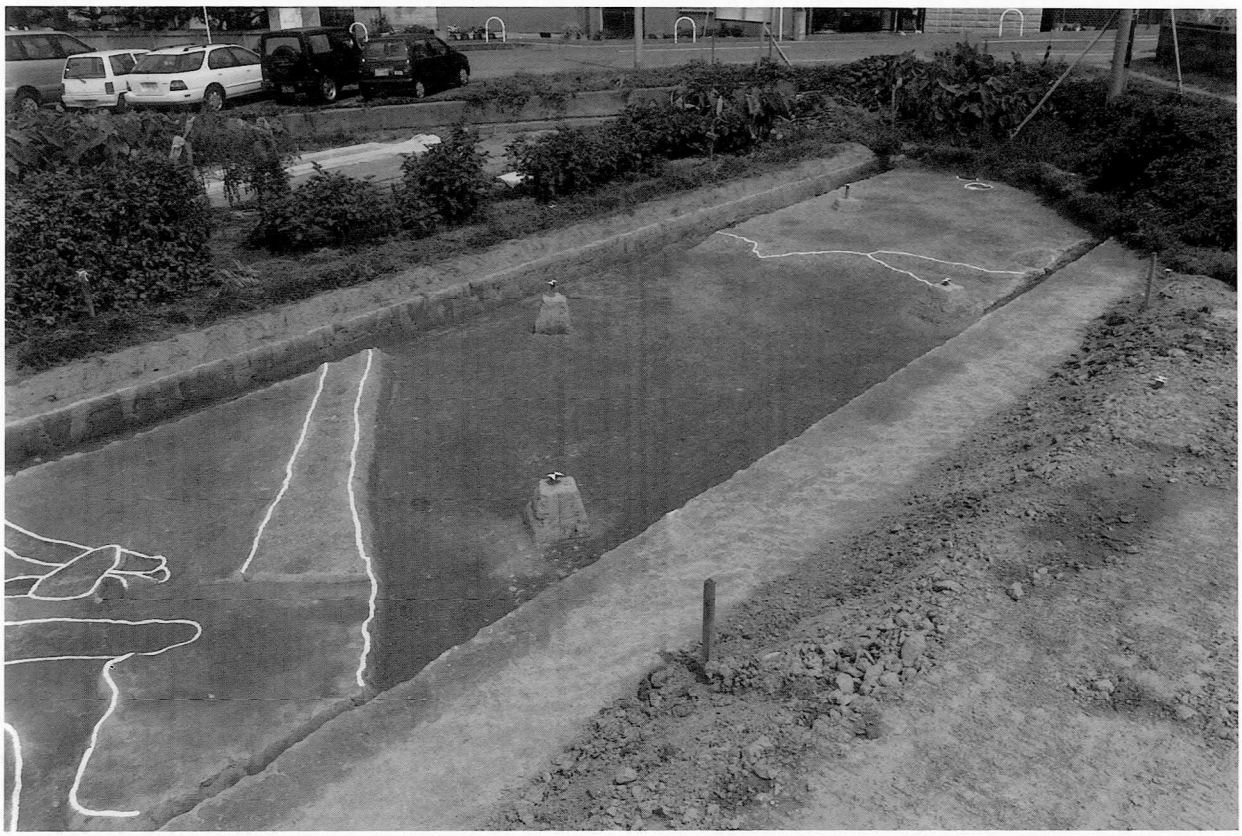
2．SX-2201　検出状況　　北より

図版13　検出遺構

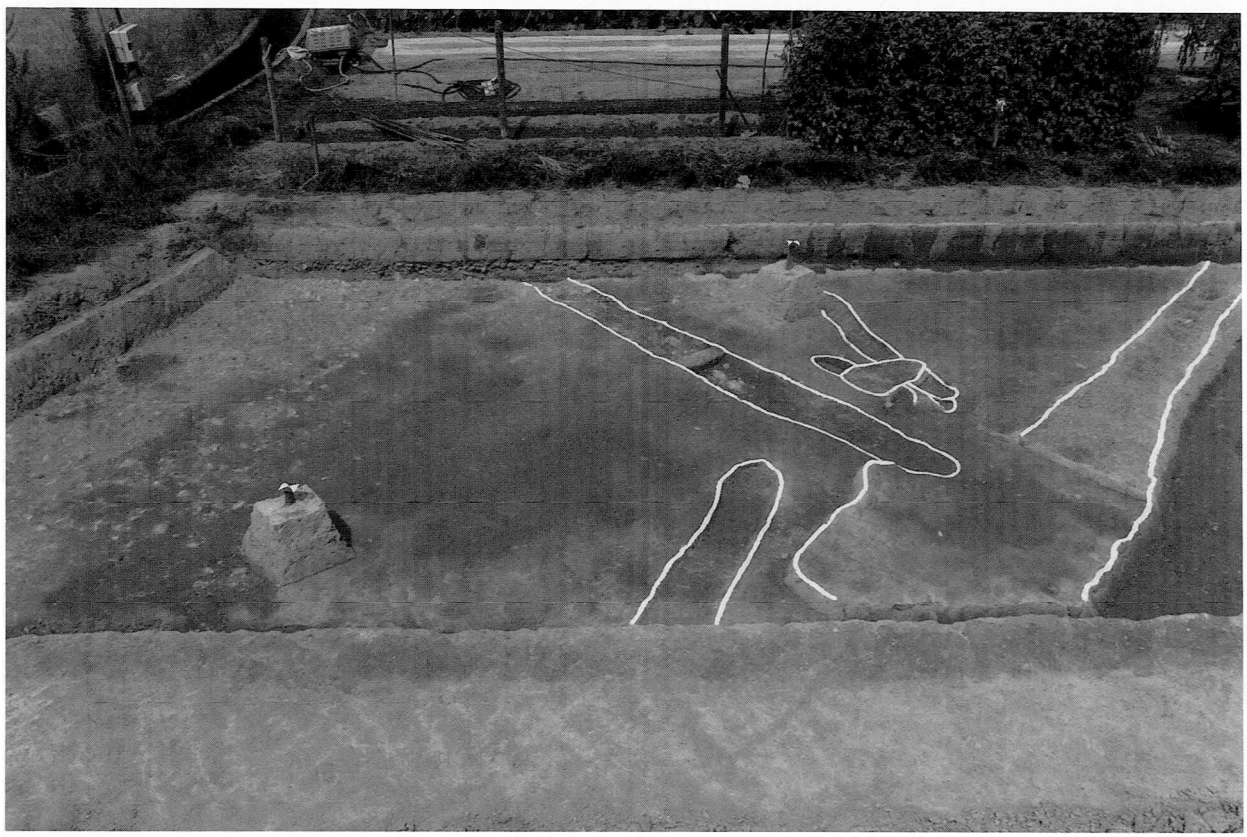


1．SX-2201　　北より

2．同　　上　　北西より

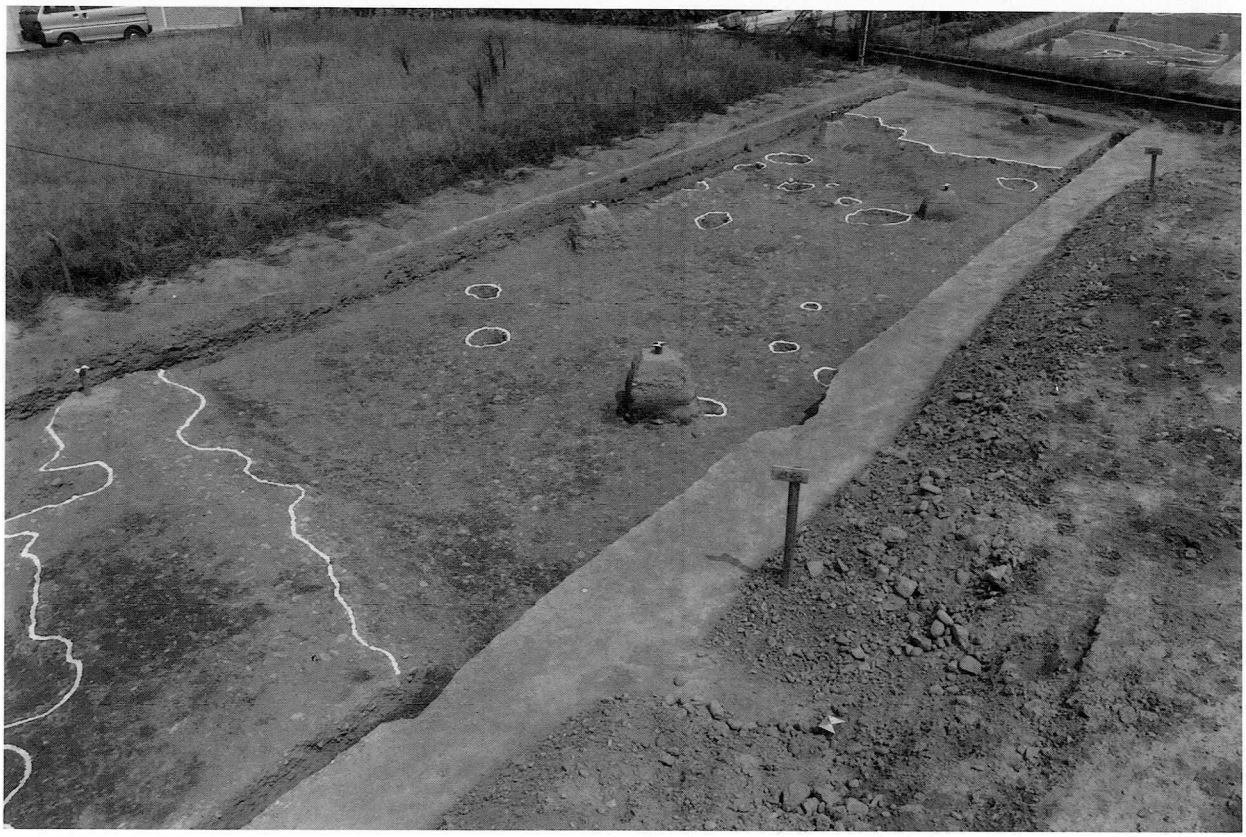


1．SX-1201　　南より



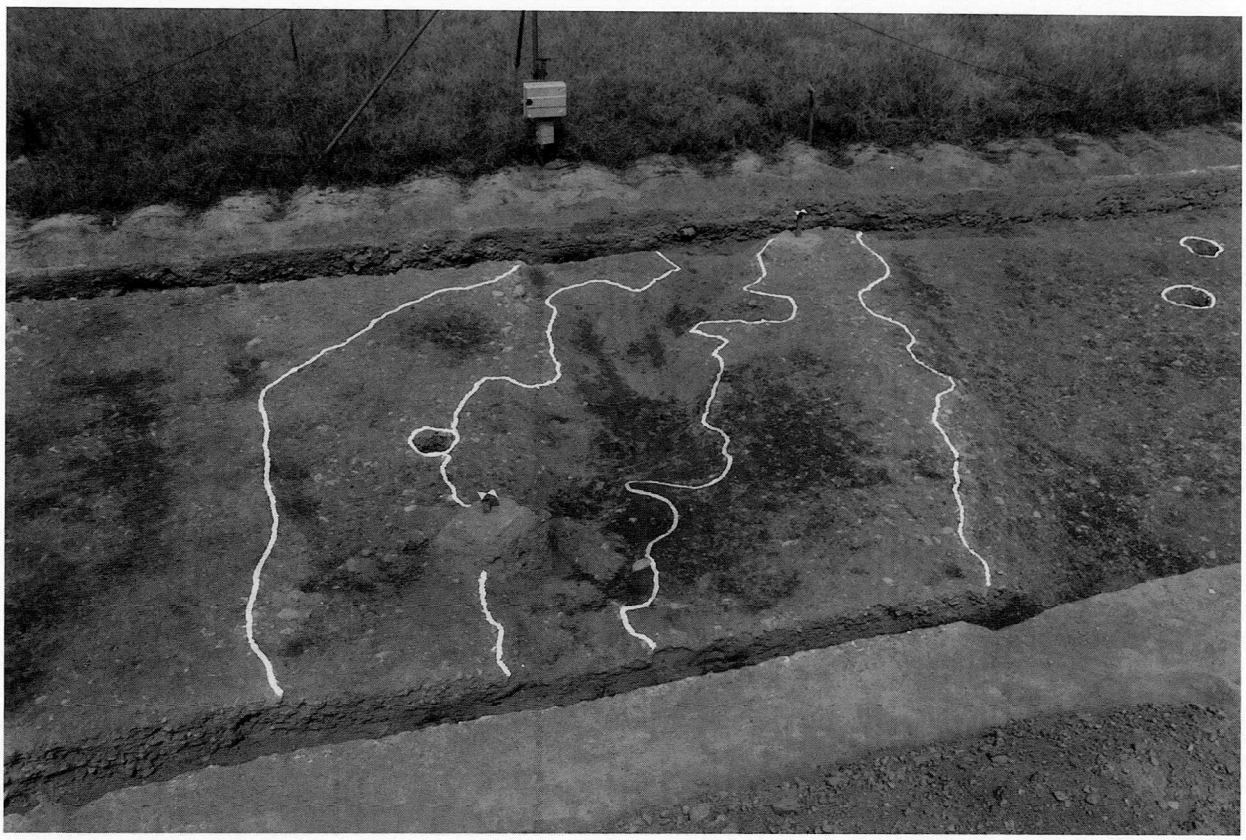
2．SX-1202　　南東より

1．Pit-1208、1209　　西より

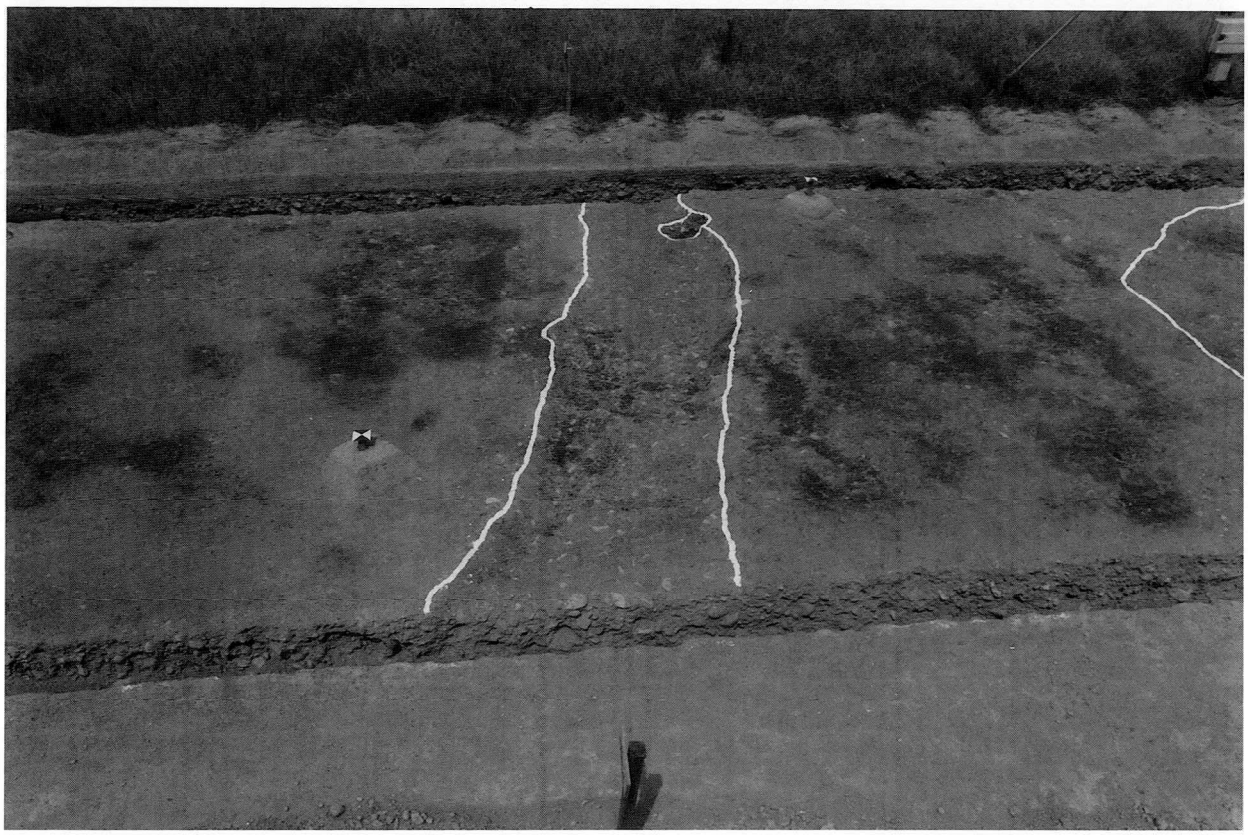


2．SX-1204　　南より

図版16　検出遺構

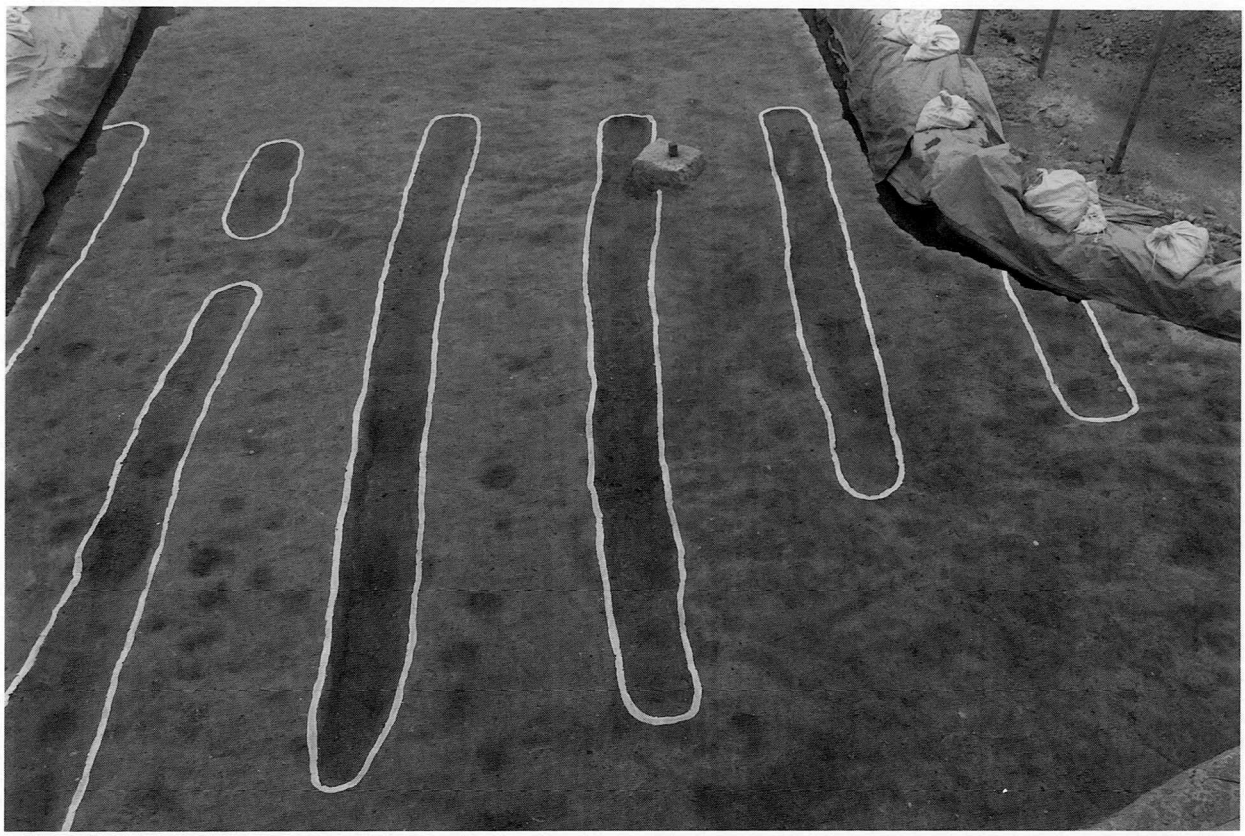


1．SX-1206　　南東より



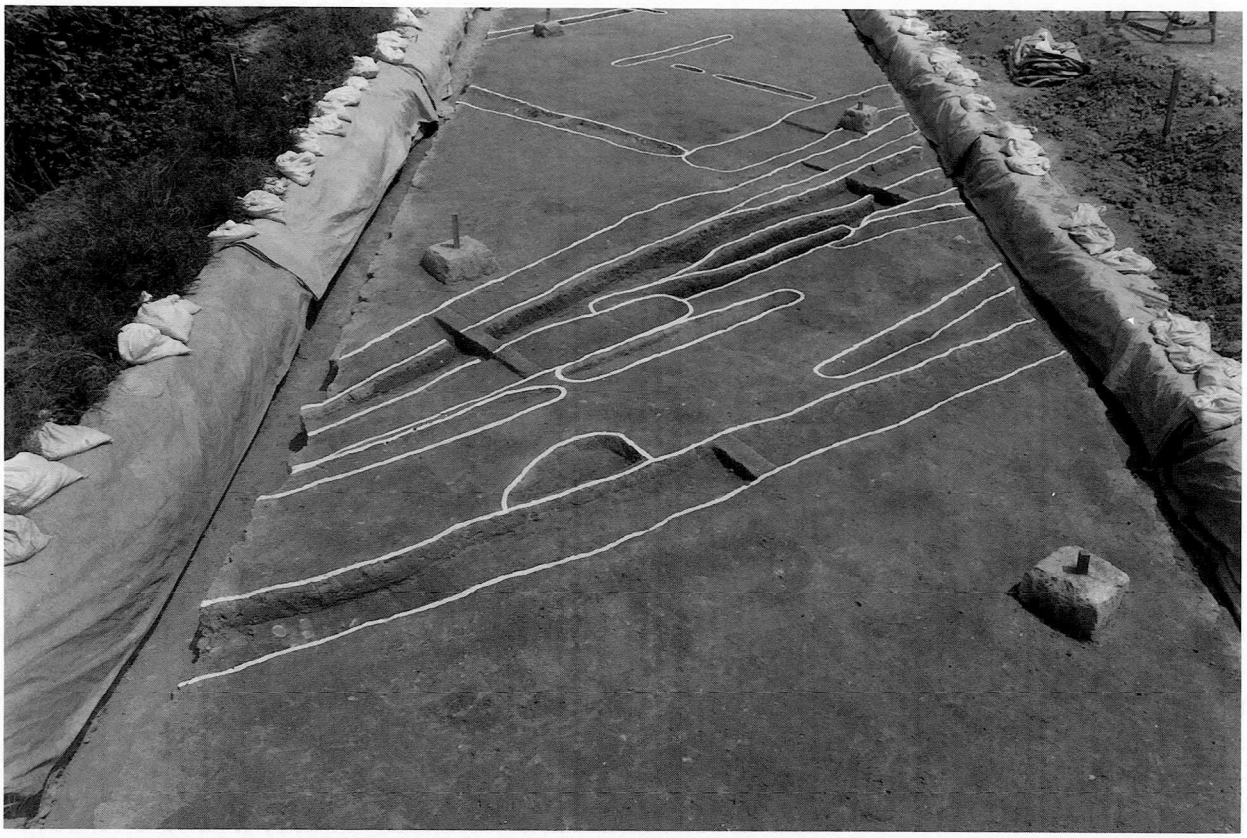
2．SX-1205　　南東より

図版17　検出遺構

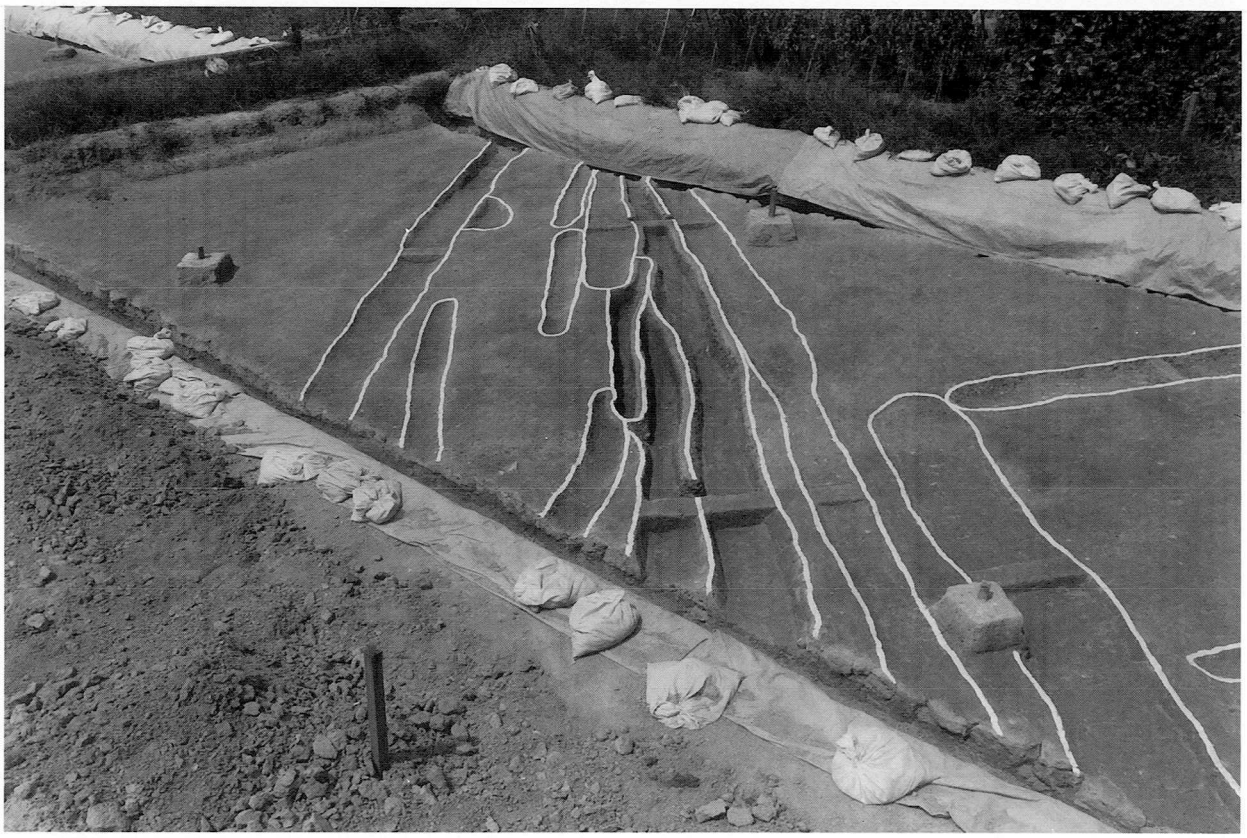


1．SD-2102～2107　　北東より

2．同　　上　　北西より

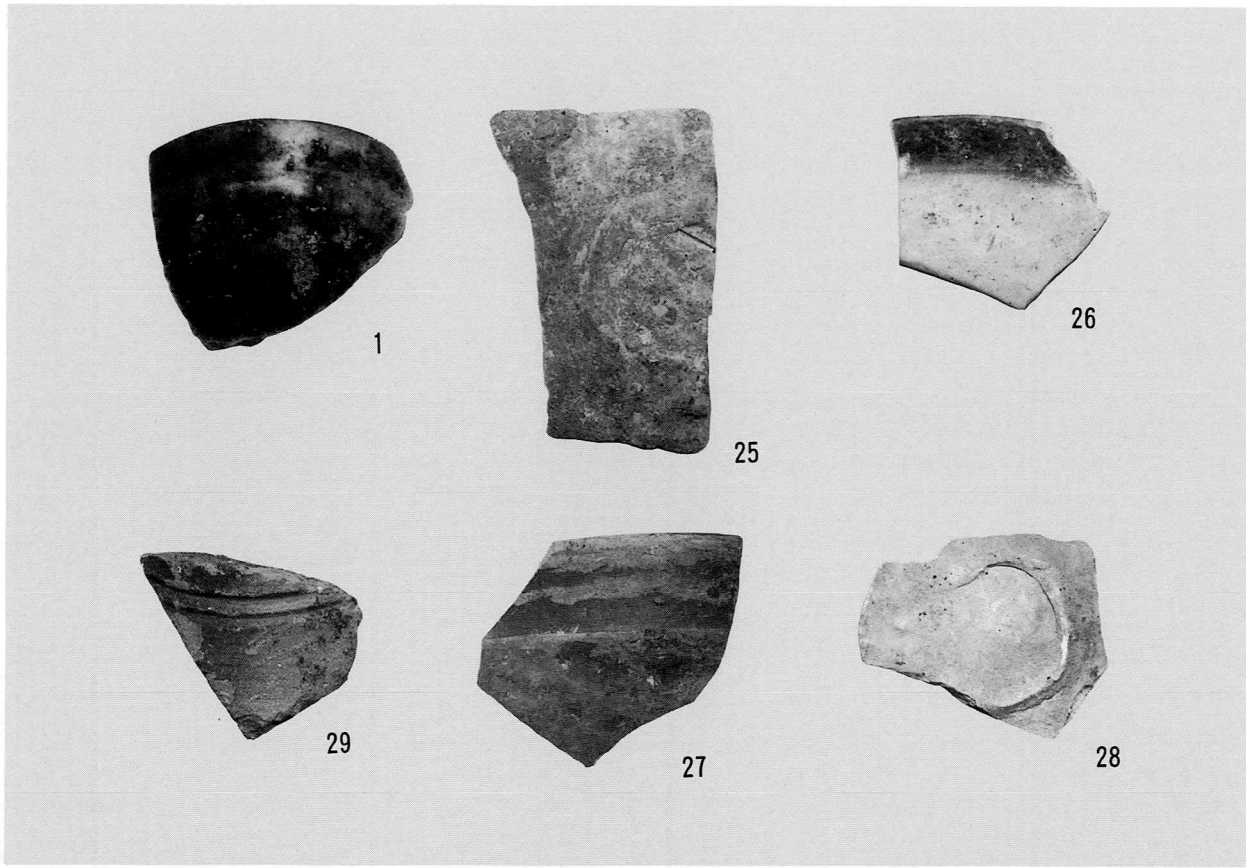


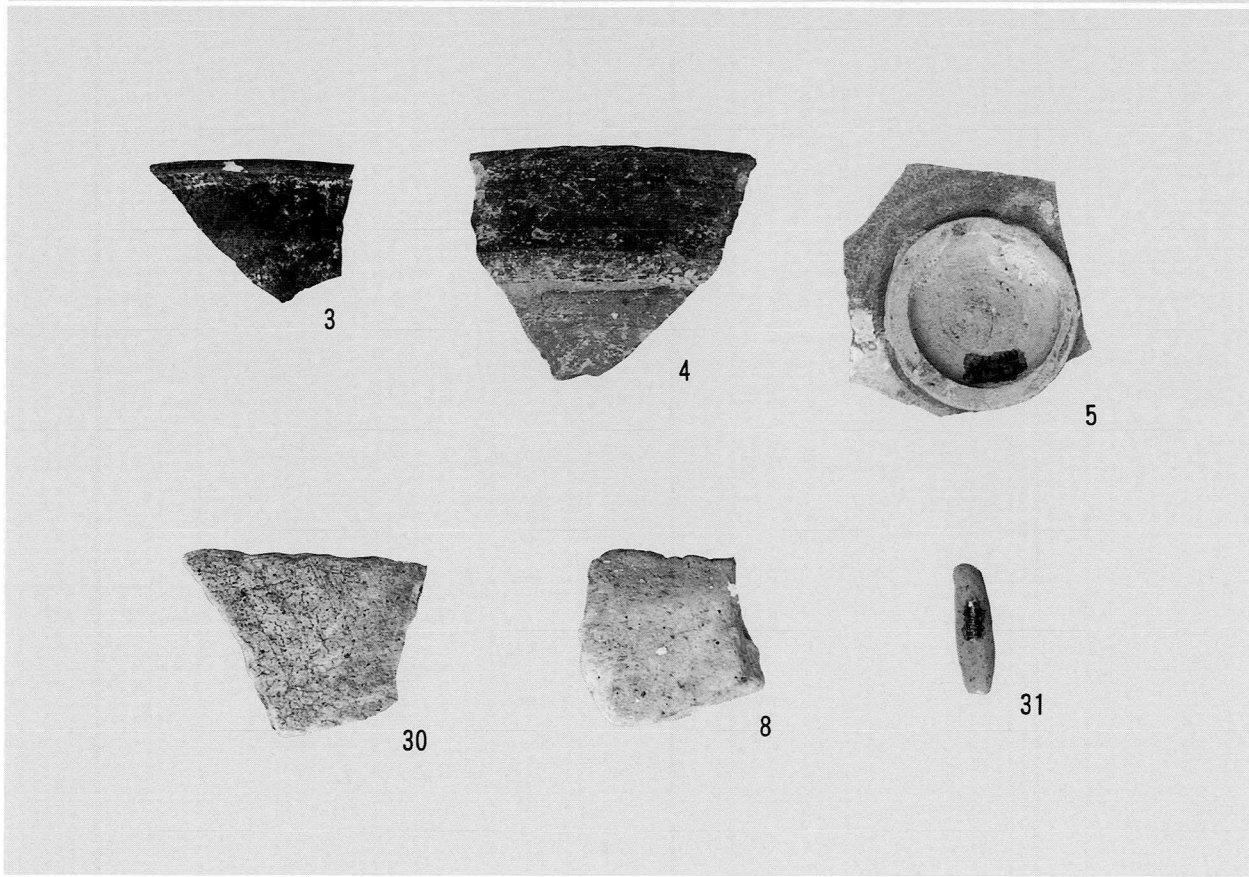
1．SD-1103～1119　　南西より



2．同　　上　　東より

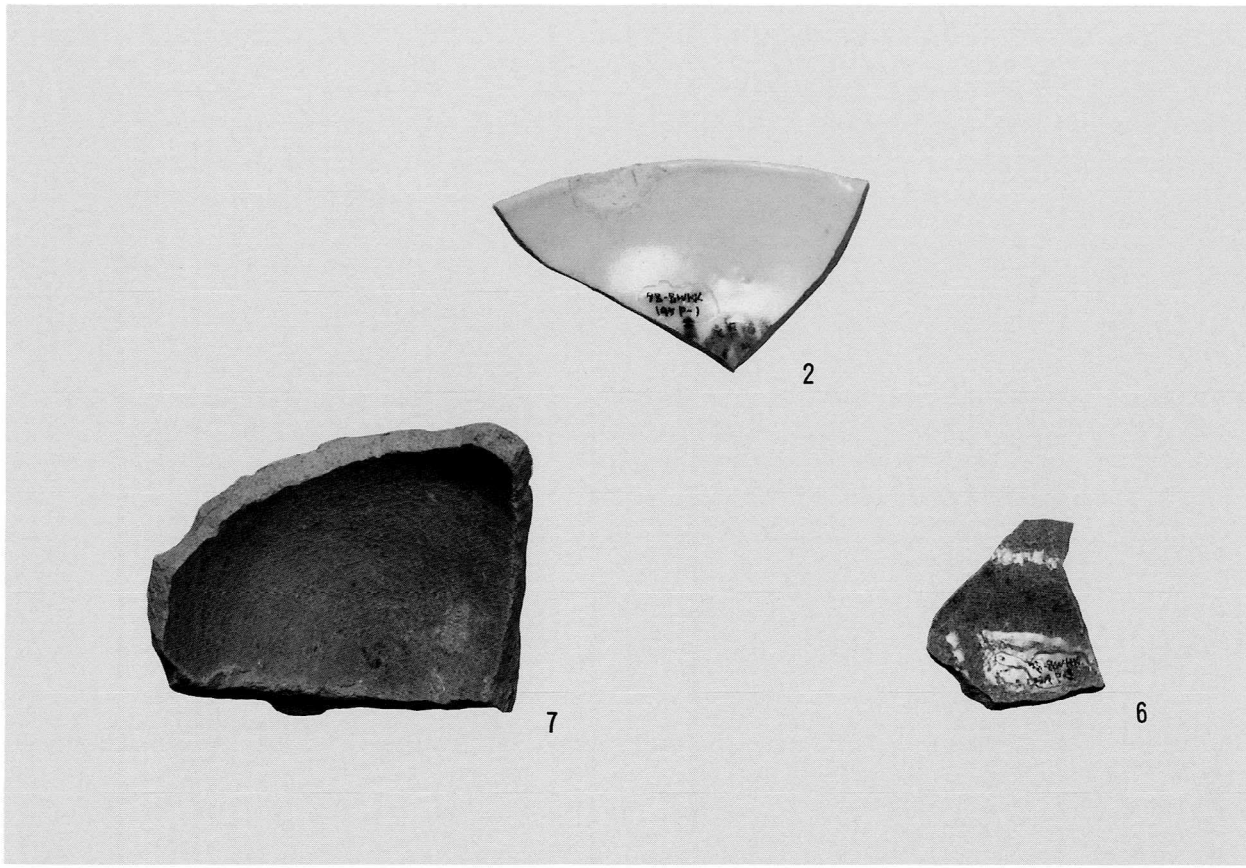
図版19　出土遺物

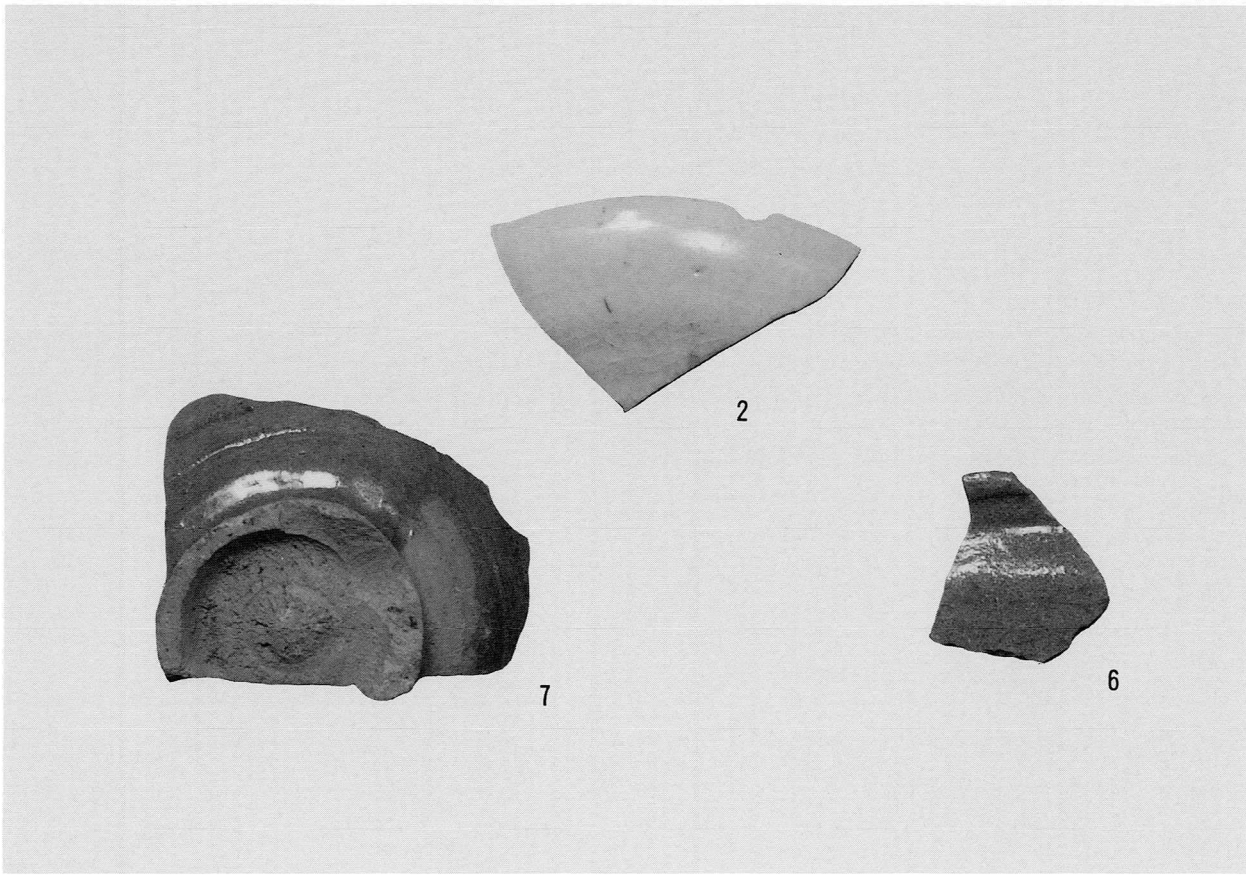




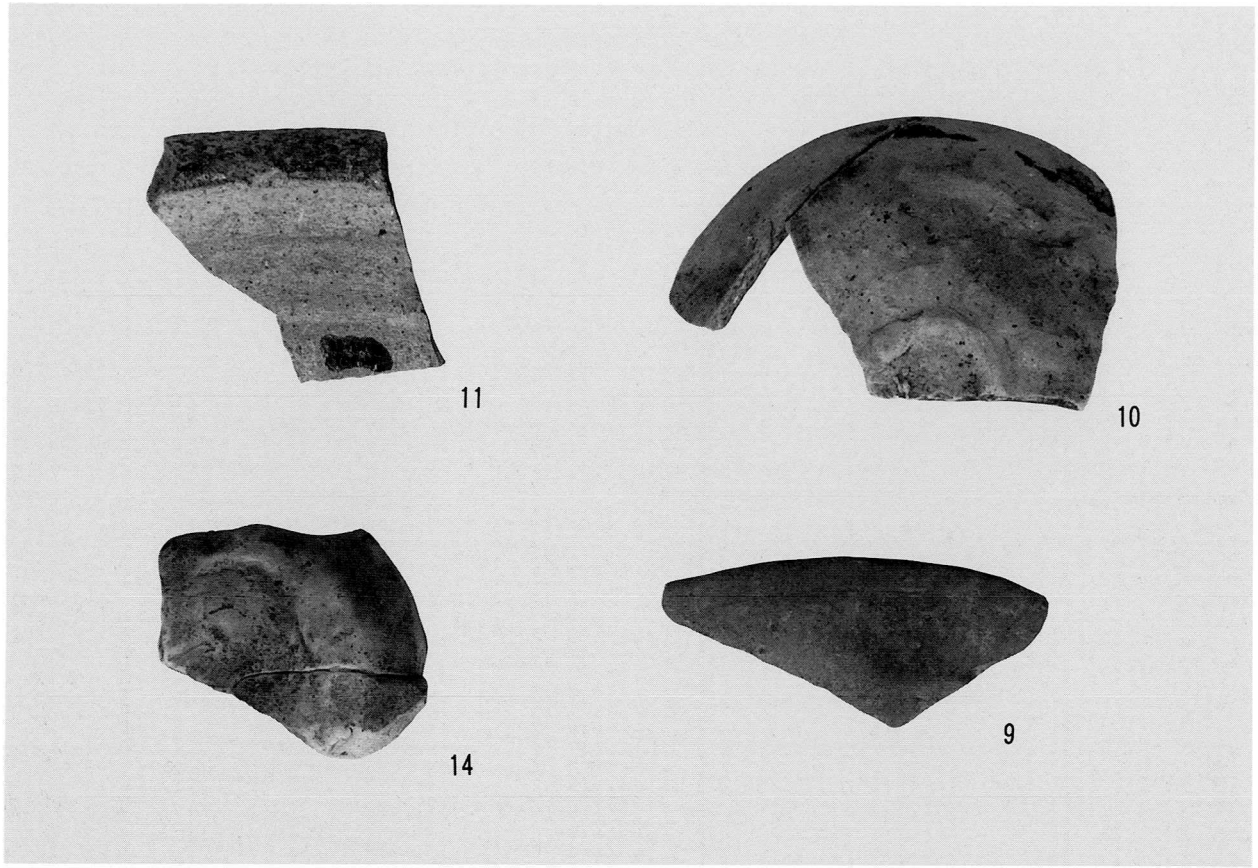
SX-2204(1、25～29)、SX-2239(3)、SX-2241(4、5)

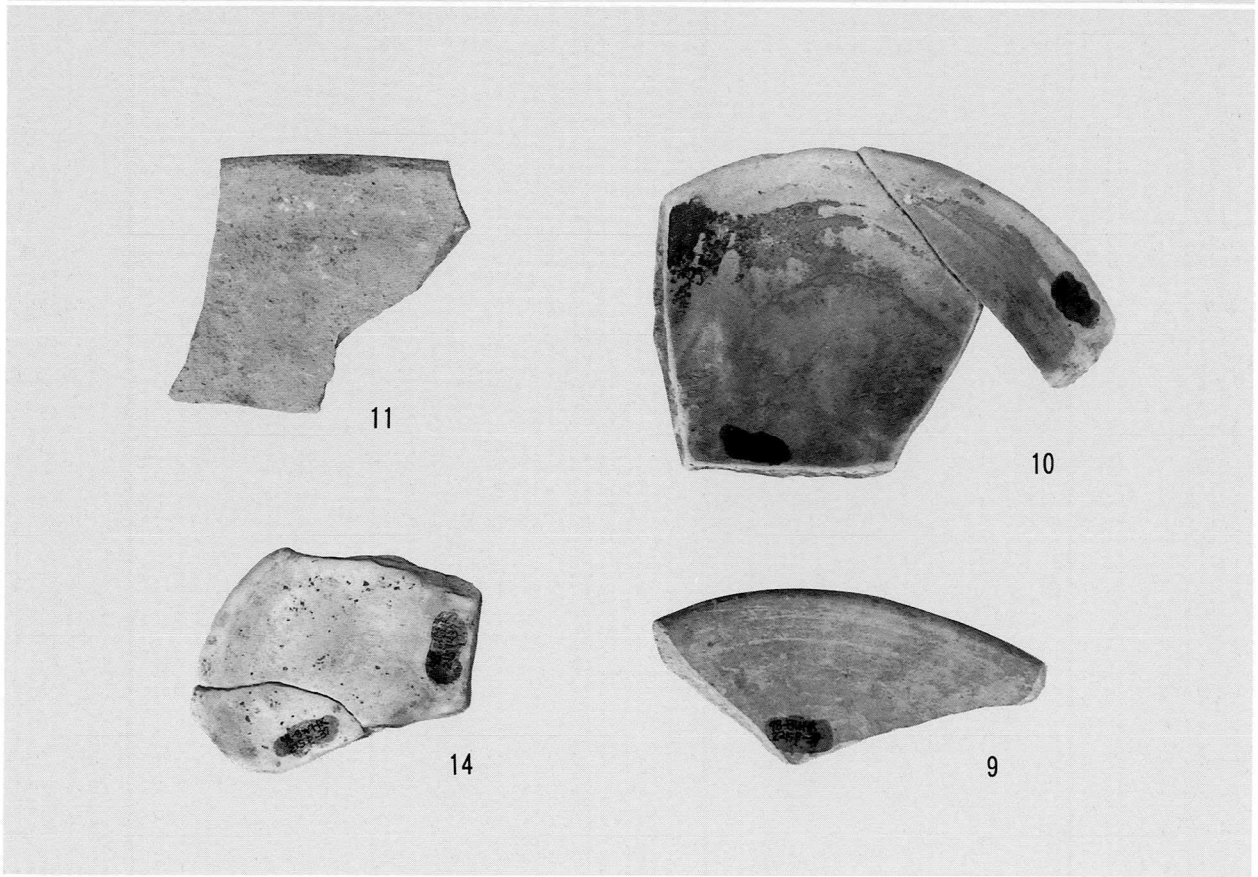
SX-1201(8、30)、SX-1102(31) 出土遺物



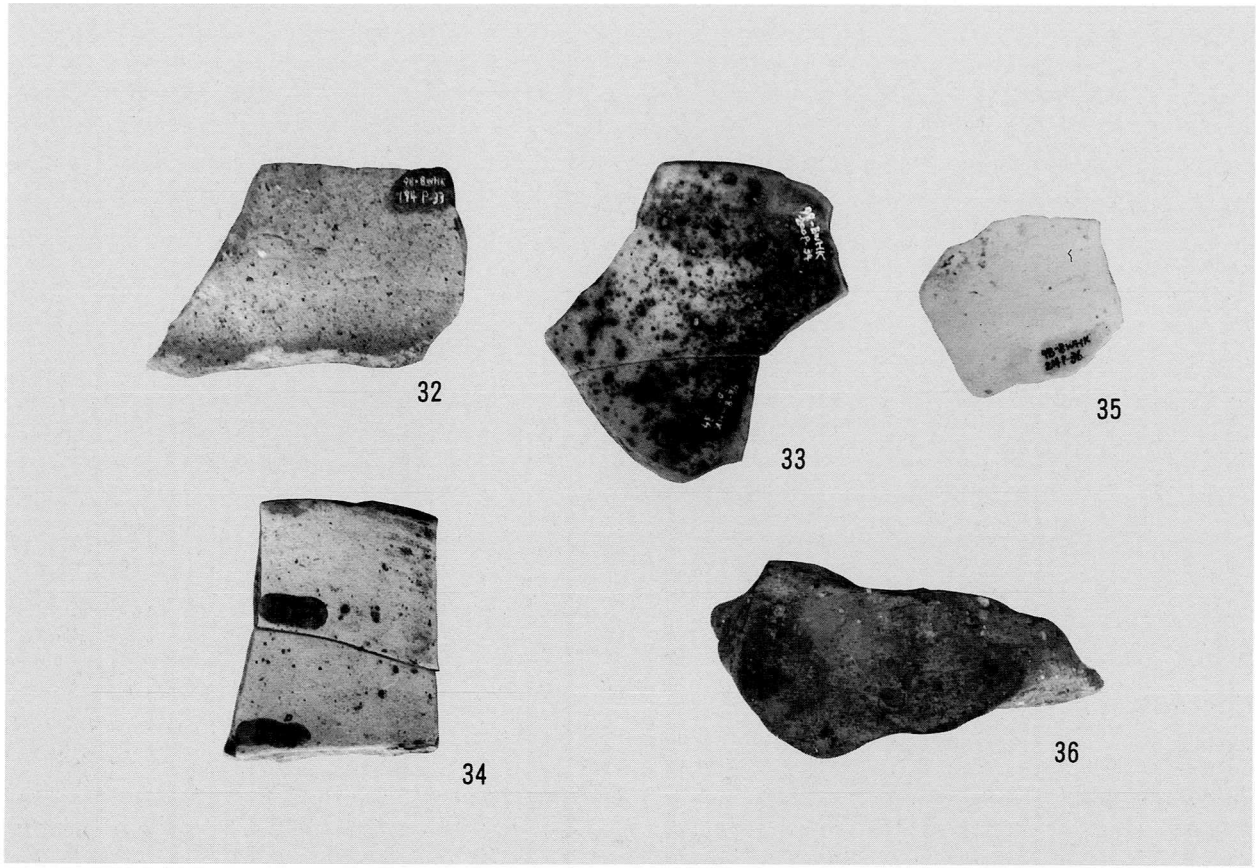


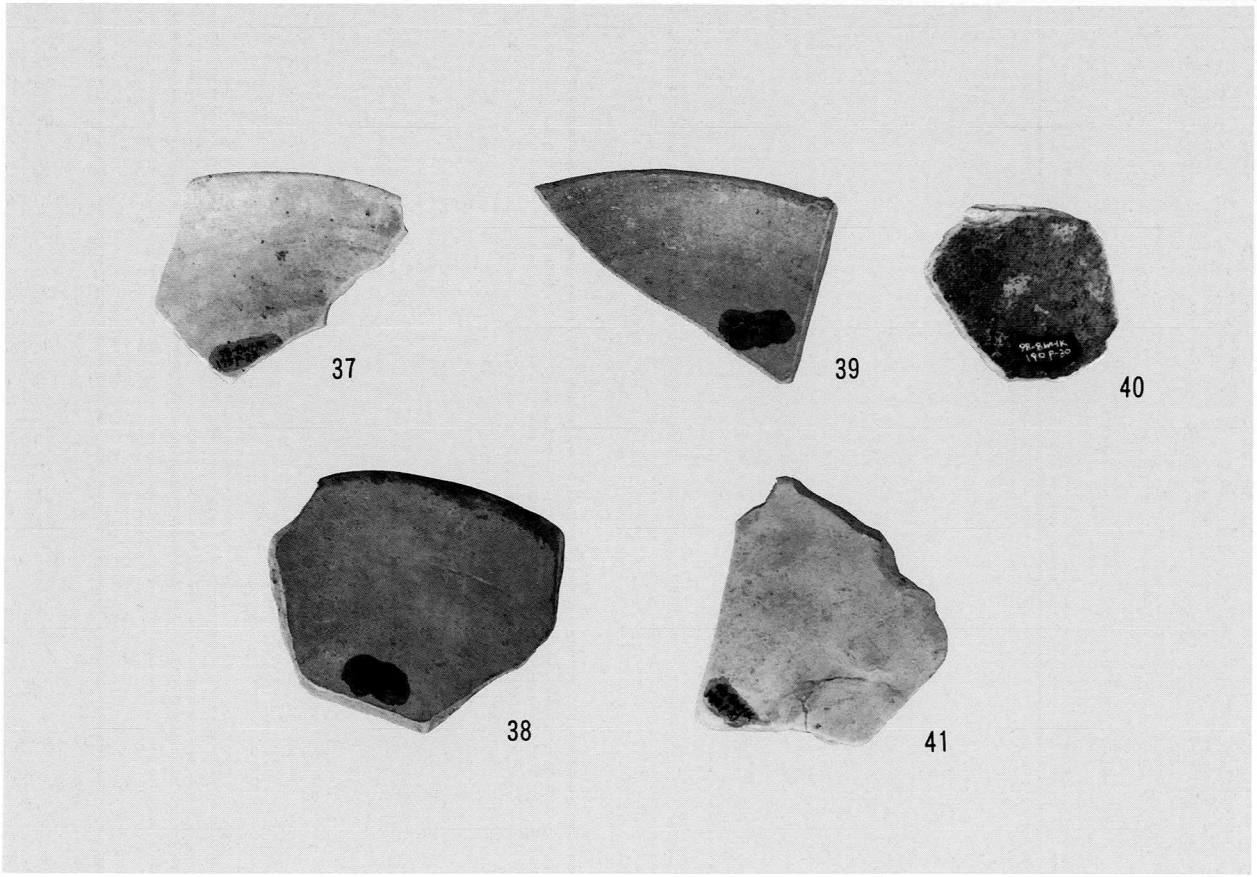
SX-2202(2)、SX-2203(6、7) 出土陶磁器



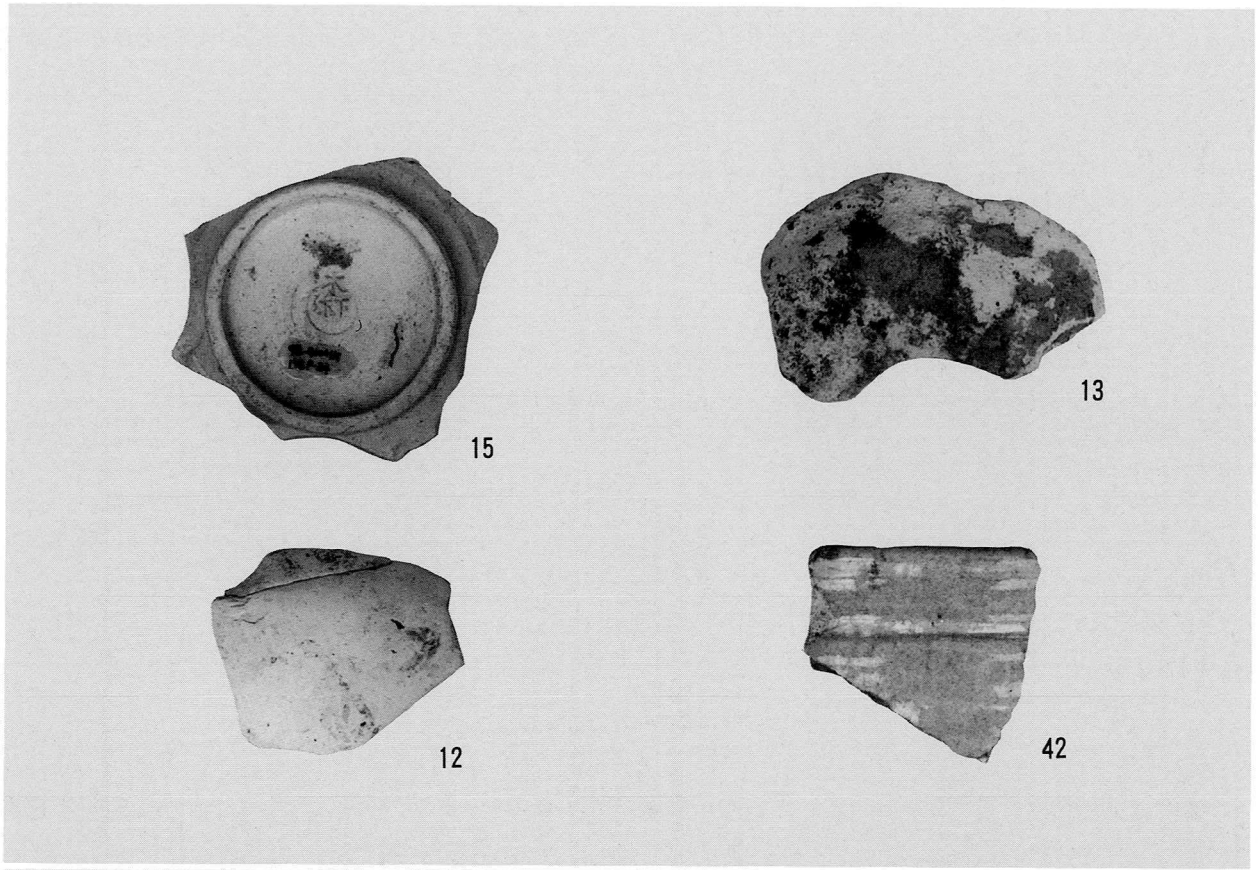


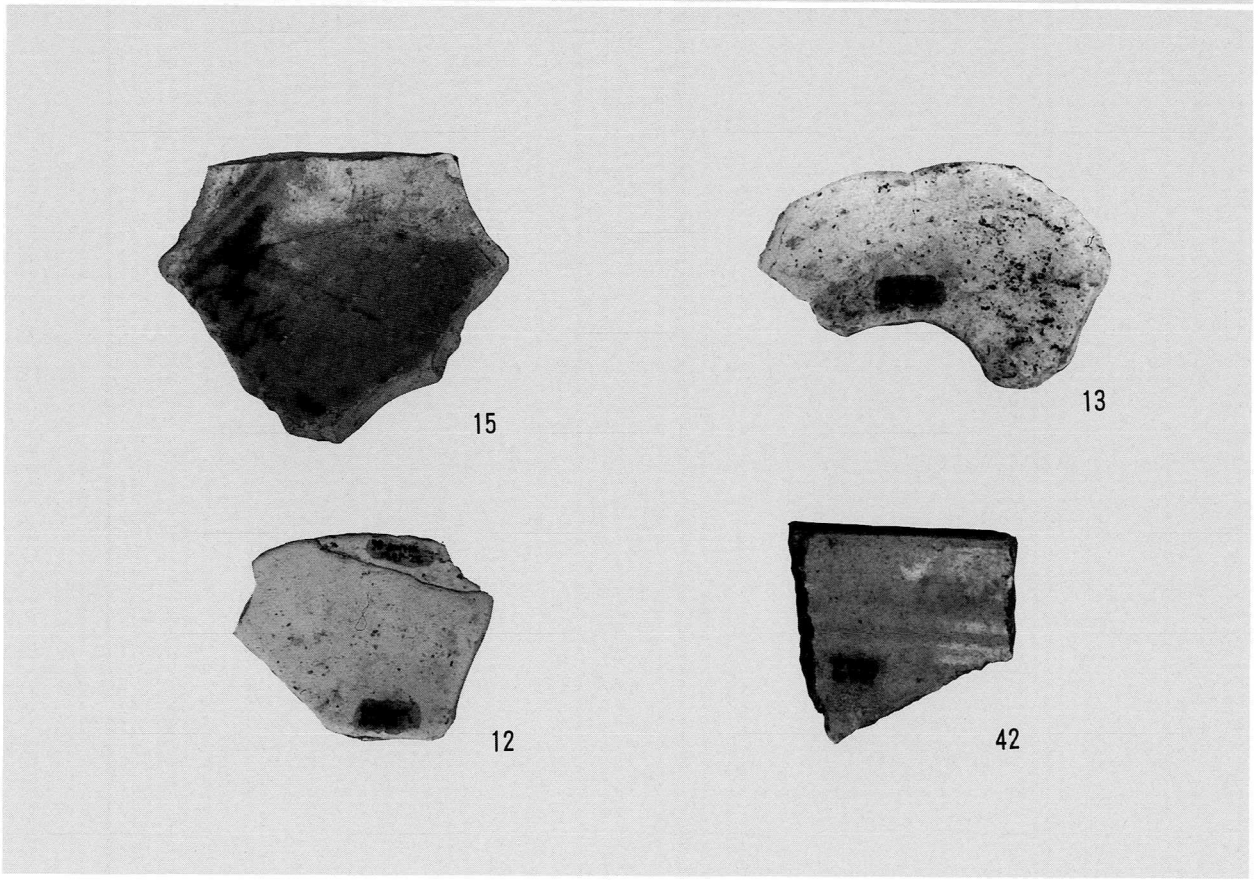
SX-1204 出土土器





SX-1204 出土土器



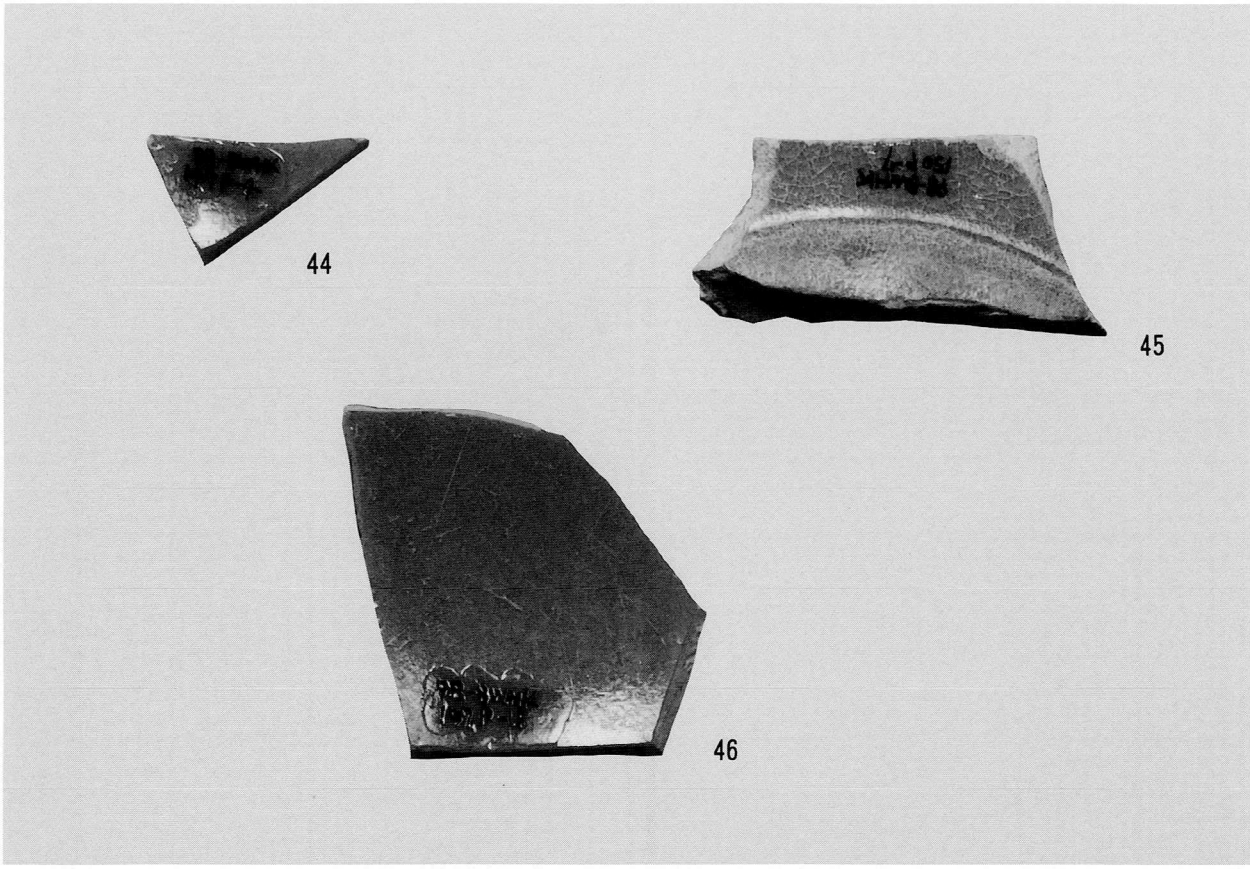


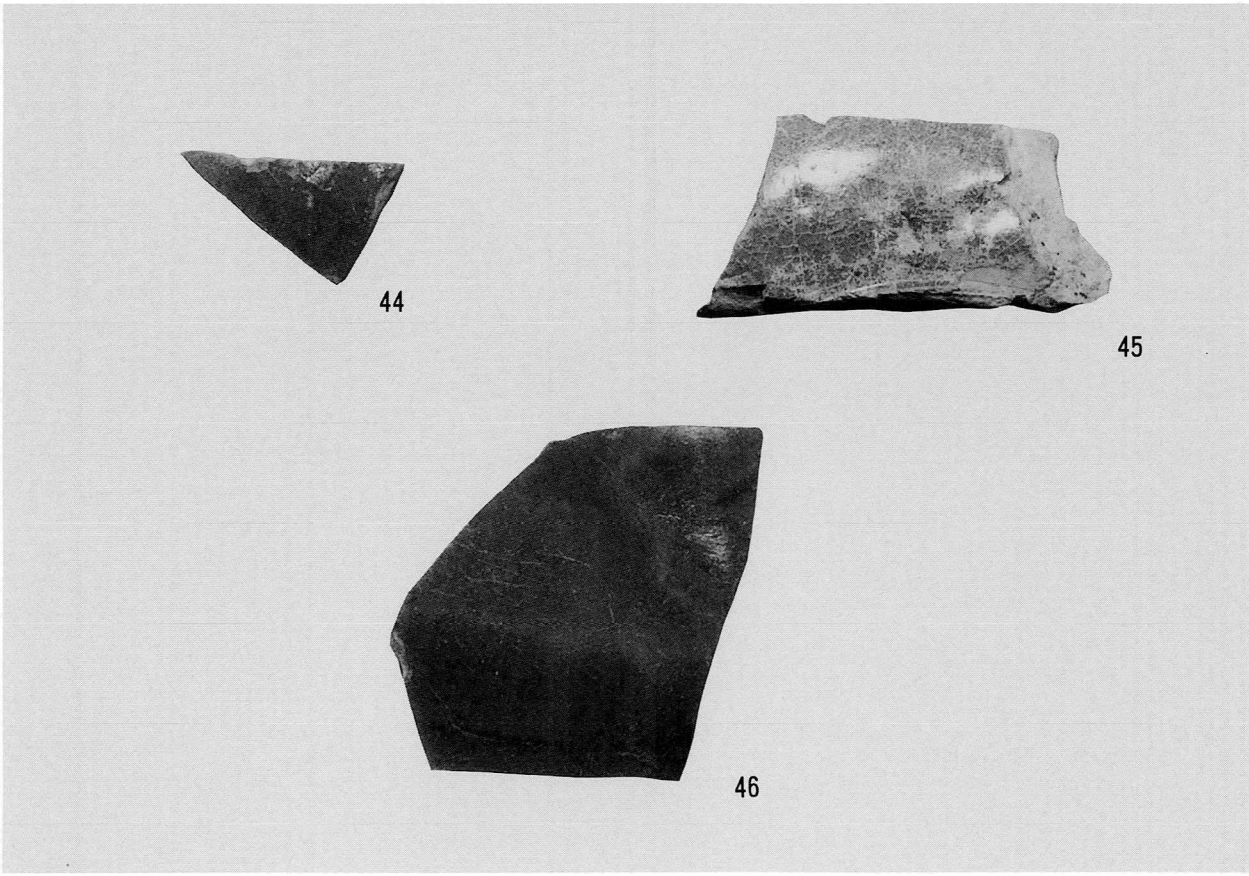
SX-1204 出土土器

16

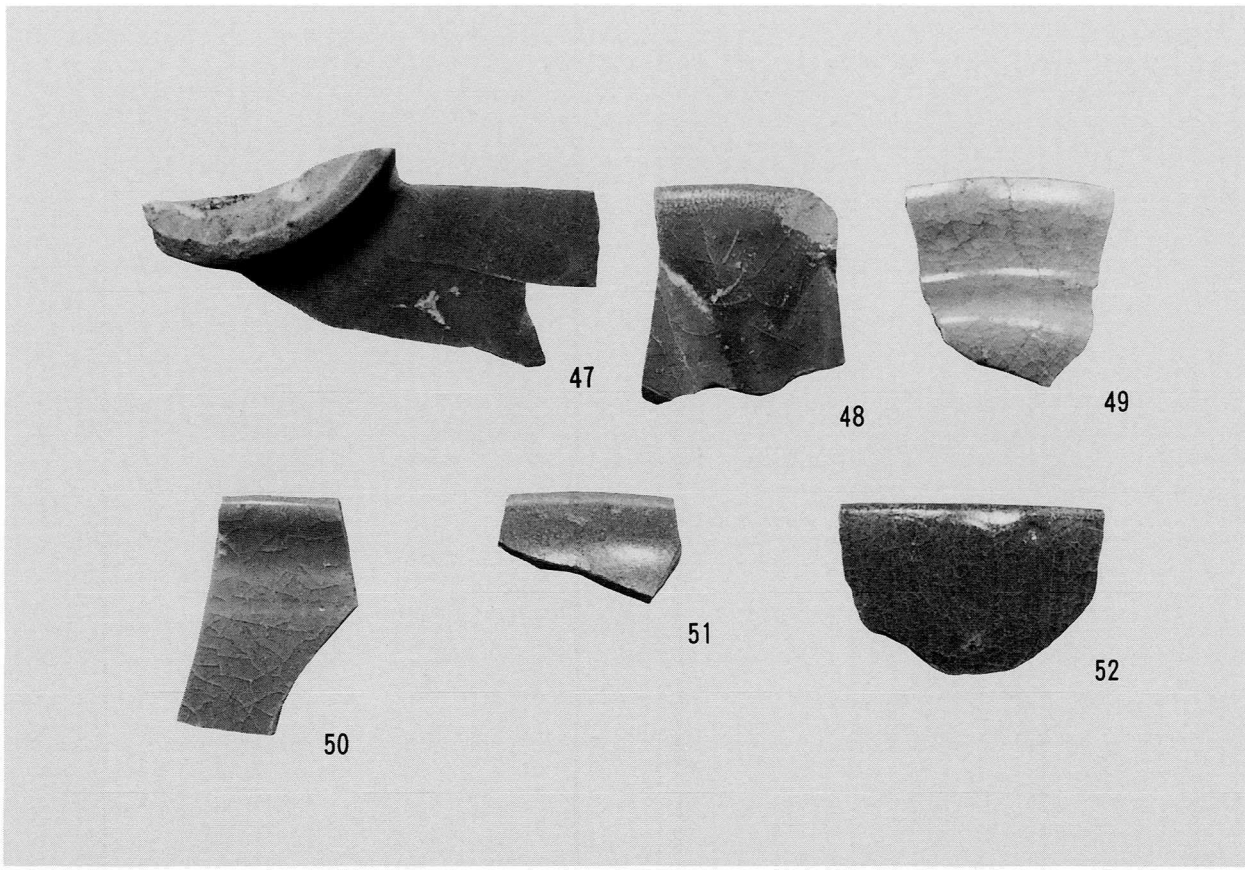
43

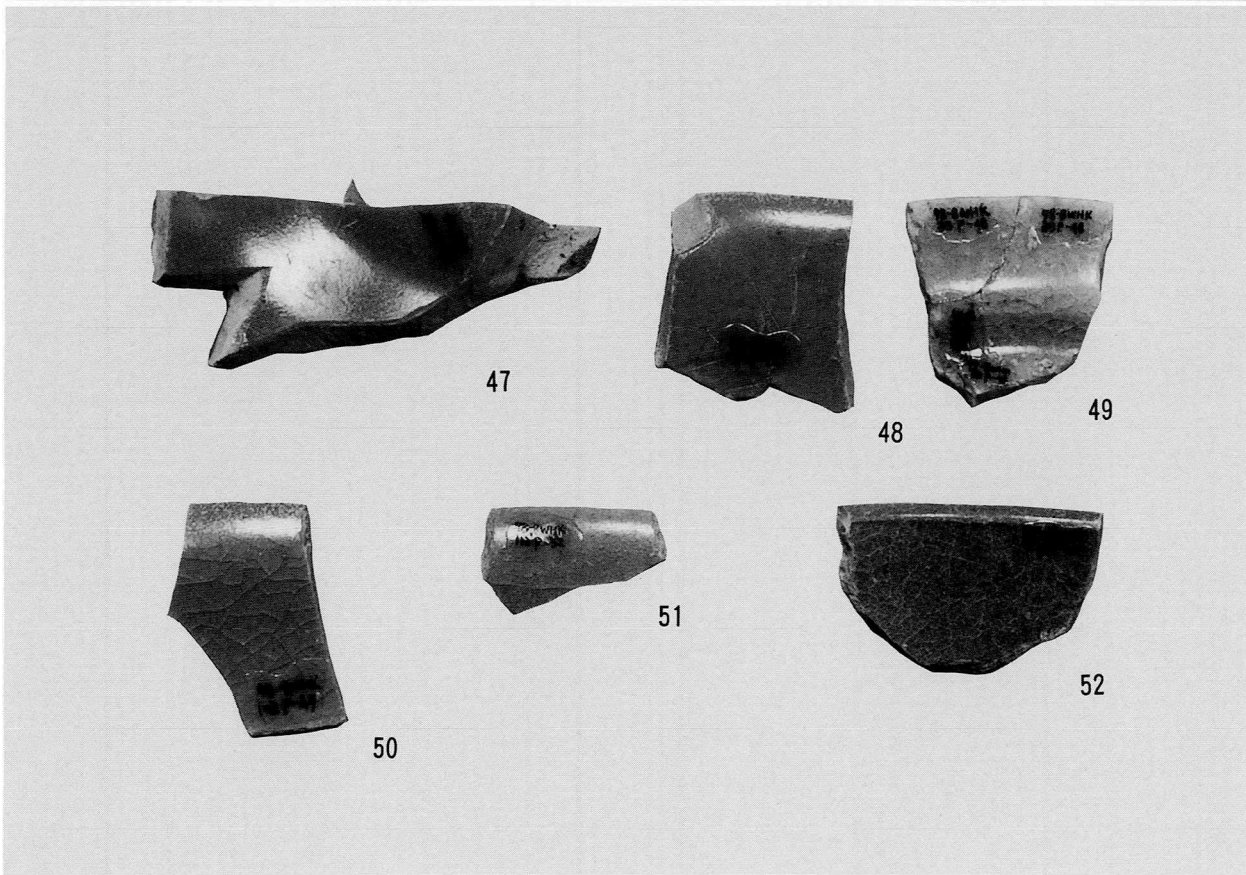
SX-1204(写真上)、SX-1206(16、43) 出土土器



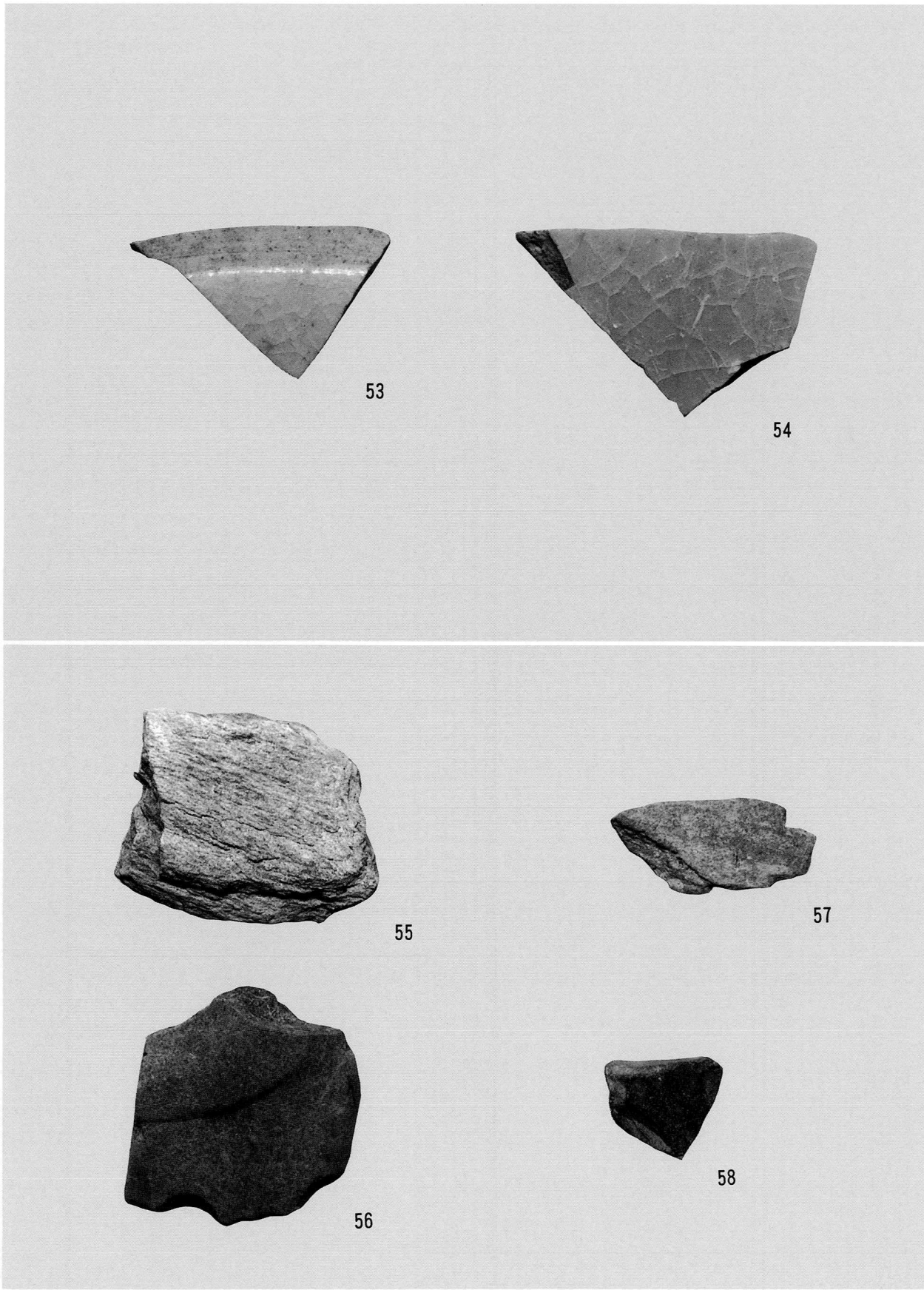


SX-2204 出土磁器

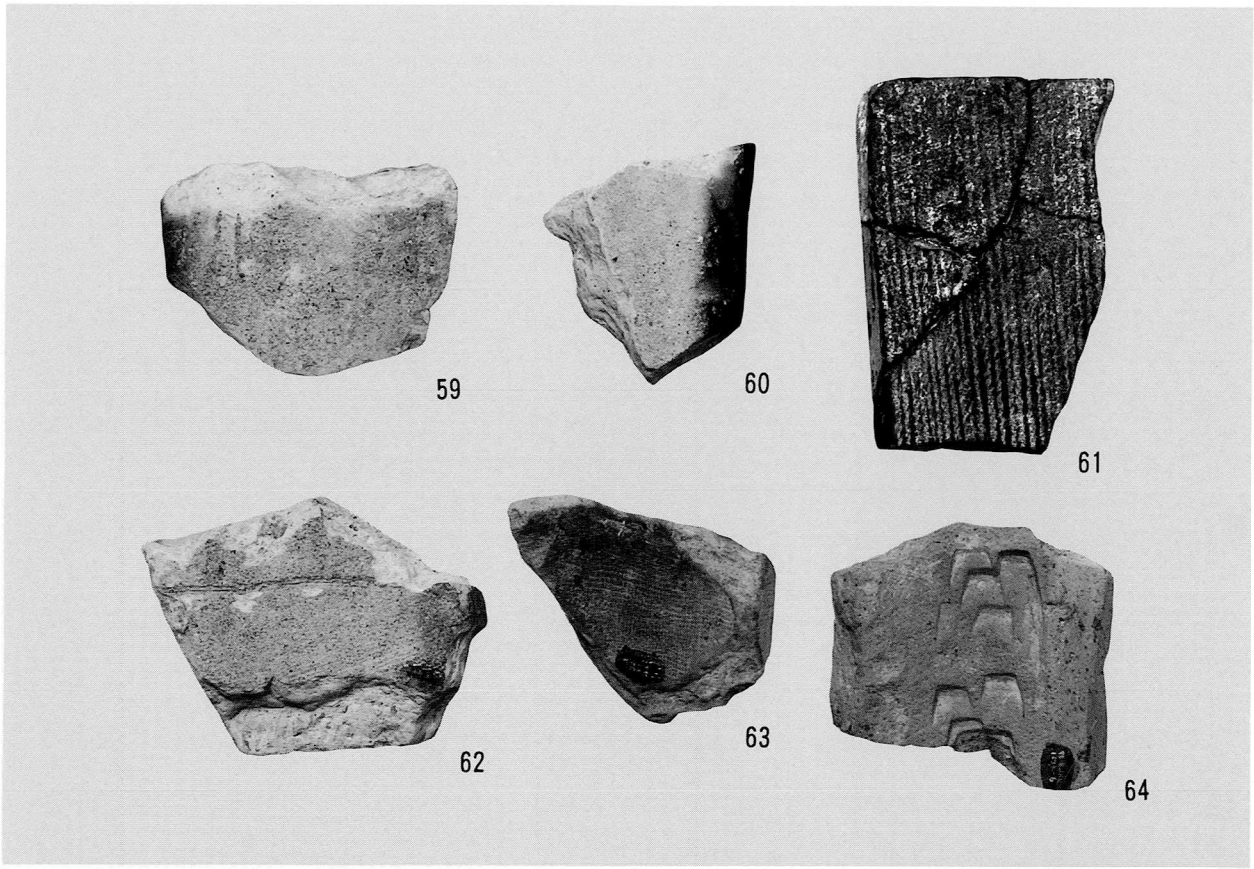


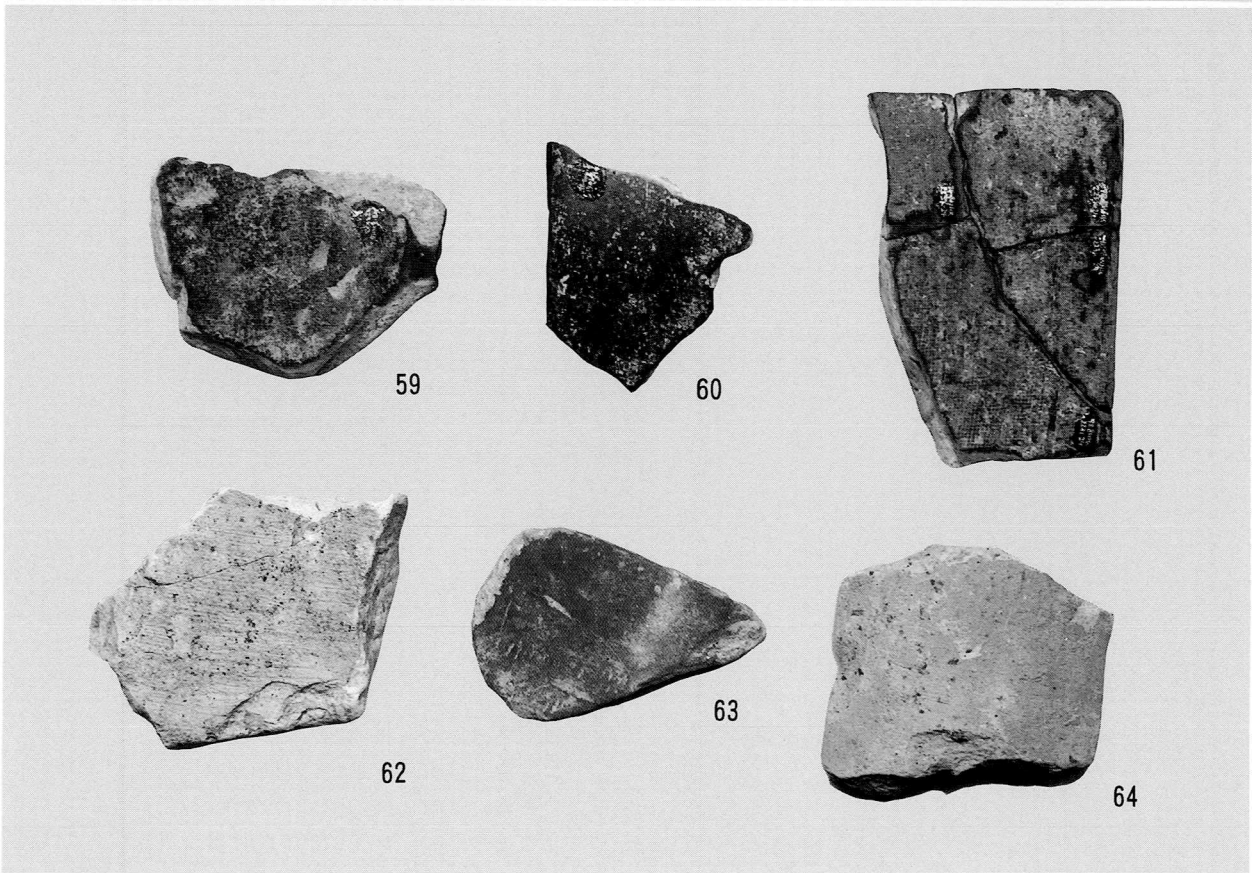


SX-2204(47)、SX-1204(48)、第２区第２層(49､50)、第２区第５層(51､52)

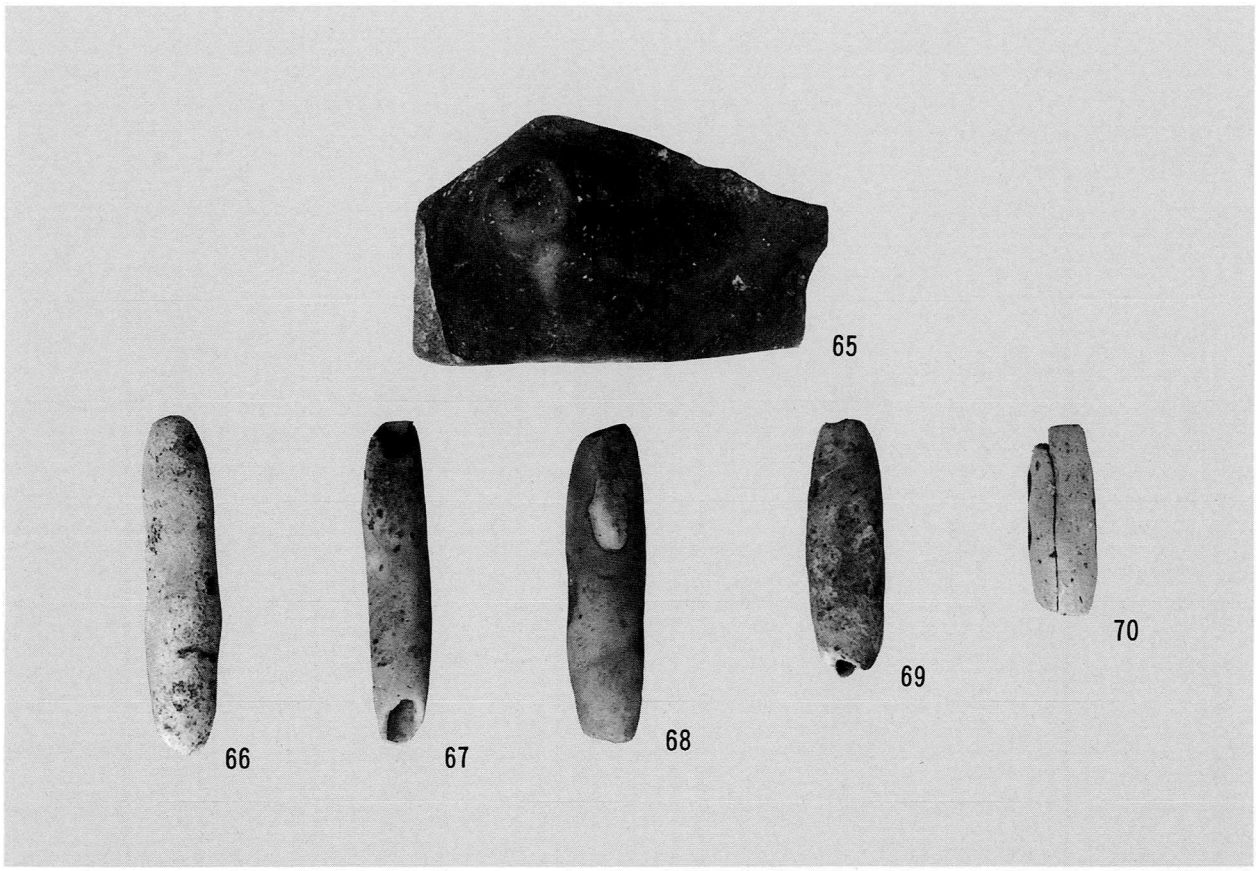


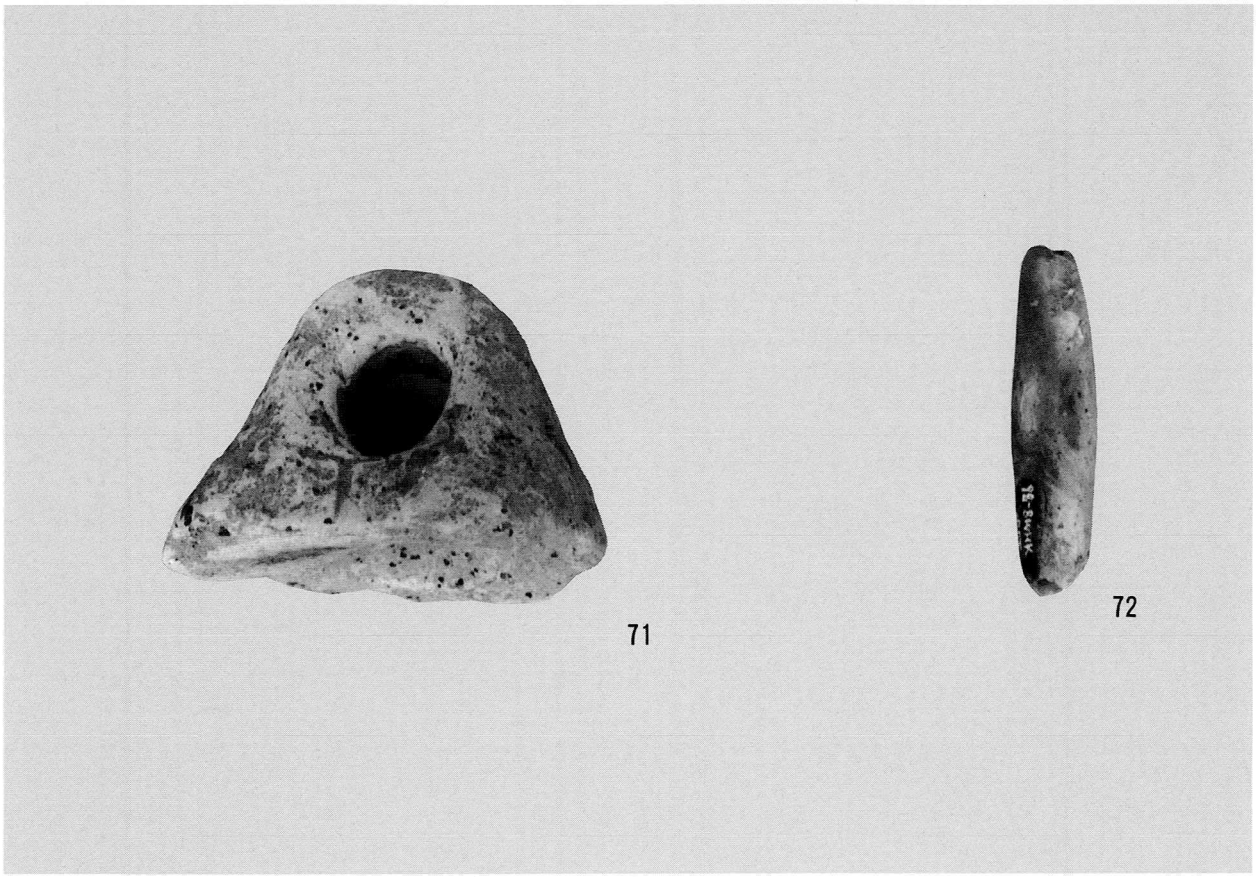
SX-2204(53)、第2区第4層(54)、SX-1109(55)、SX-1204(56)
第2区第3層(57、58) 出土石材



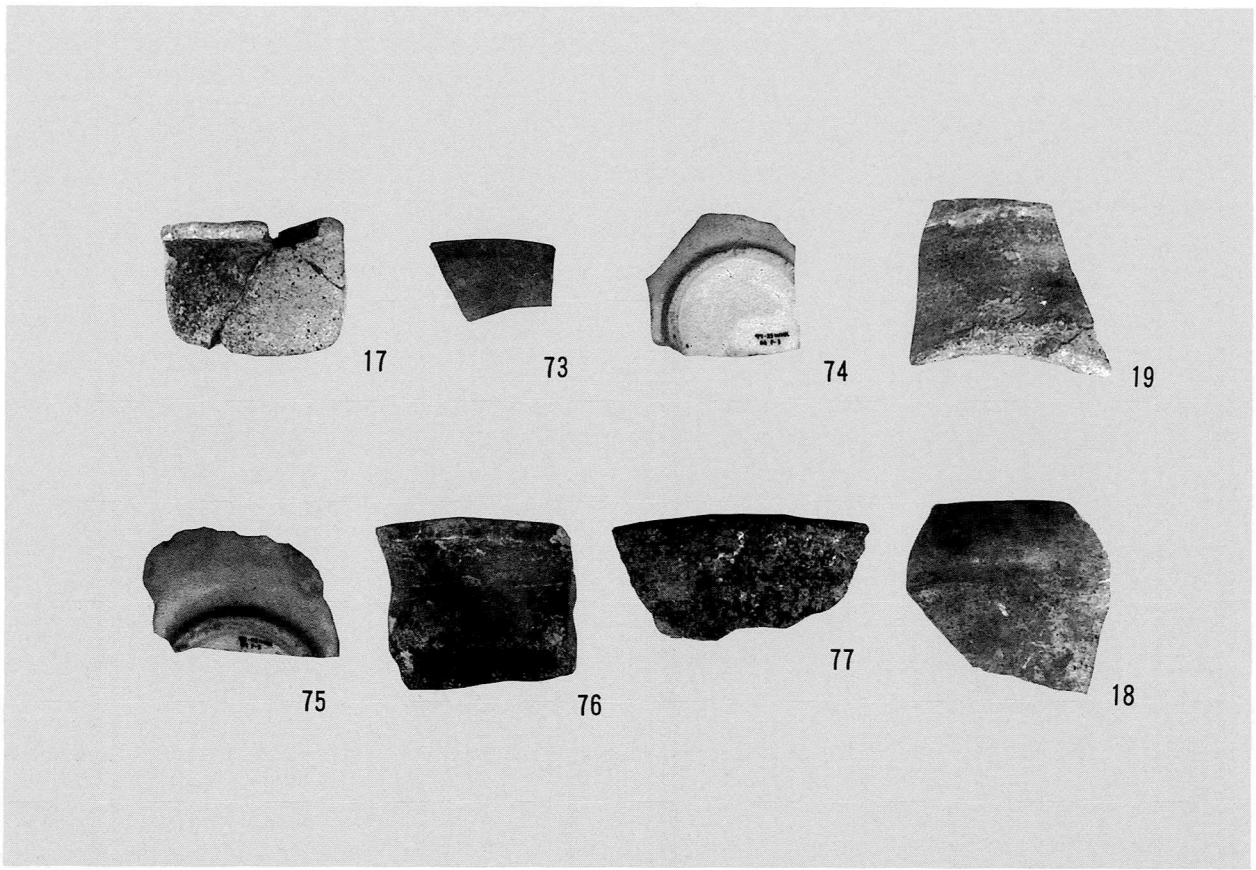


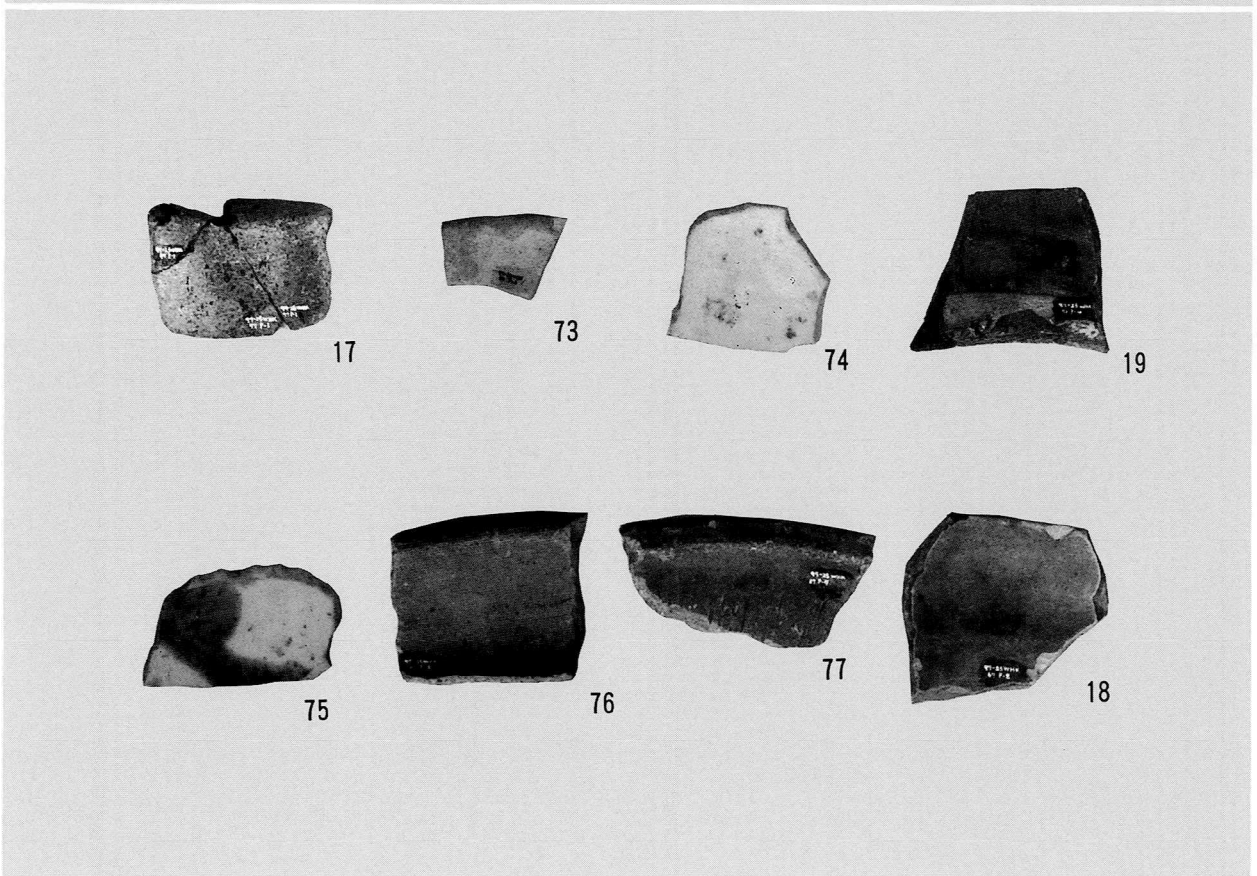
SX-2203(59、63、64)、SX-1201(60)、SX-1210(61)、側溝(62) 出土瓦



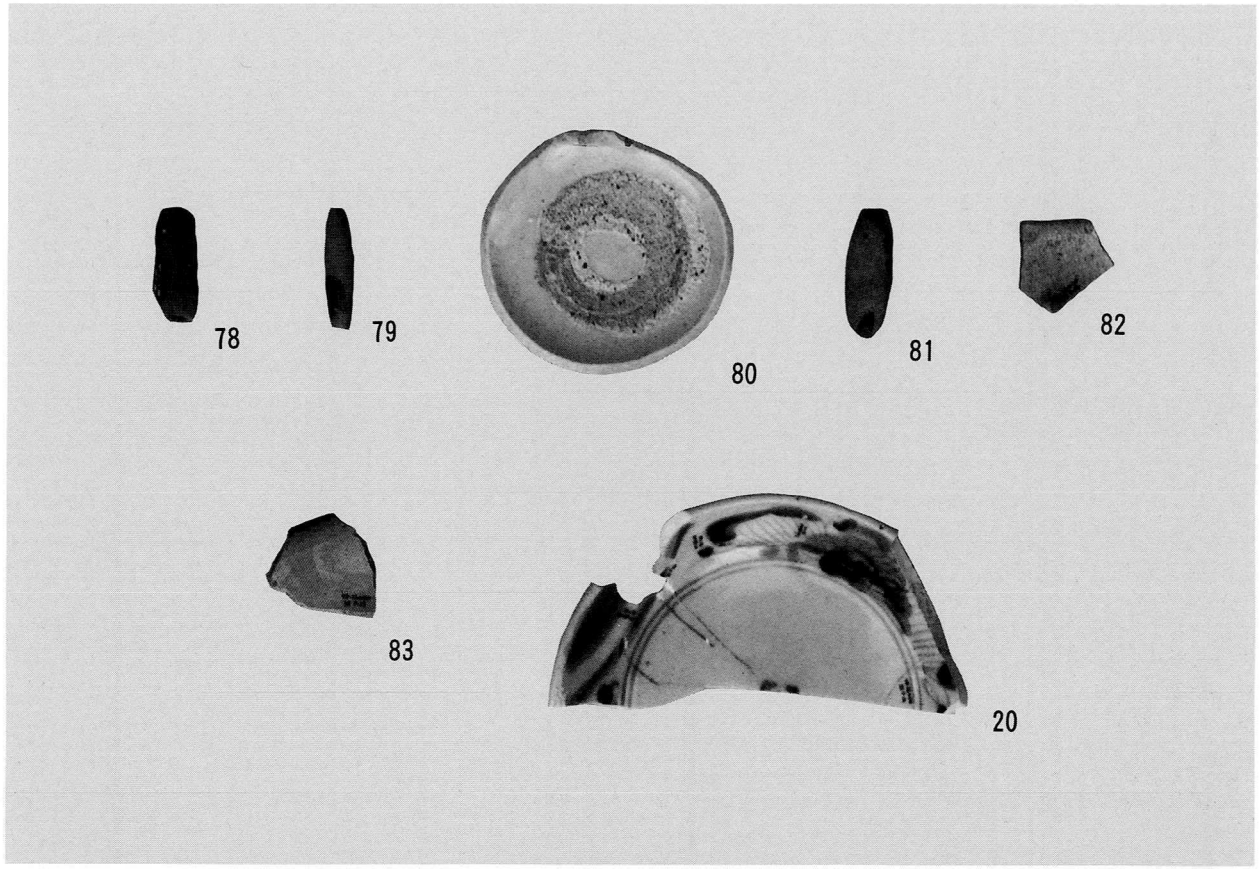


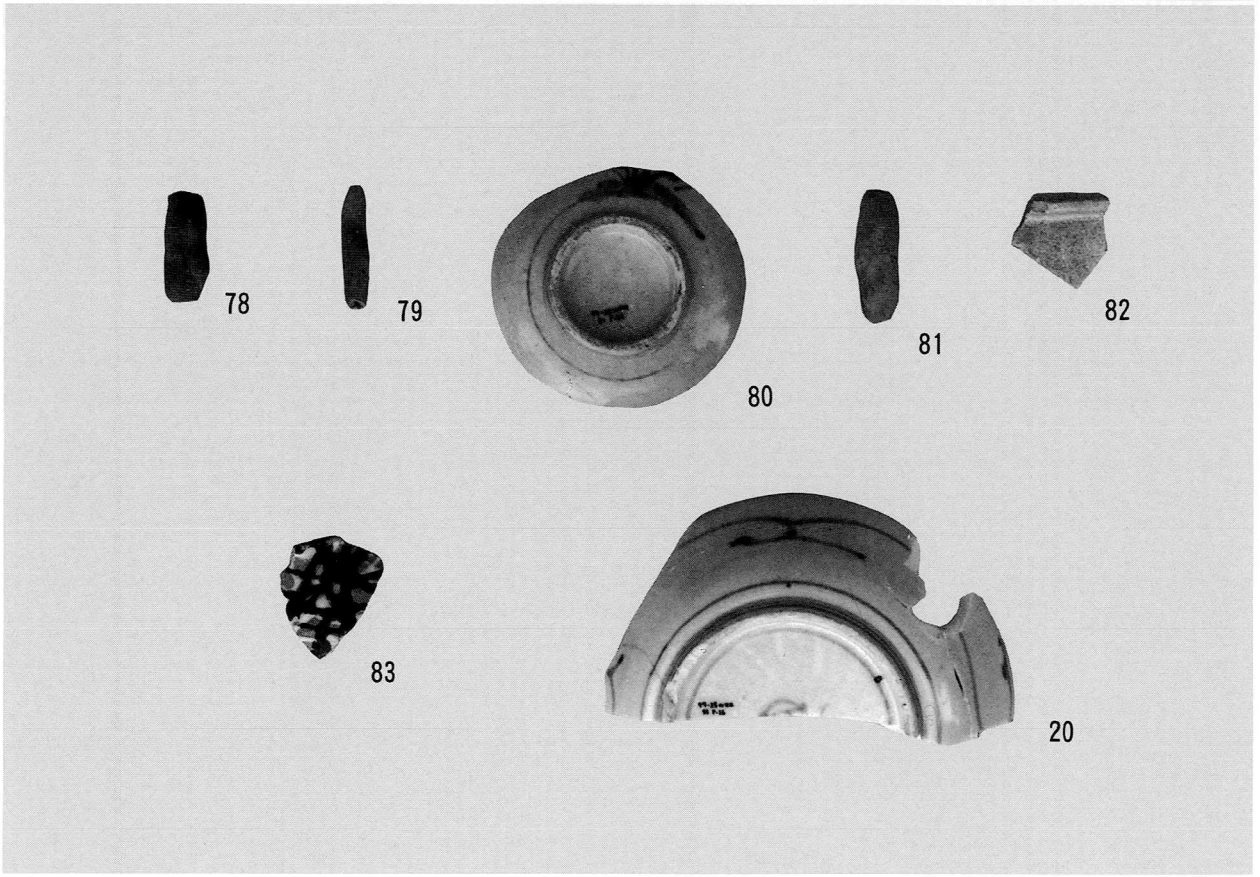
第2区第2層(65～69)、第2区第3層(70～72) 出土土器



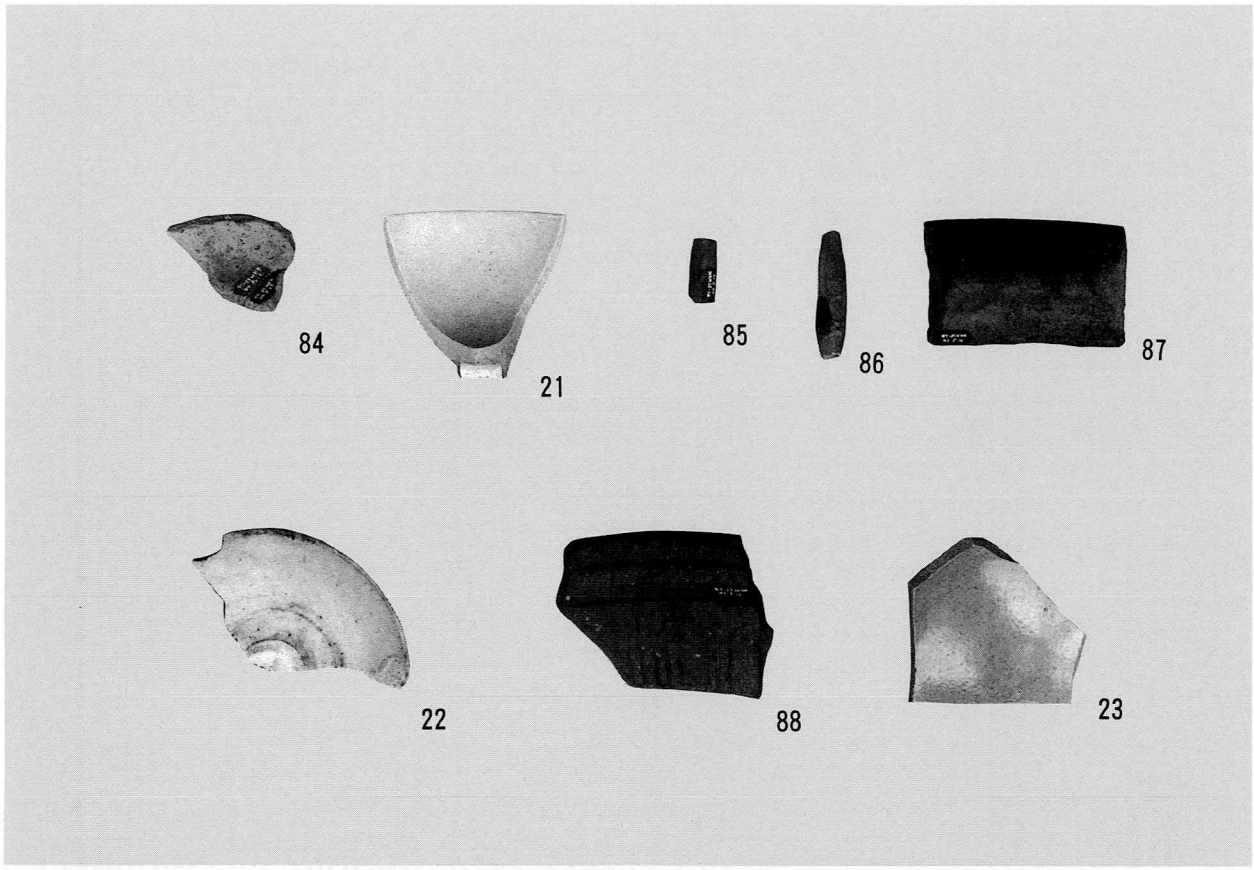


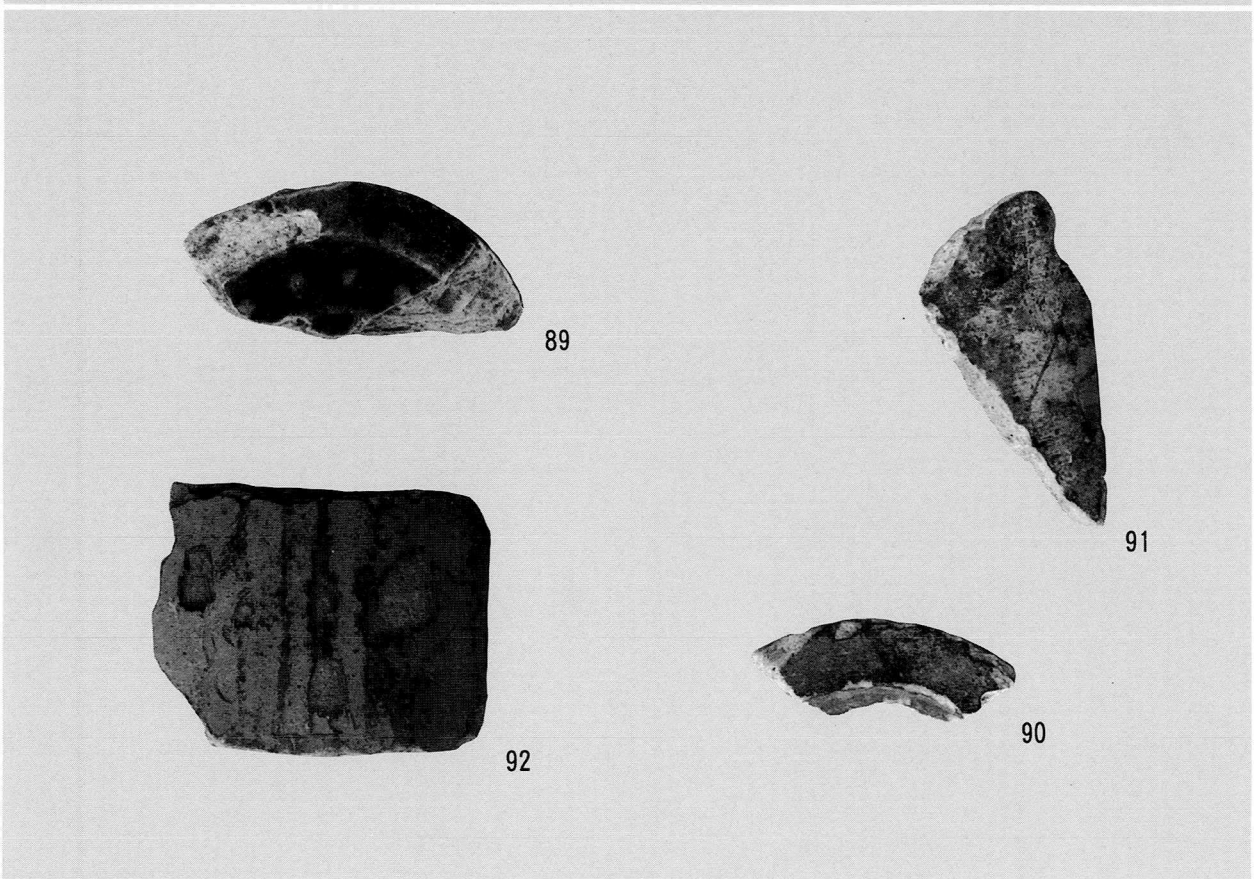
SX-201(17、73、74)、SX-202(19)、SX-204(75)、SD-201(18、76、77) 出土遺物





第１区第２層 出土遺物





第１区第２層（21～23、84～89、91）、側溝(92)、精査(90) 出土遺物

貝塚市埋蔵文化財調査報告　第48集

脇浜川端遺跡発掘調査概要

発　行　日　　1999.3.31
編集・発行　　貝塚市教育委員会
　　大阪府貝塚市畠中1－17－1
印　　刷　　春　木　印　刷　所